

岩美町文化財調査報告書第24集

鳥取県岩美郡岩美町

新井三嶋谷遺跡発掘調査報告書

2001.8

岩美町教育委員会

新井三嶋谷遺跡発掘調査報告書

正誤表

P	行	誤	正
P2	12行目 13行目	調査対象となる丘陵が、…… 確認したことで、	調査対象となる丘陵上に於いて… 確認した。
P26	揮図13中		
P46	22行目 28行目	幅0.1~1.6m 須恵器、杯身(Po23)	幅0.1~0.16m 須恵器杯身(Po23)
P49	17行目 26行目 33行目	形成している(揮図33) 高杯の杯部(揮図34、Po24) 揮図34新井南谷2号墳第1主体遺構図	形成している(揮図34) 高杯の杯部(揮図35、Po24) 削除
P51	揮図35中		
P69	2行目 4行目	脚(Po33・34) 器台(Po35)	脚(Po33・35) 器台(Po34)
P89	8行目	高杯[揮図48、Po31~34]と 器台[揮図48、Po35]	高杯[揮図48、Po31~33・35]と 器台[揮図48、Po34]
P96	揮表11中	Po34 Po35	Po35 Po34

鳥取県岩美郡岩美町

新井三嶋谷遺跡発掘調査報告書

2001.8

岩美町教育委員会

序 文

岩美町は、鳥取県の最東端にあり、兵庫県との県境に位置する人口約1万5千人の町です。風光明媚な山陰海岸国立公園を擁し、国の天然記念物に指定された浦富海岸、国指定天然記念物のカキツバタ群落とともに、原始・古代遺跡も多く、歴史豊かな風土と自然に恵まれた環境にあります。

今回の調査が行われた新井三嶋谷遺跡周辺は、遺跡の密集する地域で、弥生時代の土器片や太型蛤刃石斧・石包丁などが出土した新井遺跡をはじめ、最近調査された島根県加茂岩倉銅鐸と兄弟銅鐸であることが判明した新井銅鐸出土地（上屋敷遺跡）を擁しています。

平成11年度から岩美南小学校建設に伴い、緊急発掘を行った結果、縄文～中世にかけての遺構が発見されました。中でも新井三嶋谷1号墳丘墓は、弥生時代後期初頭に造られた全国最大級の貼石をもつ墳丘墓であることが判明し、話題となりました。このように歴史的にも重要な地域にありながら、近年の各種開発事業の増加に伴い、生活環境も大きく変貌しつつあります。

このような状況の下で、先人の残した文化遺産としての埋蔵文化財も大きくその影響を受けています。しかしながら、この貴重な財産である歴史資料を後世に残し伝えることは、今に生きる私たちの責務であるといえるでしょう。今回調査を行った、新井三嶋谷遺跡は、関係各機関との協議・調整を行った結果、記録保存という形で残すことによりその趣旨に添うことにしました。その中にあって、新井三嶋谷1・2号墳丘墓及び新井三嶋谷1号墳は、関係各機関のご理解の元、保存整備することが決定しています。

今回の調査では、前例のない数々の貴重な資料を提供するとともに、弥生時代の墳丘墓を考えるうえでも一石を投げる遺跡となりました。

発掘調査が完了し、ここにささやかな冊子ではありますが、一書をもってご報告します。本書が郷土研究の一助として活用され、埋蔵文化財の保護意識の高揚に役立てていただければ幸いです。

最後にこの成果を報告できましたのも、現場で調査に携わっていただいた皆様、ならびに関係機関各位の惜しみない援助とご協力をいただいた賜と存じます。ここに、心より深く感謝申し上げます。

平成13年8月

岩美町教育委員会

教育長 大 黒 啓 之

例　　言

1. 本書は、平成11年度に岩美町教育委員会が実施した、新井三鷲谷遺跡発掘調査の記録をまとめたものである。

2. 調査を実施した遺跡は、鳥取県岩美郡岩美町大字新井字長道路418-1、三鷲谷419-2番、南谷420-15に所在する。

3. 調査期間及び面積は次の通りである。

期間……………1999年4月1日～1999年8月31日

面積……………1000m²

4. 発掘調査は、中野 知照、松本 美佐子、飯野 学、中島 伸二が担当して行った。

5. 本書に用いた方位は、挿図1・2・3・28及び新井南谷地区の遺構実測図は真北を示し、他は磁北である。岩美町に於ける磁北は、真北に対し西に6度40分偏している。

6. 遺構図中の遺物に付した番号は、遺物実測図の遺物番号に対応する。また、写真図版に於いても同様である（表記は土器・Po、玉製品・J、鉄製品・F、堅櫛・K）。

7. 遺物実測図のスケールは、須恵器・土師器・弥生土器は1／4、玉製品・堅櫛は1／1、鉄製品は1／2である。

8. 本書の執筆・編集は、中野 知照、松本 美佐子、中島 伸二が共同して当たった。

9. 発掘調査により出土した、玉製品・石材の鑑定を元鳥取大学教育地域科学部教授（現放送大学鳥取学習センター所長）赤木 三郎氏にお願いした。また、新井三鷲谷3号墳より出土した酸化鉄の分析を鳥取大学農学部生物資源環境学科教授・本名 俊正氏に行っていただいた。ここに記して感謝の意を表す。

10. 発掘調査に当たり、鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センター、元鳥取大学教育地域科学部教授・赤木 三郎氏、兵庫県養父郡八鹿町教育委員会・谷本 進氏、豊岡市教育委員会・瀬戸谷 眞氏、三重大学教授・八賀 晋氏、大阪府埋蔵文化財センター中部事務所所長・藤田 憲司氏、関西外国语大学助教授・佐古 和枝氏、広島県教育委員会・加藤 謙氏、同・桑原 隆博氏、広島県埋蔵文化財センター・山田 繁樹氏、富山市教育委員会・藤田 富士雄氏、岡山理科大学助教授・亀田 修一氏、鳥取大学教授・渡辺 貞幸氏、鳥取市教育委員会文化課・平川 誠氏、鳥取市埋蔵文化財センター・前田 均氏、同・山田 真宏氏、同・神谷伊鈴氏等からご指導・ご教示を受けた。また、現地の測量調査では（株）アサヒコンサルタントの協力を得た。

11. 現地・整理作業の全期間にわたって宮下 美江子、高垣 恵巳子氏のご協力を受けた。ここに記して深謝の意を表す。

12. 発掘調査によって作成した記録類及び出土遺物等は、岩美町教育委員会に保管している。

13. 発掘調査の体制は、次の通りである。

発掘調査主体 岩美町教育委員会 教育長 大黒 啓之
調査指導 烏取県教育委員会文化課、烏取県埋蔵文化財センター
調査主任 中野 知照
調査員 松本 美佐子
事務局 岩美町教育委員会事務局生涯学習課
作業従事者 稲村 良一、太田 弘道、太田 道子、大西 恵美子、奥山 光子、
北村 洋子、小林 友宏、高垣 恵巳子、多田 由子、田中 源太郎、
田中 秀蔵、田中 益恵、田中 慶博、田淵 淳子、田村 一恵、
田村 みつ子、西尾 和昭、舛本 ふじの、宮下 美江子、宮本 啓子、
宮本よし子、山下 鶴枝、山本 恵美子、山本とし江、山本 喜一、
山本 吉春

本 文 目 次

第1章	調査の経過	1
第1節	発掘調査に至る経緯	1
第2節	発掘調査の方法	1
第2章	遺跡の位置と環境	3
第1節	新井三嶋谷遺跡周辺の自然環境	3
第2節	遺跡周辺及び岩美町の歴史的環境	8
第3章	発掘調査の概要	14
第1節	新井三嶋谷地区の調査	16
第1項	縄文時代の遺構	16
1.	新井三嶋谷地区 J S K - 0 1	16
第2項	弥生時代の遺構	19
1.	新井三嶋谷 1 号墳丘墓	19
2.	新井三嶋谷 2 号墳丘墓	20
第3項	古墳時代の遺構	20
1.	新井三嶋谷 1 号墳	20
2.	新井三嶋谷 2 号墳	20
3.	新井三嶋谷 3 号墳	27
4.	新井三嶋谷地区木棺墓	35
第4項	時期不明の遺構	37

1.	新井三鶴谷地区 SK-0 1	37
2.	新井三鶴谷地区 SK-0 2	37
3.	新井三鶴谷地区 SK-0 3 · SD-0 1	37
4.	新井三鶴谷地区ピット群	41
第5項 新井三鶴谷地区遺構外出土遺物		42
第2節 新井南谷地区の調査		45
第1項 古墳時代の遺構		45
1.	新井南谷 1号墳	45
2.	新井南谷 2号墳	49
3.	新井南谷 3号墳	52
4.	新井南谷 4号墳	70
5.	新井南谷 5号墳	73
6.	新井南谷 6号墳	79
7.	新井南谷 7号墳	80
8.	新井南谷 8号墳	83
9.	新井南谷 9号墳	84
10.	新井南谷 10号墳	87
第2項 新井南谷地区遺構外出土遺物		88
第3項 新井南谷地区古墳出土遺物について		88
第4項 新井南谷地区城砦跡群について		90
第4章 まとめにかえて		91

挿 図 目 次

挿図 1	若狭町遺跡分布図	10	挿図 12	新井三鶴谷 2号墳、第2主体出土出土状況図	25
挿図 2	岩美町城跡分布図	11	挿図 13	新井三鶴谷 2号墳、第1・2主体出土遺物実測図	26
挿図 3	新井三鶴谷遺跡位置図（新井三鶴谷周辺部）	14	挿図 14	新井三鶴谷 3号墳、遺構図	28
挿図 4	新井三鶴谷遺跡全体図	15	挿図 15	新井三鶴谷 3号墳、埴丘断面図	29
挿図 5	新井三鶴谷地区、JSK-0 1 遺構図・遺物出土状況図	16	挿図 16	新井三鶴谷 3号墳、第1主体遺構図	30
挿図 6	新井三鶴谷地区、遺構全体図	17・18	挿図 17	新井三鶴谷 3号墳、第1主体遺物出土状況図	31
挿図 7	新井三鶴谷地区、JSK-0 1 出土縄文土器実測図	19	挿図 18	新井三鶴谷 3号墳、出土遺物実測図	32
挿図 8	新井三鶴谷 2号墳、埴丘断面図	21	挿図 19	新井三鶴谷 3号墳、第1主体遺物実測図	34
挿図 9	新井三鶴谷 2号墳、遺構図	22	挿図 20	新井三鶴谷地区、木棺墓遺構図	35
挿図 10	新井三鶴谷 2号墳、第1・2主体遺構図	23	挿図 21	新井三鶴谷地区、木棺墓出土遺物実測図	36
挿図 11	新井三鶴谷 2号墳、第1主体遺物出土状況図	24	挿図 22	新井三鶴谷地区木棺墓出土遺物実測図	36

插图23	新井二崎谷地区、不明遺構全體図	38	插图45	新井南谷3号墳、第1主体出土遺物実測図	65
插图24	新井三崎谷地区、SK-0-1遺構図	39	插图47	新井南谷3号墳、第2主体出土遺物実測図	66
插图25	新井三崎谷地区、SK-0-2遺構図	39	插图48	新井南谷3号墳、第3主体出土遺物実測図(1)	67
插图26	新井三崎谷地区、SK-0-3・SD-0-1遺構図	40	插图49	新井南谷3号墳、第3主体出土遺物実測図(2)	68
插图27	新井三崎谷地区、遺構外出土遺物実測図	41	插图50	新井南谷3号墳、第3主体出土遺物実測図(3)	69
插图28	新井南谷地内地・遺構全体図	43・44	插图51	新井南谷3号墳、第4主体出土鉄器実測図	70
插图29	新井南谷1号墳、第1主体遺構図	45	插图52	新井南谷4号墳、第1主体遺構図	71
插图30	新井南谷1号墳、第1主体出土遺物実測図	45	插图53	新井南谷4号墳、第1主体出土遺物実測図	71
插图31	新井南谷1号墳、第2主体遺構図	46	插图54	新井南谷4・6号墳、埴丘断面図	72
插图32	新井南谷1・3号墳、埴丘断面図	47・48	插图55	新井南谷5号墳、第1～3主体遺構図	74
插图33	新井南谷2号墳、第1主体出土遺物実測図	49	插图56	新井南谷5号墳、第1主体遺構図	75
插图34	新井南谷2号墳、第1主体遺構図	50	插图57	新井南谷5号墳、第2主体遺構図	76
插图35	新井南谷2号墳、第1主体遺物出土状況図	51	插图58	新井南谷5号墳、第3主体遺構図	77
插图36	新井南谷3号墳、第1主体遺構図	53	插图59	新井南谷5号墳、第1・3主体出土遺物実測図	78
插图37	新井南谷3号墳、第1主体遺物出土状況図	55・56	插图60	新井南谷6号墳、第1主体遺構図	79
插图38	新井南谷3号墳、第2主体遺構図	57	插图61	新井南谷7・8号墳、埴丘断面図	81・82
插图39	新井南谷3号墳、第2主体遺物出土状況図(1)	58	插图62	新井南谷7号墳、第1主体遺構図	83
插图40	新井南谷3号墳、第2主体遺物出土状況図(2)	59	插图63	新井南谷8号墳、第1主体遺構図	84
插图41	新井南谷3号墳、第3主体遺構図	60	插图64	新井南谷9・10号墳、埴丘断面図	85
插图42	新井南谷3号墳、第3主体遺物出土状況図(1)	61	插图65	新井南谷9号墳、第1主体遺構図	86
插图43	新井南谷3号墳、第3主体遺物出土状況図(2)	62	插图66	新井南谷10号墳、第1主体遺構図	88
插图44	新井南谷3号墳、第4主体遺構図	63	插图67	新井南谷地区、遺構外出土遺物実測図	89
插图45	新井南谷3号墳、第4主体遺物出土状況図	64			

插 表 目 次

插表1.	新井三崎谷地区、ピット一覧表	41	插表10.	新井南谷2号墳、第1主体出土土器観察表	95
插表2.	新井三崎谷地区、JSK-0-1出土土器観察表	92	插表11.	新井南谷3号墳、出土土器観察表	95
插表3.	新井三崎谷2号墳、出土土器観察表	92	插表12.	新井南谷4号墳、出土土器観察表	96
插表4.	新井三崎谷2号墳、第1主体出土土器観察表	92	插表13.	新井南谷5号墳、出土土器観察表	96
插表5.	新井三崎谷3号墳、出土土器観察表	93	插表14.	新井南谷3号墳、出土鐵器・堅壁観察表	96
插表6.	新井三崎谷3号墳、出土鐵器観察表	94	插表15.	新井南谷5号墳、第3主体出土鐵器観察表	97
插表7.	新井三崎谷地区、木棺墓出土土器観察表	94	插表16.	新井南谷地区、遺構外出土土器観察表	97
插表8.	新井三崎谷地区、遺構外出土土器観察表	94	插表17.	新井南谷3号墳、出土土製品観察表	98
插表9.	新井南谷1号墳、第1主体出土土器観察表	94			

図 版 目 次

- 図版1 1. 新井三崎谷地区全景（調査前、西より）
2. 新井三崎谷1・2号墳全景（調査前、南東より）
- 図版2 1. 新井三崎谷遺跡全景（北西より）
2. 新井三崎谷地区（南西より）
3. 新井三崎谷地区作業風景（北西より）
4. 新井三崎谷地区（北西より）
- 図版3 1. 新井三崎谷1号墳丘墓（東より）
2. 新井三崎谷地区、J SK-0-1木棺墓・ピット部（南東より）
- 図版4 1. 新井三崎谷地区光景状況（北西より）
2. 新井三崎谷地区（南東より）
3. 新井三崎谷地区、J SK-0-1本体掘出状況（南西より）
4. 新井三崎谷地区、ピット群検出状況（北西より）
- 図版5 1. 新井三崎谷地区、SK-0-2上層断面検出状況（南西より）
2. 新井三崎谷地区、不明遺構群検出状況（南東より）
3. 新井三崎谷地区、SK-0-1完掘状況（北より）
4. 新井三崎谷地区、J SK-0-1遺物出土状況（北東より）
5. 新井三崎谷地区、J SK-0-1遺物出土状況（南西より）
6. 新井三崎谷地区、J SK-0-1焼土焼出状況（北東より）
7. 新井三崎谷地区、J SK-0-1焼土焼出状況（北西より）
- 図版6 1. 新井三崎谷2号墳全景（南東より）
2. 新井三崎谷2号墳全景（北西より）
3. 新井三崎谷2号墳全景（北西より）
4. 新井三崎谷2号墳全景（北西より）
- 図版7 1. 新井三崎谷2号墳・遺構面検出状況（南東より）
2. 新井三崎谷2号墳・遺構面検出状況（北西より）
3. 新井三崎谷2号墳・遺構面検出状況（南西より）
4. 新井三崎谷2号墳、第1主体・第2主体完掘状況（南東より）
- 図版8 1. 新井三崎谷2号墳・第1主体堆土堆積状況（南西より）
2. 新井三崎谷2号墳・第1主体完掘状況（南西より）
3. 新井三崎谷2号墳・第1主体完掘状況（南西より）
4. 新井三崎谷2号墳・第1半体完掘状況（南東より）
5. 新井三崎谷2号墳・第2主体完掘状況（南東より）
6. 新井三崎谷2号墳・第2主体完掘状況（東より）
7. 新井三崎谷2号墳・第2主体遺物出土状況（東より）
8. 新井三崎谷2号墳・第2主体遺物出土状況（西より）
- 図版9 1. 新井三崎谷3号墳全景（南西より）
2. 新井三崎谷3号墳全景（北西より）
3. 新井三崎谷3号墳全景（南東より）
4. 新井三崎谷3号墳・新1主体埋土上層断面検出状況（東より）
- 図版10 1. 新井三崎谷3号墳・第1主体遺構面検出状況（南東より）
2. 新井三崎谷3号墳・第1主体遺構面検出状況（南西より）
3. 新井三崎谷3号墳盛土中・疑似墓出土状況（北西より）
4. 新井三崎谷3号墳・第1主体堆土層断面検出状況（南西より）
5. 新井三崎谷3号墳・第1主体堆土層断面検出状況（南東より）
6. 新井三崎谷3号墳・第1主体遺物出土状況（北西より）
7. 新井三崎谷3号墳・第1主体完掘状況（南東より）
8. 新井三崎谷3号墳・第1主体完掘状況（北東より）
- 図版11 1. 新井三崎谷3号墳・第1主体上面遺物出土状況（北東より）
2. 新井三崎谷3号墳・第1主体上面遺物出土状況（北西より）
3. 新井三崎谷3号墳・第1主体上面遺物出土状況（南西より）
4. 新井三崎谷3号墳・第1主体上面遺物出土状況（北西より）
5. 新井三崎谷3号墳周溝内・遺物出土状況（北東より）
6. 新井三崎谷3号墳周溝内・遺物出土状況（南東より）
7. 新井三崎谷3号墳・第1主体床面遺物出土状況（南東より）
8. 新井三崎谷3号墳盛土中・疑似墓出土状況（北西より）
- 図版12 1. 新井三崎谷地区・木棺墓掘り下げ状況（北西より）
2. 新井三崎谷地区・木棺墓遺物出土状況（東より）
3. 新井三崎谷地区・木棺墓完掘状況（東より）
4. 新井三崎谷地区・木棺墓遺物出土状況（東より）
- 図版13 1. 新井三崎谷地区・木棺墓上層断面検出状況（南西より）
2. 新井三崎谷地区・木棺墓上層断面検出状況（南西より）
3. 新井三崎谷地区・木棺墓小口南側検出状況（北西より）
4. 新井三崎谷地区・木棺墓小口北側検出状況（南東より）
- 図版14 1. 新井南谷地区全景（表土除去後、北より）

2.新井南谷地区より北東を望む	2.新井南谷3号墳、第1主体石枕検出状況（南より）
図版15 1.新井南谷地区全景（東より）	3.新井南谷3号墳、第1主体石枕検出状況（南東より）
2.新井南谷地区全景（東より）	4.新井南谷3号墳、第1主体土器枕検出状況（北西より）
国版16 1.新井南谷地区、表土除去後（南西より）	5.新井南谷3号墳、第1主体上器枕検出状況（南東より）
2.新井南谷1号墳、完掘状況（南西より）	6.新井南谷3号墳、第1主体副室内遺物出土状況（南東より）
3.新井南谷1号墳、第2主体完掘状況（南東より）	7.新井南谷3号墳、第1主体石材抜き取り痕（南東より）
国版17 1.新井南谷2号墳、第1主体拔出状況（南西より）	8.新井南谷3号墳、第1主体石材抜き取り後（北西より）
2.新井南谷2号墳、第1主体拔出状況（南西より）	図版24 1.新井南谷3号墳、完掘状況（北東より）
3.新井南谷2号墳、第1主体蓋石検出状況（北東より）	2.新井南谷3号墳、第2主体土層断面検出状況（南東より）
4.新井南谷2号墳、第1主体蓋石検出状況（北東より）	3.新井南谷3号墳、第2主体完掘状況（北西より）
国版18 1.新井南谷2号墳、第1主体石棺検出状況（北西より）	図版25 1.新井南谷3号墳、第2主体検出状況（北西より）
2.新井南谷2号墳、第1主体石棺検出状況（東より）	2.新井南谷3号墳、第2主体遺物出土状況（北東より）
3.新井南谷2号墳、第1主体石棺検出状況（北西より）	3.新井南谷3号墳、第2主体遺物出土状況（北西より）
4.新井南谷2号墳、石材抜き取り後（東より）	4.新井南谷3号墳、第2主体遺物出土状況（北西より）
国版19 1.新井南谷3号墳、試掘トレーニング（南西より）	図版26 1.新井南谷3号墳、第3主体土層断面検出状況（南東より）
2.新井南谷3号墳、検出状況（南西より）	2.新井南谷3号墳、第3主体土層断面検出状況（北西より）
3.新井南谷3号墳、第1主体土層断面検出状況（南東より）	3.新井南谷3号墳、第4主体石紋検出状況（南東より）
4.新井南谷3号墳、完掘状況（北東より）	4.新井南谷3号墳、第3主体土器枕検出状況（東より）
国版20 1.新井南谷3号墳、第1主体土層断面検出状況（南西より）	図版27 1.新井南谷3号墳、第3主体遺物出土状況（東より）
2.新井南谷3号墳、第1主体土層断面検出状況（南西より）	2.新井南谷3号墳、第3主体土器枕出土状況（北西より）
3.新井南谷3号墳、第1主体土層断面検出状況（南東より）	3.新井南谷3号墳、第3主体偏出土状況（北西より）
4.新井南谷3号墳、第1主体石棺検出状況（南西より）	4.新井南谷3号墳、第4主体鉄剣・石枕出土状況（東より）
国版21 1.新井南谷3号墳、第1主体蓋石検出状況（北東より）	5.新井南谷3号墳、第4主体鉄剣・石枕出土状況（北西より）
2.新井南谷3号墳、第1主体蓋石検出状況（西より）	6.新井南谷3号墳、第2主体土器枕・石材出土状況（南より）
3.新井南谷3号墳、第1主体蓋石除去後（北西より）	7.新井南谷3号墳、第2主体土器枕・石材出土状況（南東より）
4.新井南谷3号墳、第1主体石材抜き取り後（北西より）	8.新井南谷3号墳、第3主体完掘状況（南東より）
国版22 1.新井南谷3号墳、第1主体石棺蓋石検出状況（東より）	図版28 1.新井南谷4号墳、検出状況（南西より）
2.新井南谷3号墳、第1主体石棺蓋石検出状況（東より）	2.新井南谷4号墳、第1主体検出状況（南西より）
3.新井南谷3号墳、第1主体石棺蓋石検出状況（北東より）	3.新井南谷4号墳、第1主体検出状況（南西より）
4.新井南谷3号墳、第1主体石棺蓋石検出状況（北西より）	国版29 1.新井南谷5号墳、表土除去後（西より）
5.新井南谷3号墳、第1主体石棺蓋石検出状況（北東より）	2.新井南谷5号墳、表土除去後（西より）
6.新井南谷3号墳、第1主体石棺検出状況（北東より）	3.新井南谷5号墳、第1主体～第3主体偏出土状況（南西より）
7.新井南谷3号墳、第1主体石棺検出状況（西より）	4.新井南谷5号墳、第1主体～第3主体完掘状況（北東より）
8.新井南谷3号墳、第1主体石棺検出状況（南東より）	国版30 1.新井南谷5号墳、第1主体完掘状況（南西より）
国版23 1.新井南谷3号墳、第1主体石枕検出状況（南西より）	2.新井南谷5号墳、第2主体完掘状況（北東より）

- | | |
|--------------------------------|----------------------------|
| 3.新井南谷5号墳、第1主体石材棱出状況（北西より） | 4.新井南谷9号墳、第1主体棱出状況（南西より） |
| 4.新井南谷5号墳、第3主体完掘状況（北西より） | 同版36 1.新井南谷10号墳、表土除去後（南より） |
| 5.新井南谷5号墳、第1主体・第3主体完掘状況（北西より） | 2.新井南谷10号墳、第1主体棱出状況（南より） |
| 6.新井南谷5号墳、第3主体鉄錐出土状況（北東より） | 3.新井南谷10号墳、第1主体完掘状況（西より） |
| 7.新井南谷5号墳、第3主体須恵器出土状況（北西より） | 4.新井南谷10号墳、第1主体完掘状況（西より） |
| 同版31 1.新井南谷6号墳、表土除去後（南東より） | |
| 2.新井南谷6号墳、第1主体棱出状況（南東より） | |
| 3.新井南谷6号墳、第1主体完掘状況（西より） | |
| 同版32 1.新井南谷7号墳、表土除去後（南西より） | |
| 2.新井南谷7号墳、第1主体棱出状況（南西より） | |
| 3.新井南谷7号墳、第1主体完掘状況（南西より） | |
| 4.新井南谷7号墳、第1主体完掘状況（南西より） | |
| 同版33 1.新井南谷6～9号墳、表土除去後（南西より） | |
| 2.新井南谷8号墳、表土除去後（南西より） | |
| 3.新井南谷7号墳、第1主体棱出状況（南西より） | |
| 4.新井南谷7号墳、周溝棱出状況（西より） | |
| 同版34 1.新井南谷8号墳、第1主体棱出状況（南西より） | |
| 2.新井南谷8号墳、第1主体棱出状況（南西より） | |
| 3.新井南谷8号墳、第1主体完掘状況（南西より） | |
| 4.新井南谷8号墳、第1主体完掘状況（西より） | |
| 同版35 1.新井南谷9号墳、表土除去後（南東より） | |
| 2.新井南谷9号墳、第1主体棱出状況（南東より） | |
| 3.新井南谷9号墳、第1主体棱出状況（南東より） | |
| 同版37 1.新井三鶴谷地区、J S K - 0 1出土諸物 | |
| 2.新井三鶴谷2号墳、第1主体出土遺物 | |
| 3.新井三鶴谷2号墳、第2主体出土遺物 | |
| 同版38 1.新井三鶴谷3号墳、出土遺物 | |
| 同版39 1.新井三鶴谷3号墳、出土遺物（同溝内） | |
| 同版40 1.新井三鶴谷地区、木棺轟出土遺物 | |
| 2.新井三鶴谷地区、透鏽外出土遺物 | |
| 同版41 1.新井南谷1号墳、第1主体出土遺物 | |
| 2.新井南谷2号墳、出土遺物 | |
| 3.新井南谷3号墳、第1主体出土遺物 | |
| 同版42 1.新井南谷3号墳、第2主体出土遺物 | |
| 同版43 1.新井南谷3号墳、第3主体出土遺物 | |
| 同版44 1.新井南谷3号墳、第3主体・第4主体出土遺物 | |
| 同版45 1.新井南谷4号墳、填頂部出土遺物 | |
| 2.新井南谷5号墳、第1主体出土遺物 | |
| 3.新井南谷5号墳、第3主体出土遺物 | |
| 4.新井南谷地区、透鏽外出土遺物 | |

第1章 調査の経過

第1節 発掘調査に至る経緯

本発掘調査は、岩美町立岩美南小学校建設事業に伴い、工事予定地内の試掘調査により検出した新井三嶋谷遺跡の緊急発掘調査である。

岩美町立岩美南小学校建設事業は、平成10年11月に着手していたが、平成11年4月、工事区域内の丘陵及び山林の樹木伐採を完了した時点で、埋蔵文化財の所在が予測される地形を認め、直ちに県教育委員会と埋蔵文化財の保護と工事との調整を行うべき協議を行った。協議の結果、遺跡の有無を確認するための試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は、A～C区に調査区を分けてそれぞれトレーナーを設定して行ったが、B区及びC区について埋蔵文化財が確認されたため、その分布範囲を確定した。その後、建設工事との調整を図るために急に記録保存のための発掘調査に取りかかった。

発掘調査により、工事区域内の南側の山林（B区）に古墳10基、城砦跡が確認された。また、南東から北西方向にかけて舌状に伸びる細長い丘陵上（C区）に、縄文時代後期の石器工房跡、弥生時代の墳丘墓2基、古墳3基などを確認した。それぞれ独立した丘陵上に遺跡は分布しているが、調査ではB区を新井南谷地区とし、C区を新井三嶋谷地区とした。このように工事区域内からは、縄文時代から古墳時代に至る遺跡と、中世の城砦跡の所在が確認された。中でも新井三嶋谷地区に所在する新井三嶋谷1号墳丘墓は、弥生時代後期初頭の築造で、この時期としては全国でも最大級の規模を持ち、貼石の特徴など他の墳丘墓に類を見ない貴重な文化財であることが判明した。

その後、鳥取県文化財保護審議会、鳥取県埋蔵文化財センター等の指導により、新井三嶋谷1号墳丘墓とそれに隣接する新井三嶋谷2号墳丘墓を保存整備することを決定した。また、保存するにあたり、平成11年11月には町の史跡としてこの二つの墳丘墓を町文化財指定した。

保存が決定された新井三嶋谷墳丘墓の学術的調査を実施するため、県教育委員会と協議を重ねた。その結果、平成11年度調査に引き続き平成12年度には、国及び県の補助金を受けて、文化庁、県教育委員会の指導のもとに発掘調査を実施することとなった。

第2節 発掘調査の方法

発掘調査の対象となったのは、調査に先立ち行われた試掘調査の結果、遺構の存在を確認した新井南谷地区と新井三嶋谷地区である。調査を開始するにあたり、以下の調査方針を考え実施す

ることとした。

＜城砦の調査＞

- i 表土除去の後、平坦部・曲輪の存在を考慮に入れ最大限広範囲を調査し、遺構の確認を行う。
- ii 調査後の地形実測図を作成する。

＜古墳の調査＞

- i 個々の古墳の調査に当たっては、古墳築造に関する全面積を調査対象とする。
- ii 古墳築造に伴う地山整形は全面にわたって調査する。墳丘盛土は全て除去、もしくは断ち割りによる断面観察を行う。
- iii 古墳築造に伴う各種遺構の存在を考慮し、最大限広範囲を調査する。

新井南谷地区では、当初、丘陵上に所在する平坦部（城砦跡）の調査を主眼としていた。そのため測量調査に伴う基準杭の設定が不十分であった。調査対象となる丘陵が、城砦として再利用される以前に造られた古墳の存在を確認したことで、古墳発掘調査に関わる基準杭の再設定を行った。新井三鷗谷地区では、古墳状の高まりを3カ所確認したことにより、それぞれの墳頂部を連続させた基準杭の設定を行った。新井南谷地区、新井三鷗谷地区共に地形測量の後ではあるが国土座標にリンクさせた。

古墳の調査では、殆ど全てに於いて墳丘盛土を確認していたが、工事施工時期が迫っていたため盛土除去は行わず、墳丘断面観察のみとした。



新井三鷗谷遺跡位置図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 新井三嶋谷遺跡周辺の自然環境

放送大学鳥取学習センター 赤木三郎

まえがき

鳥取県岩美郡岩美町新井の新井三嶋谷墳丘墓群のうち、最大規模の新井三嶋谷1号墳丘墓を被覆する貼石の石質と墳丘墓の載る丘陵の地形・地質について調査した。その結果、貼石は蒲生川流域から流下した円礫のうち、花崗岩質や安山岩質の岩石の中礫が選択的に採取されて使用されたものであり、一部に墳丘墓周辺に分布する岩石が岩盤から削剥分離して円削された亜円礫ないしは亜角礫を利用されていることが分かった。その中に凝灰質泥岩礫の表面に穿孔貝が穿孔した生痕化石（生息痕）の残るものがあり、これらが海岸近くの岸壁や岩礁、礁浜に穿孔するニオガイの作ったものであることが分かった。精査すると墳丘墓の載る基盤岩の表層部にも多数の生痕が認められた。墳丘墓の載る新井三嶋谷丘陵はかつての海蝕台が離水したものであり、貼石に使用された円礫は当時の海岸線近くにあったものである。生痕化石の存在が示す地質学的な意義と丘陵形成までの古地理の考察を行った。

1) 地形・地質の概観

扇ノ山（1310m）に源を発する蒲生川は岩井温泉付近から西方に流れ冲積平野をつくる。新井三嶋谷遺跡はこの付近で蒲生川左岸に合流する支谷である。河岸には標高13m～15mの緩傾斜の丘陵が発達している。右岸には高山、広岡などの丘陵が広がり、左岸の丘陵には上記の新井三嶋谷1号墳丘墓、同2号墳丘墓が構築されている。

新井三嶋谷墳丘墓の載る丘陵は北方に蒲生川沖積平野を見下ろし、現在では遠くに浦富砂丘が日本海の海岸線沿いに広がる展望点である。蒲生川は本来は浦富海岸の蒲生川沖積平野を北流していたが、現在では河崎付近の狭間を西流して小田川と合流し網代で日本海に注いでいる。

新井三嶋谷墳丘墓の背後に広がる山地は山腹・山麓緩斜面と呼ばれる標高150m以下の山地であり、標高200m～300mの小起伏山地がさらにその背後に広がる。

この付近の地質の概要は鳥取県（1966）、松本（1991）などによって明らかになっている。それによると蒲生川水系には基盤岩として白亜紀後期～古第三紀に活動した“中生代火山岩類”と呼称される流紋岩類の溶岩や火碎岩、優白色で黒雲母を含む“鳥取花崗岩”と呼称されている花崗岩類が分布しており、県境付近の一部には鮮新世の火山岩類が見られるものの流域の大部分は新生代第三紀中新世の鳥取層群に属するものであり、特にその上位は松本（1991）によって岩美累層と命名された地層が広く分布している。新井三嶋谷墳丘墓の基盤は岩美累層の荒金火碎岩

層でできている。

新井三鷲谷墳丘墓の貼石に使用されている岩石は、浦富海岸部・蒲生川水系・墳丘墓周辺に分布する岩石であるが、小田川の上流域から河口部に運搬された河床礫も使用されている可能性はあるものの、特定できるまでには至らなかった。

貼石に使用された岩石の多くは花崗斑岩である。そのほか荒金火碎岩層に属する安山岩類や石英斑岩、閃綠岩の礫を見ることができるが量は少ない。荒金火碎岩層は主に石英安山岩質凝灰角礫岩～火山礫凝灰岩、軽石凝灰岩、凝灰岩などからなり少量の泥岩、砂岩、礫岩を伴う。墳丘墓の載る丘陵は全体に凝灰質泥岩であり、砂岩質のところもある。地層の走向はほぼ東西で、北に僅かに傾斜している。西方の山麓に設けられている新設道路沿いには本岩層が良く露出しており、泥岩の一部には生物によって擾乱されたと考えられる葉理がみられるが化石や生痕はみられなかった。

貼石の中に荒金火碎岩層に属する凝灰質泥岩がみられる。この亜円礫の表面に多数の穿孔がみられるものがある。これは海棲の二枚貝類であるニオガイが穿孔したもので、過去の生物が生息時に残した生活の跡であり、生痕化石と呼ばれるものである。また、花崗岩や花崗斑岩の円礫がかなり多く使用されているが、これらは浦富海岸部に多くみられる岩石で、丘陵近くまで前進していた海岸の礫浜から採集され使用されていると考えられる。これら花崗岩質の円礫には生痕は全く穿孔されていなかった。

2) 生痕のある岩盤及び貼石に穿孔された岩石について

貼石の一部が凝灰質泥岩で、生物の残した生痕があることから、基盤の岩石表面を観察したところ、同岩質であるばかりか、表面に同一の生痕が多数見られた。礫にのこる生痕は礫の表面に万遍なく見られるのに、基盤の露頭では丘陵上面では側面表面にはほぼ垂直に穿孔され、断面が径2cm強の穴が開いているものが多い。一方、側面では不規則な分布で生痕の縦断方向のくぼみが多数見られた。

この生痕は基盤の表面近くに見られるのみで、墳丘墓の南面に作られた法面では内部には全く見られない。このことは生痕の形成が丘陵形成以降のものであることを示している。

生痕は直径が2cm強であるが、3cm程度に浸食された広がったものもある。長さは5cm～6cmで内部が広がり徳利状のものもある。ほぼ表面に対して垂直であるがやや傾斜したものもある。

生痕を形成した生物について考察すると、形態、大きさ、穿孔している岩石の岩相、生痕の内面に作られた擦痕の形状などから、海生の軟体動物で穿孔性のニオガイ科の二枚貝が穿孔したものと判断した。

ニオガイ (*Bareenea inornata* Pilsbry) は殻の長さ7cm、高さが2.4cm、幅2.3cm、白色の薄い殻をもち前後に細長く後方へ緩やかに細くなる。殻の前端の開いているところから丸い足を出し、地物に押し当て殻を左右に動かして岩を削り穴を掘り中に住む。

生痕だけからは種名の同定は難しい。ニオガイ科全体が海岸近くの岩礁や岸壁、礫底に住むので示相化石として知られる。基盤と貼石に生痕が見られたことは、この場所が海岸近くの水面下

にあったことを意味し、その近くに遊離した岩石の礫や礫浜にニオガイが穿孔したものが貼石として採取され使用されたことを示している。

3) 新井三嶋谷墳丘墓の載る13m面について

墳丘墓の載る緩傾斜の平坦面はかっての海底面であったことを示し、海蝕台であったことを意味する。その平坦面の標高は13m前後であり、その高度まで海進がすんでいたことの証拠である。

第四紀の海面変動は何回もあったが標高が13~15mの位置に海面があったのは他の地域の例を見ると更新世中期が考えられ、少なくもその頃かそれ以前にこの面が形成されたと考えざるをえない。その時期は鳥取砂丘の古砂丘が形成された時期までさかのほることが出来る。鳥取県の山陰海岸ではこの時期の海岸段丘が認められたことはない。更新世中期以降の海面変化の貴重な資料である。

山陰海岸では城崎町畑上の丘陵から海生の貝化石を産し、その時代は更新世の下末吉海進の時期のものとされ、今から12万年前と考えられている。京都府峰山町では海成段丘が3段認められ、いずれも中位段丘とされているがH2(高位)、M(中位)、L(低位)の3面の内、標高15m~20mに広がる波蝕面に対比できるようである。新井三嶋谷付近の段丘が更新世中期のものとすることによって從来不明であったこの地方の第四紀の地史を解明できる可能性がある。

4) 穿孔貝が穿孔した当時の古地理について

新井三嶋谷墳丘墓の載る13m~15mの丘陵面は更新世中期頃には海岸線がこの付近の13m付近にあったことを示すものである。広岡や高山付近にも標高の近似した平坦面があり、蒲生川の中流、岩井温泉の南でも大山中部火山灰層の載る段丘があるので一連のものではないかと考えるが今後の研究に待ちたい。

衆知のごとく、縄文時代の前期ころから海水面の上昇がすすみ、前期中葉から後期にかけて最高海面期となった。いわゆる縄文海進であり、山陰地方でも海水面が現在より少なくとも4m近くは上昇した。この海進で河崎・新井付近の微高地は海水面上昇で海面下となり蒲生川の水域と小田川の水域は相互に連絡していたと考えられる。

河崎と新井付近の蒲生川河床に弥生時代中期の新井遺跡がある。出土したのは太型蛤刃石斧・石包丁・玉砥石状石器などで、遺物の内容から新井遺跡はここの微高地を利用した生活遺跡と考えられている。従って弥生時代中期までは確実に蒲生川は北に流路をとっていたことが分かる。

しかしながら、新井と河崎付近では南から北に伸びる山地の尾根筋がこの付近で低くなっている、微高地に弥生遺跡のあることは、弥生時代以前までにこの地点が顯著な浸食作用をうけたことを意味している。たまたま、この場所が浦富海岸へ続く花崗岩塊と南に広がる荒金火碎岩層との境界に当たり、東西性の断層が通っている場所である。このような地形開拓が進行したのは新井三嶋谷墳丘墓の載る新井段丘形成時かそれ以前の海進時であると考えられる。墳丘墓構築時には蒲生川沖積地が浦富砂丘の形成により、湖沼退化が進んだ時期と考えられる。それは、浦富砂丘の西側に古墳の存在することからも考えられるところである。現在、浦富沖積平野は全体

に灰色の低地土壌やグライ土が発達し、東の山裾に低位泥炭土壌や黒泥土壌が分布している。このことは初め外洋に面した内湾であった谷底低地が徐々に埋積されてついには潟湖化し、やがて低湿地となつたことを示している。

一方、蒲生川の流路を人工で変え、小田川と合流して網代で海に出るようになったのは弥生時代以降である。流路改変の時期は土地利用の経緯から見て、大谷川河口の低地が干拓された江戸時代中期頃と考えられるがその証拠はない。

第四紀更新世以降の地形発達史を概観すると、山陰地方の大地形は地殻変動と海水面変動によって漸次現在の地貌になったが、更新世前半については不明である。更新世中期までに河谷地形、湾入部などの大まかな地形の形成があり、更新世中期以降、段丘や谷底平野、扇状地、崖錐、砂丘などの形成があった。さらにそれらの地形を利用して人間による自然改変があった。特に江戸時代中期以降に水田開発がすすみ、干拓や水路開削が行われた。蒲生川の流路の変遷もその一つである。

まとめ

墳丘墓の貼石と出土品の石材鑑定に端を発して、墳丘墓の載る丘陵の地質と地形にまで調査を進め、丘陵周辺の構造、形成期、古地理などを考察した。

墳丘墓の立地条件についてみると、人工に頼らず眺望のよい自然の平坦地を利用して築造されたことが分かった。今後はこのような視点から未踏査の遺跡を探す上で一助になるであろう。

弥生時代の古地理についても考察を求められたが、資料が不足しており充分なものにならなかった。縄文海進以降の古地理については山陰地方全体から海水準変動を鍵として考える必要があるであろう。

墳丘墓の載る丘陵面が更新世中期のもので、下末吉海進時のものであるなら、山陰東部地域の地形発達史に貴重な資料を提供したことになり、鳥取砂丘の古砂丘形成のメカニズムを考える上でも貴重であるといえる。

幸い当局により現地が保存され、誰でも観察できるように適切な措置をとられた。

最後に、お世話になった岩美町教育委員会教育長大黒啓之先生はじめ、お世話になった調査員の皆様に厚くお礼を申し上げる。この調査の端緒を作っていただき、終始お世話になった現地調査員の中野知照先生に感謝の意を表する。また、現地調査に立ち会っていただき、地質学的な指導助言を頂いた鳥取県文化財保護審議会委員・鳥取大学教育地域科学部教授岡田昭明先生に厚くお礼を申し上げるものである。

参考文献

- 松本俊雄（1991）鳥取市北東方地域の中心統廃局と中期中新世の火山活動。地質学雑誌, 97-9, 697-712.
- 大森昌衛（1993）生痕化石調査法。地学ハンドブックシリーズ・8、地学団体研究会。坂本 亨・上村不二雄（1972）兵庫県北部、城崎東方の海成更迭統。地質学雑誌, 78-8, 415-416.
- 鳥取県（1966）10万分の1鳥取県地質図および同地質図。鳥取県
- 鳥取県（1976）土地分割基本調査「浜坂」5万分の1。

第四 紀	海 底 堆 積 層	海面 堆 積 層	現在の干溼した海面 海面地帯
		瀬戸川沖野平野堆積物 瀬戸内の低湿地時代	瀬戸川沖野平野 瀬戸内入り江の沿岸地帯 瀬戸内入り江の深沼地帯 瀬戸外入りの海浜時代
	更 新 世	新井三鷲谷墳丘墓の段丘 (新井段丘)	新井段丘の古跡地
第三 紀	海 底 堆 積 層	海面 堆 積 層	新井段丘 新井段丘
古 第 二 の 紀 生 代		花崗岩 (花咲花崗岩) 中生代火山岩類	

新井三鷲谷墳丘墓周辺の地質層序表

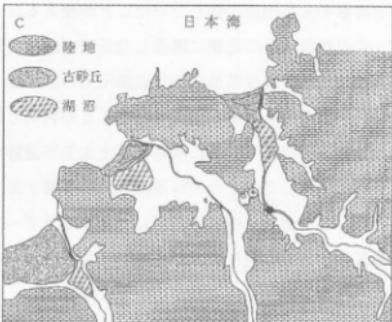
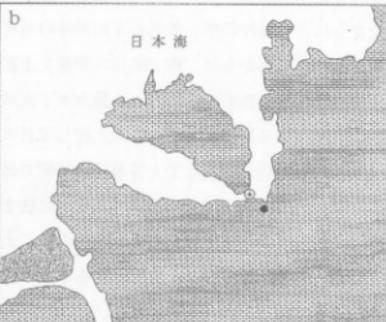
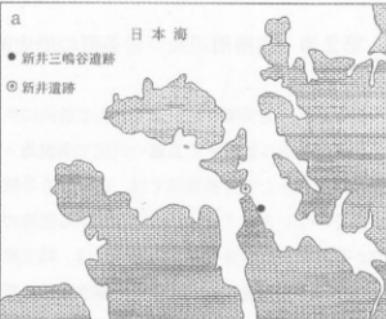


東側より見た墳丘墓と基盤岩の成層
状態を示す写真



千葉市谷当のニオガイの合弁殻に伴
う巣穴 (大森, 1993)

第1章第1節付図



岩美町海岸部の古地理図

a 更新世中期頃の古地理図。新井三鷲谷の丘陵地はこの頃出来た。墳丘墓の貼石はこの当時の海岸線近くの浜礫を用いた。約13万年前の下末吉期の墳。

b 碓文海進の最盛期の頃の古地理図。標高4 m近くまでの海面上昇があった。

浦富海岸にまだ砂丘がなかった。約5000年前の頃。

c 弘生時代に隆古墳時代の頃。浦富海岸の砂丘が出来ている。新井遺跡はこの時期には地表になっている。浦富、大谷に低湿地が出来た。2000年～1500年前の頃。

第2節 遺跡周辺及び岩美町の歴史的環境 [挿図1・2]

縄文時代 岩美町に於いて、先人が最初の生活の痕跡を残したのは縄文時代に始まる。岩美町の最南東端部に位置する鳥越の沢尻で条痕地・無文地を呈した縄紋土器が採取されている。鳥越からやや下った山ノ神地区では、山ノ神5号墳発掘調査時に、縄文前期の土器片や石鎚・石斧の出土をみている。これら山地に立地する遺跡の他、蒲生川中流域の沖積平野には岩井廃寺下層遺跡が見られる。岩井廃寺下層遺跡では、縄文晚期の深鉢形土器の出土をみている。

昨年度発掘調査を行った新井三嶋谷遺跡の新井三嶋谷地区では、縄文後期の土器片を伴った石器工房跡が検出されている。この石器工房跡は、岩美町では初めての遺構¹¹検出例となった。遺構内からは、土器片の他、多数の安山岩系の石材・剥片と黒曜石の剥片が出土している。また、周辺の遺物包含層からは、縄文晚期の突蒂文土器も検出されている。

弥生時代 弥生時代に入ると、蒲生川下流域の沖積平野に遺跡の分布が見られる。蒲生川は、本来、新井あるいは高山付近より北流して日本海に注いでいたものと考えられる。また、小田川は河崎付近で西に屈曲して大谷地区の砂嘴で塞がれたラグーンを経て、日本海に注いだものと考えられる。この蒲生川と小田川の屈曲部に挟まれた位置に新井遺跡が所在する。新井遺跡は、弥生中～後期の壺・甕・器台などの土器の他、大型蛤刃石斧・石包丁・砥石などの石製品の出土をみている。遺跡の東西は、ラグーンあるいは肥沃な低湿地が展開しており、弥生人が生活する上で好適地であったといえる。また、水上交通の要衝にもあたり、漁撈・水田耕作などの生産基盤を掌握する集団が居住していたことが窺える。

この新井遺跡の北側に隣接した丘陵の山腹では、流水文銅鐸を出土した上屋敷遺跡が所在する。この銅鐸は、島根県加茂岩倉遺跡出土の31・32・34号銅鐸と、神戸市桜ヶ丘3号銅鐸とともに同じ鋳型で造られた兄弟銅鐸であることが判明し話題となっている。

また、小田川中流域に所在する上太夫谷遺跡からは、弥生後期の堅穴住居跡や木棺墓群が確認されている。この上太夫谷遺跡の南に隣接する上ミツエ遺跡からは、弥生中期の土器を出土している。この他、小田川下流域に展開するラグーンあるいは低湿地を前面に控えた大谷地区と平野地区に於いて土器片や石製品の出土が知られている。いずれも、新井遺跡と同様、漁撈や水田耕作を生産基盤とした集落が存在していた。

弥生時代の墳墓としては、新井遺跡から南東約2kmに所在する新井三嶋谷遺跡に於いて、弥生後期初頭に造営されたと考えられる貼石¹²墳丘墓1基を確認している。この墳丘墓の南側に隣接した方形の墳丘墓は、ほぼ同時期に造られたものと考えられる。この貼石墳丘墓（新井三嶋谷1号墳丘墓）は、弥生後期初頭に比定される墳墓の中では、全国的に見ても最大級規模のもので南北約26m、東西約18m、高さは最大約3mを測る。墳丘斜面には、拳大～人頭大よりやや小振りな石を貼り付けている。斜面に施された貼石の一部には、新井三嶋谷1号墳丘墓に特徴的な目地を通した石列や、弧状を描く列石が見られる。

また、新井遺跡の南側に隣接する丘陵上では、新井32号墳の墳丘直下より弥生時代と推定しうる木棺墓2基が確認されている。これに隣接した51号墳の墳丘盛土中より、弥生後期の甕・器台の出土をみたことで、この丘陵上にも弥生時代の遺跡が存在していたものと考えられる。

この他、小田川下流域に展開する低湿地に面した丘陵上に於いても墳丘墓の存在が知られている。新井遺跡の西方約2km、低湿地の南側に所在する本庄古墳群中に於いて、弥生後期段階の土器片を伴う貼石墳丘墓2基を確認している。⁴³

古墳時代 古墳時代では、弥生時代に展開した沖積平野の生産基盤に加え、山間部の谷底平地の開発が進んでくる。古墳時代に入って、前述の新井遺跡においても居住空間は踏襲されたものと考えられる。小田川下流域の本庄地区でも、昭和50年代後半に河川改修がなされ土師器高杯・甕などの出土が知られている。⁴⁴のことから、低湿地の中に微高地が形成され集落が営まれ、沖積平野の開発も進んでいたものと考えられる。小田川中流域に位置する上太夫谷遺跡や上ミツエ遺跡からも古墳時代の土器が出土しており、集落が営まれていたものと考えられる。これらの遺跡は、踏襲されて奈良時代に連続する。

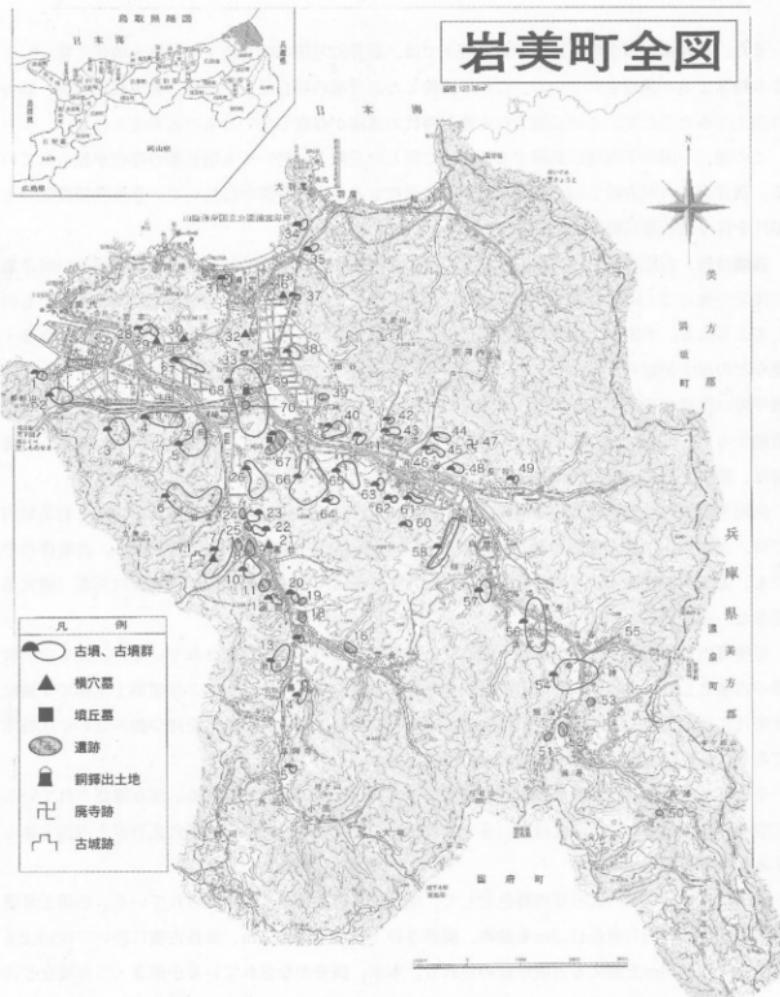
河川下流域の沖積平野周辺や山間部の丘陵上には、多くの古墳群が形成されている。岩美町内では、20余の古墳群が確認され、約450基の古墳と20余基の横穴墓が知られている。古墳群の中でも、蒲生川下流域に所在する新井古墳群は71基、小田川中流域の高野坂古墳群は36基（横穴墓を含む）を数える。

岩美町内では、弥生時代の墓制を継承する古墳出現期の古墳は確認されていない。最も古い段階の古墳としては、新井三鷲谷遺跡の新井南谷3号墳が挙げられる。同3号墳第1主体で4世紀後半に比定される土師器高杯が出土している。この第1主体は、副室を持つ組み合わせ式石棺であり、高杯は土器枕に転用されたものであった。

その後、古墳の造営が各地の丘陵上に展開していったものと考えられる。現在確認されている古墳は、その多くが古墳時代後期（6～7世紀）に造営されたもので、横穴式石室を内部主体とするものである。

岩美町における横穴式石室の特色として、狭長な石室を持つことが知られている。小畠1号墳（穴観音古墳）の石室長11.3mを始め、満願寺谷1号墳では10.7m、弥長古墳に於いては10.2mを測るなど、10mを超える古墳が認められる。本年、調査がなされている小畠3・5号墳など10mを超える狭長な石室とともに、巨石を構築していることが確認されている。⁴⁵これら横穴式石室の多くは、玄室天井の一部を一段高く架構する「中高天井」を採用している。この「中高天井」を有する古墳は、鳥取平野を貫流する千代川以東に見られる通有な形態である。この中でも、町内で確認された高野坂8号墳（調査後消滅）は6世紀後半代の築造であり、「中高天井」の初源形態を示すものとして注目されている。

また、この「中高天井」が分布する地域は、家型石棺を内包する古墳が見られる。鳥取県内で確認されている家型石棺は、11例を数える。この内、8例が千代川以東に見られる。岩美町内では、高野坂古墳群で3例、満願寺谷古墳群で2例が確認されている。中でも、高野坂10号墳の家



- | | | | | |
|-------------|--------------|---------------|---------------|--------------|
| 1. 佐長古墳 | 16. 広庭古墳 | 31. 深室古墳群 | 46. 岩井庵守下層遺跡 | 61. 岩井荒神下古墳群 |
| 2. 小原古墳 | 17. 越内古墳群 | 32. 岩美病院裏古墳群 | 47. 岩井庵寺跡 | 62. 岩井庵座古墳 |
| 3. 平野古墳群 | 18. 船内岡道遺跡 | 33. 新井第1遺跡 | 48. 岩井大野古墳群 | 63. 岩井奥山古墳群 |
| 4. 本庄古墳群 | 19. 真壁遺跡 | 34. 美谷古墳群 | 49. 長谷寺塚古墳群 | 64. 恩志原の谷古墳群 |
| 5. 大田古墳群 | 20. 羽津猪ノ谷古墳 | 35. 牧谷横看古墳群 | 50. 仙崎狀況遺跡 | 65. 桐上古墳群 |
| 6. 安藤守谷古墳群 | 21. 斎ヶ谷古墳羣 | 36. 牧谷横穴古墳群 | 51. 鶴山女郎行遺跡 | 66. 忠志古墳群 |
| 7. 福野坂古墳群 | 22. 真常院山古墳群 | 37. 牧谷下竹原古墳群 | 52. 鶴山真教寺遺跡 | 67. 新井三輪古墳群 |
| 8. 上太夫古道跡 | 23. 真常院山古墳群 | 38. 高山扶間遺跡 | 53. 浅井藤助谷遺跡 | 68. 新井古墳群 |
| 9. 上ミツズ古道跡 | 24. 沓の前遺跡 | 39. 高山扶間遺跡 | 54. 山ノ神古墳群 | 69. 上屋敷遺跡 |
| 10. 高住古墳群 | 25. 篠石遺跡 | 40. 黑山上山古墳群 | 55. 山ノ神遺跡 | 70. 新井遺跡 |
| 11. 麻森古道跡 | 26. 横延古墳群 | 41. 恵山寺山古墳群 | 56. 生古墳群 | 71. 二上山跡 |
| 12. 丹波古墳群 | 27. 清昌日山残古墳群 | 42. 宇治壁山古古墳群 | 57. 丹場古墳群 | |
| 13. 進吉古墳群 | 28. 若木古墳群 | 43. 宇治宮下原古墳群 | 58. 真名古墳群 | |
| 14. 沼谷粉山古墳群 | 29. 若木側六原群 | 44. 宇治市御井谷古墳群 | 59. 真名遺跡 | |
| 15. 綾興寺城古墳 | 30. 若谷横穴墓群 | 45. 若井宮の谷古墳群 | 60. 岩井太郎右エ門古墳 | |

挿図1 岩美町遺跡分布図

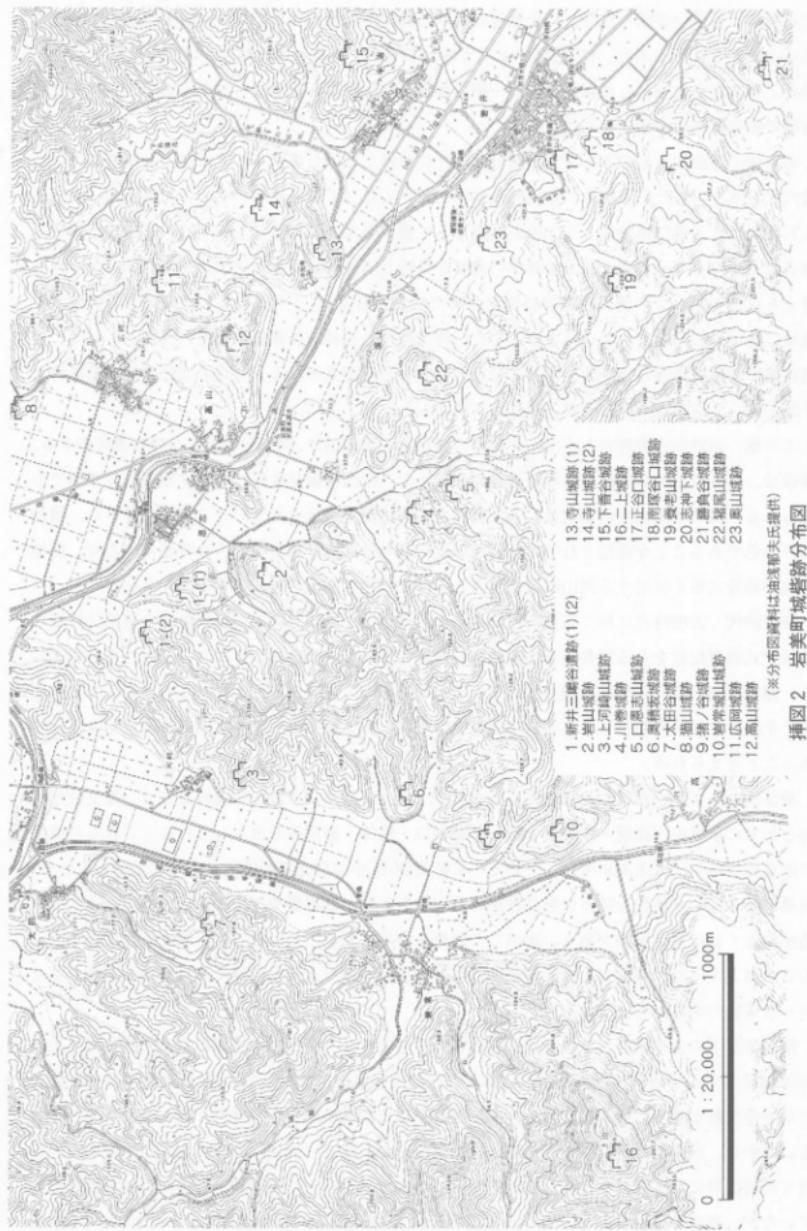


図2 岩美町城跡分布図

型石棺は、蓋部分が厚く作られ、長側辺に6本の縄掛突起を有する。縄掛突起を付す形態は他の地域と異なる様相を示し、「因幡型」とでも呼べるものである。高野坂10号墳出土遺物として、壺部上面に忍冬文を付した銅製壺型鏡・銅製帶金具・須恵器などが見られた。墳形は二段築成の方墳で築造時期は6世紀後半である。^{註7}

当地域で特徴的なものとして、浦富海岸砂丘に埋没していた浦富3号墳は箱式石棺を内包した横穴式石室であった。石棺は、安山岩の柱状石を立て並べて作られていた。この石棺は、玄門部板石閉塞による横口構造をとり、出土遺物として銀象嵌太刀を副葬していた。同3号墳の石室は、腰石以上を失っているが、同古墳群中の浦富5号墳と同様に畿内型の平犬井を呈していたものと考えられている。^{註8} この浦富古墳群に採用された横穴式石室は、「中高天井」を採用する普遍的な地域に於いて特異な存在といえよう。また、柱状節理の石材を埋葬施設に用いた例としては、浦富古墳群の他、坊谷横穴墓群、新井1号墳の竪穴式石室が見られる。周辺の地域では、福部村海士25号墳、兵庫県城崎町福荷裏古墳に見られる。^{註9}

この他、高野坂古墳群から小田川を挟んだ対岸の丘陵裾部に、陶棺を出土した福石遺跡がある。陶棺は、高野坂古墳群前面の通称蔵見越しを越えた、福部村蔵見地区に所在する蔵見3号墳でも見られる。同3号墳出土の陶棺は、蓋上面の両端部に鷲尾が付されていたことで注目され、墳形も多角形であることが確認されている。^{註10} この蔵見3号墳は高野坂古墳群の後背地に当たり、陶棺を埋葬施設に多く採用する岡山県美作地方との儀礼的死生觀に共通するものが窺える。

奈良時代 古墳時代に続く奈良時代になると、蒲生川中流域右岸の沖積平野に白鳳時代後期の法起寺式伽藍配置をとる岩井廢寺（弥勒寺）が造営される。現在は、寺域内にあった塔心礎が残り、通称「鬼の碗」と呼ばれ親しまれている。岩井廢寺の発願主は不明であるが、その周辺の平野を生産及び経済基盤とする氏族集団は恩志古墳群、坂上古墳群、真名古墳群を造営した集団であったと考えられる。

集落跡として、小田川中流域左岸に所在する上ミツエ遺跡・上太夫谷遺跡などで、掘立柱建物跡とともに多量の円面硯・転用硯を始め、輪羽口・鉄滓・銅滓等を出土している。これらの遺跡の南東約3kmに広庭遺跡が所在している。広庭遺跡は、小田川支流の荒金川右岸に立地している。同遺跡からは、規格性を持った掘立柱建物跡が検出され、転用硯や瓦片の出土をみている。広庭遺跡の近くには荒金銅山があり、産出した銅鐵を中央に献上していたものと考えられている。^{註11} このことは、上ミツエ遺跡・上太夫谷遺跡などとともに銅鐵や交通を管掌する官衙的な要素を併せ持った遺跡であると考えられる。

律令制度下の土地制度である条里制に伴う条里地割りは、小田川中流域右岸の平野や蒲生川中流域に展開する平野部に認められる。驛傳制の驛路や傳路について、「鳥取県史・岩美町誌」では、蒲生峠を越えた後、岩井付近・本庄地区を経て鶴馳山峠から福部村に向かう説を挙げている。しかし、当時の自然環境や驛路本来の性格などから見て、蒲生峠を越えた後、更に十王峠を経て因幡国府に至ったとする説もあり定説には至っていない。^{註12} この時期、岩美町は巨濃郡に属していたが、郡衙の所在は不明である。諸説あるが、小田川流域の広庭遺跡も含めた上ミツエ遺跡、

上太夫谷遺跡の周辺に造られていたものと考えられる。

南北朝時代 南北朝時代には、文和年間（1352～1355年）に山名氏が二上山に因幡守護所を置いたことが知られる。この二上山山麓裾部に位置する上ミツエ遺跡や上太夫谷遺跡からは、当時の遺物である青磁・白磁・天目茶碗などの陶磁器類を出土している。

これ以降、戦国時代に至るまで各地に城砦が築かれており、戦術的な山城として機能していたものと考えられる。

参考文献

「新井51号墳」岩美町教育委員会 1986

「新井32号墳」岩美町教育委員会 1987

「上ミツエ遺跡発掘調査報告書」岩美町教育委員会 1987

「福富3号墳発掘調査報告書」岩美町教育委員会 1988

「広瀬遺跡発掘調査報告書」岩美町教育委員会 1989

「上太夫谷遺跡発掘調査報告書」岩美町教育委員会 1991

「山ノ神5号墳発掘調査報告書」岩美町教育委員会 1991

「高野坂古墳群発掘調査報告書」岩美町教育委員会 1992

註1 長径1.43m、短径1.34m、深さ約0.4mを測るやや歪な円形の土坑で掘り鉢状を呈している。安山岩系の石材は、岩井付近に産出するものである。

註2 新井一峠谷1号墳墓は、貼石・列石の状況と南東隅部の解釈で四隅突出型墳丘墓であるとする意見もある。

註3 山脇雅美氏教示。九重段階の弥生土器片が採取されている。

註4 鳥取市在住、長見久信氏教示。河川改修の折、川床付近の粘土帯より出土していた。所謂「流れ込み」ではなく、量的にもまとまっていたようである。

註5 岡山理科大学助教授、亀田修一氏教示。組み合わせ式石棺に副室を備える例として、岡山県北部地域に3例、奈良県・和歌山县に各1例が知られているのみである。

註6 小畠3号墳の玄室に家型石棺が納められていた。この家型石棺は、従来岩美町内で確認してきた石棺とは趣を違え、蓋石は割り替き式であるが、棺身は組み合わせ式である。棺身の底部は、側板を嵌め込ませるために浮き彫り状に造られている。規模も大きく、全長約2.4m、幅約1m、全高は約1mを測る。

註7 高野坂10号墳は、1987年の調査では、遺存する石列の状況より方墳としている。しかし、墳裾部西側の石垣が若干西方にせり出し、石室背後の石列がやや弧状を描いていること等から、亀田修一氏が指摘する如く多角形墳もしくは八角形墳であった可能性も考えていいといけない。当事例だけでなく、隣接する国府町尾山古墳では、その後の調査により変形八角形墳であることが確認され、墳丘前面に石垣と外縁列石等による方形壇が付設されていた。また、高野坂古墳群背後地に立地する横部村藏見3号墳に於いても、試掘調査により変形八角形墳であることが確認されている。このように見てくると、高野坂10号墳は、本来、墳丘の前面に方形壇を付設していた可能性が高いと思われる。

註8 浦富2・5号墳とともに現在その姿を見ることは出来ない。しかし、「岩美町誌」によると、既「畿内型」の平天井を呈しているが、玄室中央部の大井石が前後より若干高く架構していることが認められる。側壁の上部も、高く架構した結果生じた隙間に小振りな石材を充填している。所謂「中高大井」を採用した横穴式石室とは趣を異にしているようであるが、食退していく時期のものと考えておきたい。石室平面プランは長台形を呈し、所謂「羽子板型」であり「畿内型」と当地域特有な「中高天井」型の折衷様式といえよう。

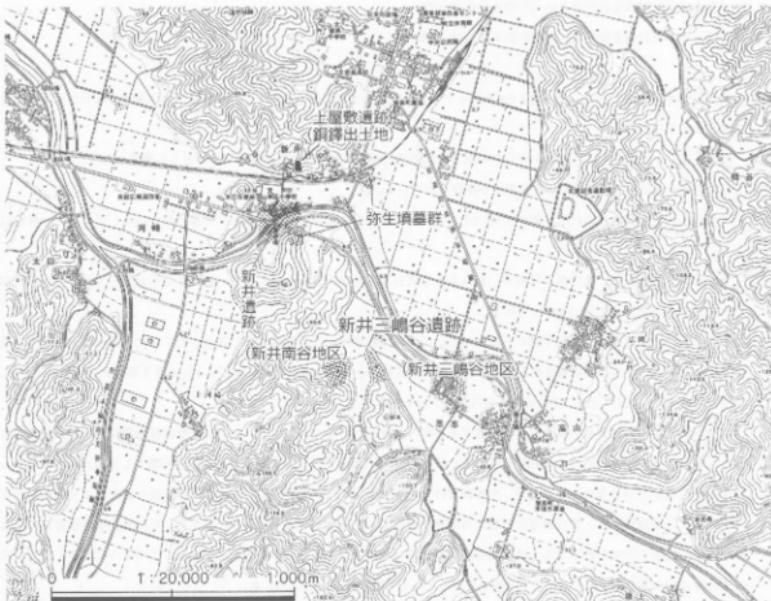
註9 岩美町内では、他に新井51号墳、新井三鷗谷遺跡南谷5号墳などでも柱状節理の石材が使用されている。

註10 蔵見3号噴出土の陶棺は、棺蓋の様部両端に鶴尾が付してあった。全体形が見える全国でも唯一のものである。他には、岡山県北部に1~2点見られるのみである。

註11 『続日本紀』「因幡國御饋獻」の記事による。

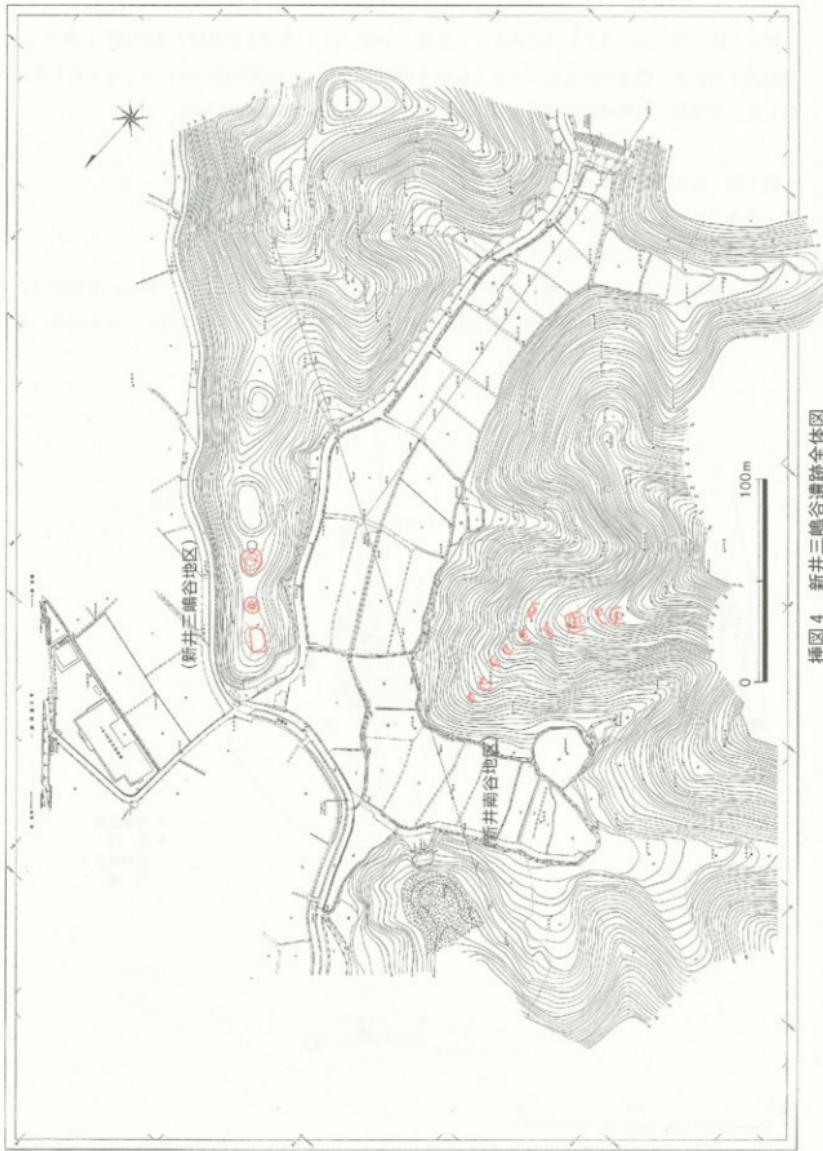
註12 山陰道は、弥生時代十王跡を経て国府町福本庵寺付近を通過し、因幡国府に至ったと考えるのが妥当である。岩美町（当時は臣属郡）内は、福部村藏見より高野坂越し（岩美町内での通称名は藏見越し）を経て小田川～広庭連跡付近より山越えし岩井廃寺の立地する平野部に所在していたであろう部衝に至る佛路が在ったものと考えられる。

第3章 発掘調査の概要



挿図3 新井三鷗谷遺跡位置図（新井三鷗谷周辺部）

插図4 新井三輪谷遺跡全体図



第1節 新井三崎谷地区の調査 [挿図3~5、図版1・2]

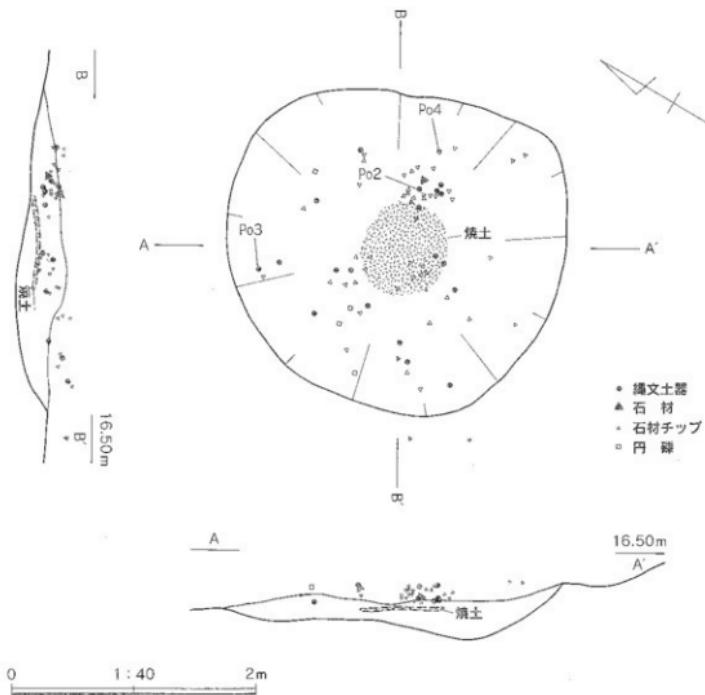
新井三崎谷地区は、蒲生川中流域左岸に立地し、北西方向に伸びる低丘陵の先端部に位置する。発掘調査の結果、縄文時代後期の石器工房跡を始め、弥生時代後期初頭の貼石墳丘墓1基と墳丘墓1基、木棺墓、古墳時代中期の古墳2基、同後期の古墳1基で構成される。

第1項 縄文時代の遺構

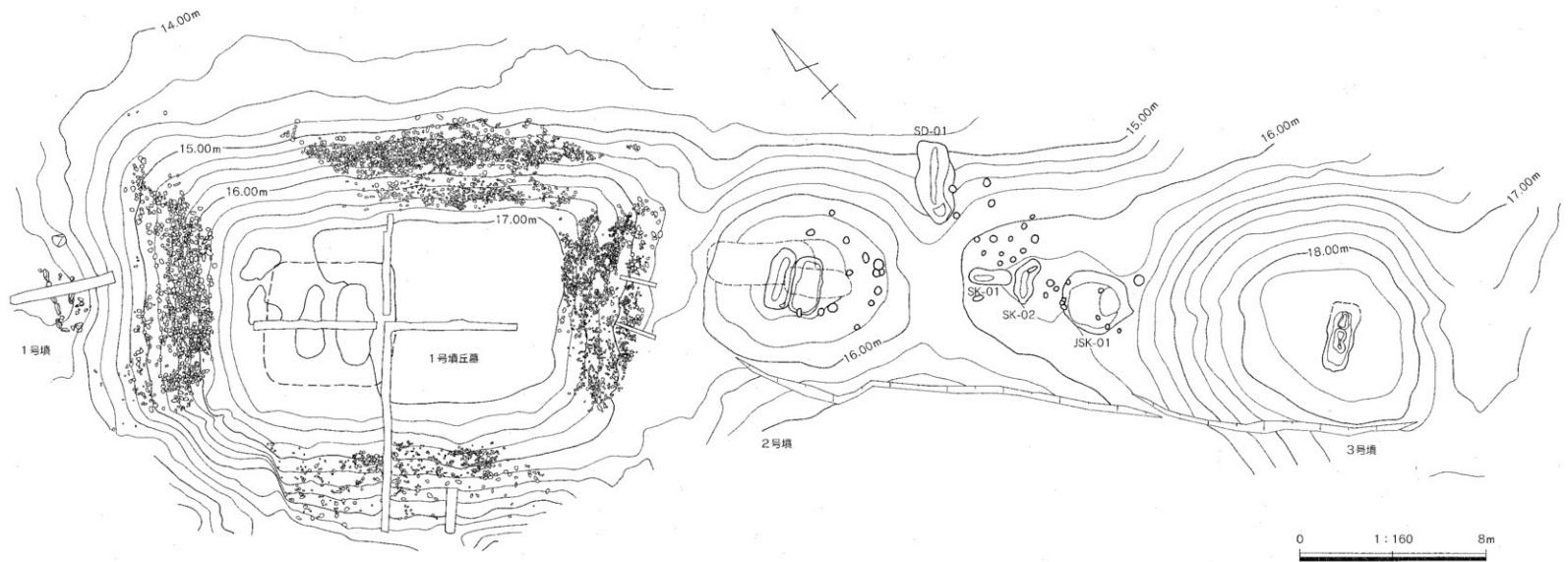
1. 新井三崎谷地区 J S K - 0 1

1) 遺構 [挿図5、図版3・4・5]

新井三崎谷2号墳と新井三崎谷3号墳の中間に位置する。標高は16.25mを測る。平面形は亜な円形を呈し、規模は検出面で長径1.15m、短径1.34m、深さ0.4m、床面積4.72m²を測る。掘



挿図5 新井三崎谷地区、JSK-01遺構図・遺物出土状況図



挿図6 新井三鷲谷地区、遺構全体図



挿図7 新井三嶋谷地区、JSK-01出土縄文土器実測図

り形は擂鉢状を呈する。埋土は基本的に黄褐色粘質土層の1層であるが、下層ほど締まりがよくなる。埋土上層からは炭片に混じって安山岩質の石材および多数の安山岩・黒曜石チップ片、繩文土器の細片を検出した。これらは土坑中央の焼上面より上層に分布している。このことは、土層では確認できなかったが、土坑がある程度埋まつた状態の時、焼土が形成され、さらに安山岩・黒曜石のチップ片や繩文土器が堆積したものと思われる。焼土と石材チップとの関係は定かではないが、遺物の出土状況からこの場所で何らかの石器製作が行われた可能性が推測される。

2) 出土遺物 [挿図7、挿表2、図版37]

Po1は口縁部片で、端部でやや内湾し面をもつ。外面は縄文を口縁端部まで施し、沈線をいれる。内面はナデ調整する。Po2は口縁端部片か。口縁上端に粘土を貼り付け肥厚させる。外面には縄文を施す。内面はナデか？煤が付着している。Po3は口縁部片で、端部は面をなす。外面は縄文、内面はナデ調整する。Po4は体部片で、外面は縄文、内面はナデ調整する。

遺物の時期は、Po1は後期の磨消縄文と考えられる。口縁外面に貼り付け突帯をもち、縄文を施すPo2は、中期的な特徴を呈しており、Po2と胎土、色調が類似するPo3・4は同時期のものかと思われる。しかし、これらの土器が細片であるため、土器の時期を断定しかねる。JSK-01の時期は、Po1の特徴を豪華して縄文時代後期と推定する。

第2項 弥生時代の遺構

新井三嶋谷1・2号墳丘墓については、「『新井三嶋谷墳丘墓発掘調査報告書』2001年岩美町教育委員会発行」に詳細な報告があるので、ここでは概略のみ記述しておく。

1. 新井三嶋谷1号墳丘墓 [挿図6・23、図版1]

新井三嶋谷地区が所在する丘陵の先端部に位置し、標高14m～17mに立地する。墳丘四辺の斜面には貼石が施されており、弥生時代後期初頭の貼石墳丘墓であることが判明した。

墳丘の規模は、主軸上で東西17m、南北24mを測り高さは約3mである。北側の墳丘裾部は、古墳時代後期に古墳が造られているため確定できなかったが、南面では弧状を描く列石と貼石構造が良好に遺存していた。東面はやや直線状ではあるが、良好な貼石構造が看取された。墳丘の北東部・南東部に於いてやや不明瞭ながら僅かな張り出しが認められた。この張り出し部が、所謂四隅突出型墳丘墓の突出部と同様な性格を持っているものと考えたい。張り出し部には列石・貼石は遺存しておらず、現段階では地山削り出しによるものと考えられる。これら東面の張り出し部の端部間は全長は約26mを測り、同様に張り出し端部間の東西長は約18mと推定される。

2. 新井三嶋谷2号墳丘墓 [挿図6・23、図版1]

新井三嶋谷1号墳丘墓の南側に隣接して位置する。2号墳丘墓の直上に、古墳時代中期の古墳が造られていたため、墳丘墓の形状・規模等は不明である。

墳頂部に於いて2基の木棺墓が確認できた。供獻土器・副葬遺物の出土は見られず、築造時期は判然としないが、1号墳丘墓とはほぼ同時期に存在していたものと考えられる。

第3項 古墳時代の遺構

1. 新井三嶋谷1号墳 [挿図6・23]

新井三嶋谷1号墳丘墓北面の墳丘裾部に位置する。横穴式石室を内部主体とする古墳で、腰石のみの遺存である。所謂、羨道部を有していない横穴式石室である。

詳細は、「『新井三嶋谷墳丘墓発掘調査報告書』2001年岩美町教育委員会発行」を参照されたい。

2. 新井三嶋谷2号墳 [挿図5・8~13、図版6~8・37]

1) 位置と現状

新井三嶋谷1号墳丘墓の南側に隣接して位置する。本墳の南側には平坦部が所在し、これに連続して3号墳が隣接している。墳丘の頂部は平坦面を成し、後世に何らかの削平を受けたものと考えられる。

2) 墳丘

地山整形

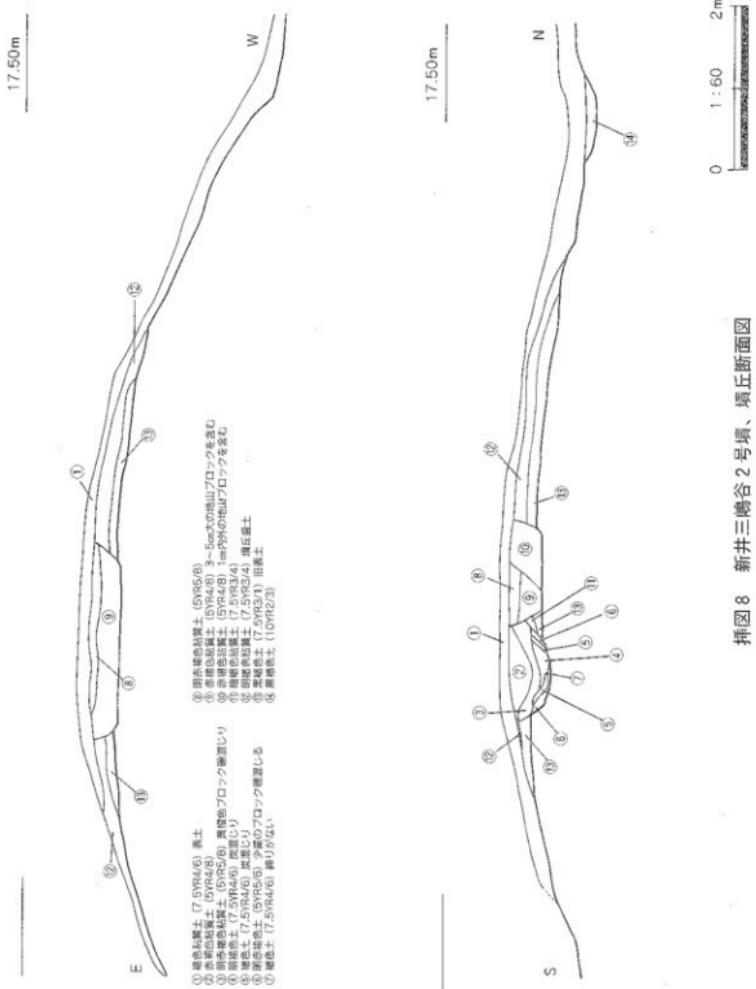
本墳は、新井三嶋谷2号墳丘墓直上に造られ、標高15m~16.5mに立地している。北側は新井三嶋谷1号墳丘墓が立地しているため幅約2.5m、深さ0.25mを測る緩やかな凹レンズ状の周溝を成す。周溝は、墳丘の周囲を巡らしておらず、丘陵の尾根上を区画するための措置であると考えられる。墳丘の南側では、北側と同様な浅い堀切状の周溝が造られていた。墳丘基底面は、北側では周溝底部をベースとしている。黒褐色を呈した旧表土は、新井三嶋谷1号墳丘墓頂部より緩やかな傾斜で新井三嶋谷2号墳南側の墳丘裾部に連続している。このため、墳丘北側に於いては溝の内側で削平を行う地山整形が成されている。

墳丘

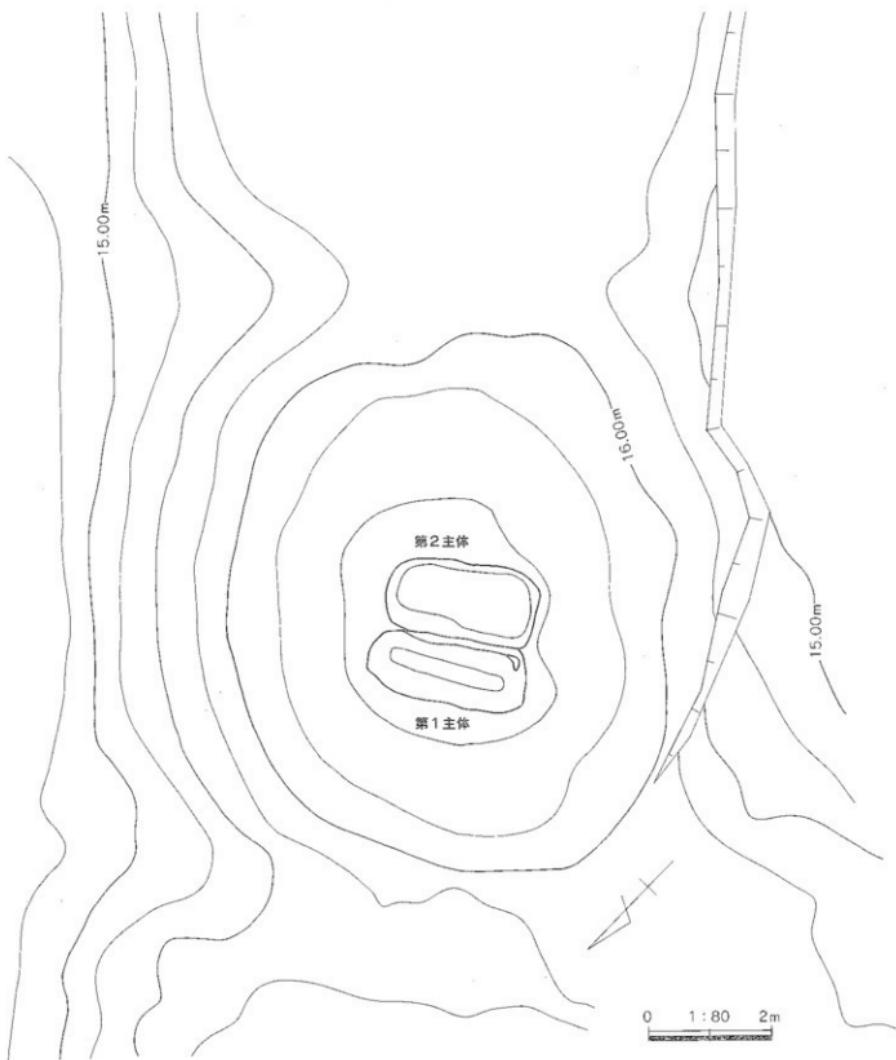
墳丘は、古墳のマウンドとしての体裁をやや良好な状態で残していた。しかし、墳頂部は後世の開削を受けているため墳丘盛土の上部を失っていることが知られた。この開削は、墳頂部全面に行われているためほぼ水平な平坦面を成している。

本墳は、旧表土より盛土が施されていた。墳丘盛土は、周溝掘削時に生じた地山土を主として盛り上げ構築している。このため、層序の確認には不明瞭さを伴うが、その築造過程は基本的に2段階に行われたものと考えられる。第1段階は、墓壙掘り下げに関わる面まで行う。第2段階は、埋葬行為が終了した後、再度盛土（化粧土）を施して墳丘の体裁を整えたと考えられる。墳丘盛土は、トレーナー上層断面の観察により墓壙検出面までの厚さは約0.2mを測ることから、

17.50m
N
E
W
S
0 1:60 2m



挿図8 新井三鳴谷2号坑、填丘断面図



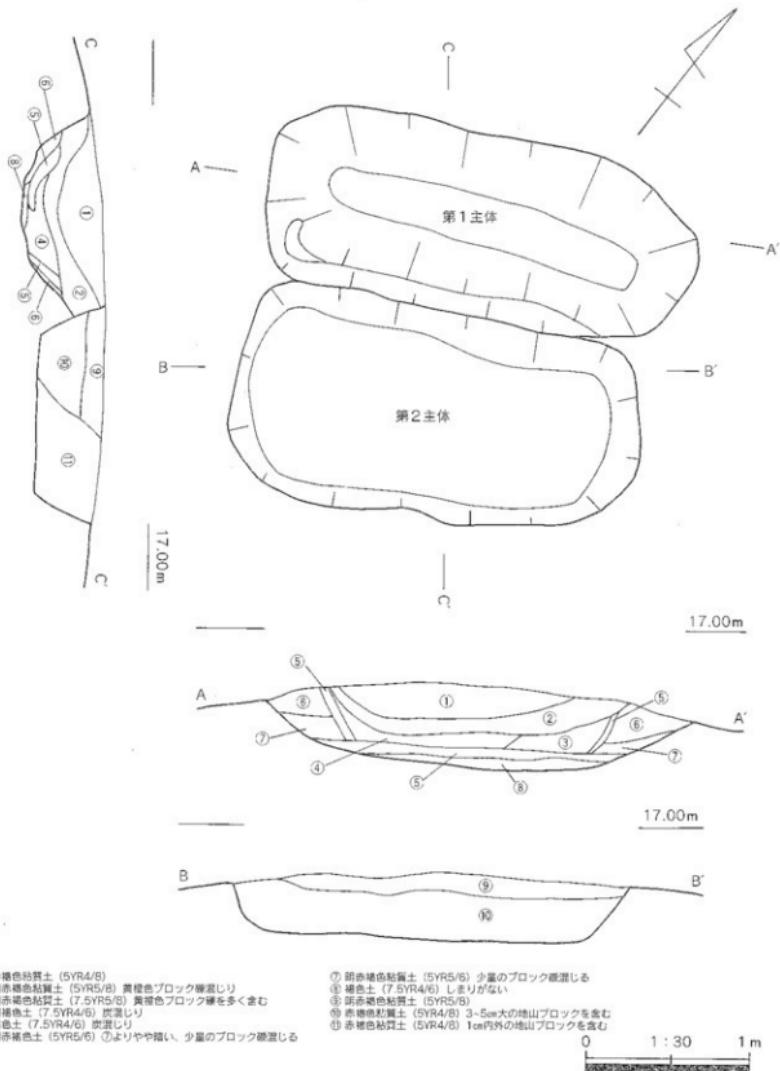
挿図9 新井三鷄谷2号墳、遺構図

本来は約0.3~0.4mの盛土が施されていたものと考えられる。

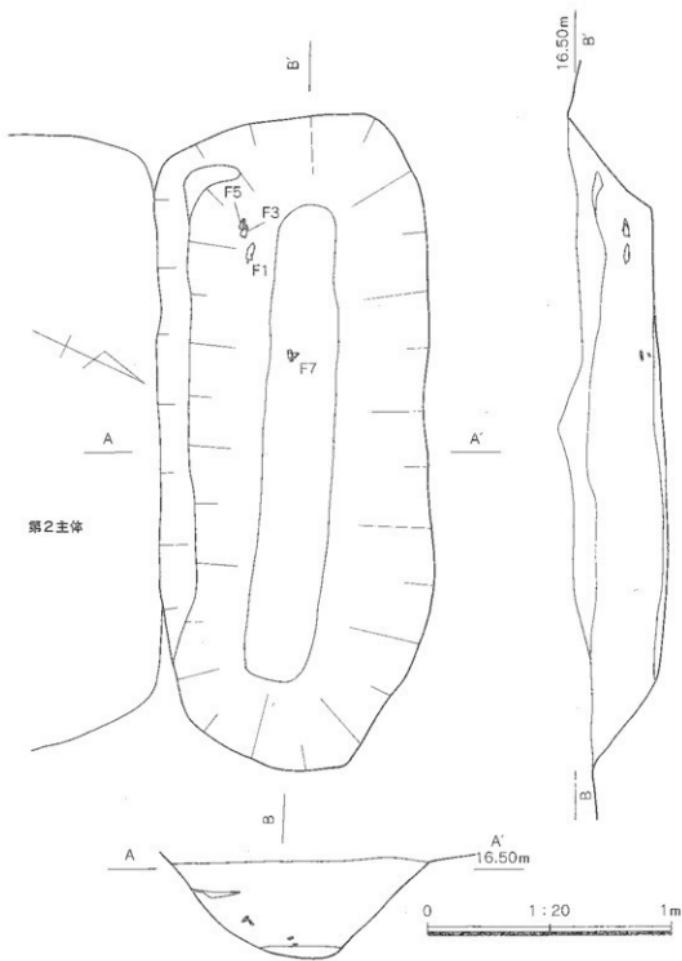
墳丘裾部ラインはやや南北に長い楕円形を成し、長径約12m、短径約11mを測り、墳丘の高さは約0.75~1.5mである。墳頂部遺構面の標高は16.7mである。

3) 墓葬施設 [挿図10~12、図版6~8]

墳頂平坦部のほぼ中央部に於いて2基の木棺墓を検出した。木棺はその占有する位置から、北



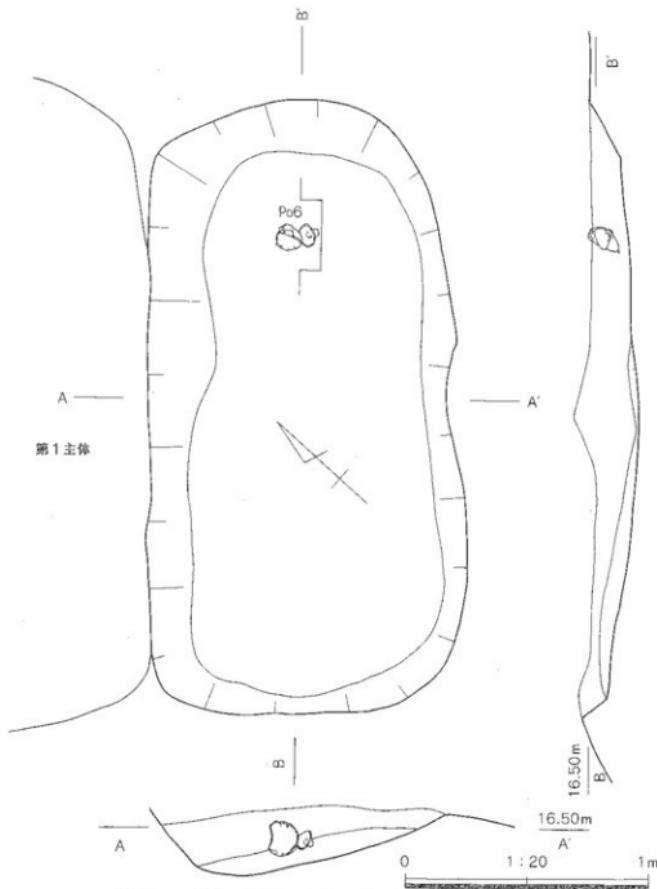
挿図10 新井三鳴谷2号墳、第1・2主体遺構図



挿図11 新井三鶴谷2号墳、第1主体遺物出土状況図

側のものを第1主体、南側を第2主体とした。これらの木棺墓は、盛上面より掘り込まれて造られており隅丸長方形の墓壙掘り形を成す。

第1主体 墳頂部中央北側に位置する埋葬施設である。墓壙掘り形は、長辺2.7m、短辺1.15m、深さ0.57mを測り、その主軸方位はN-70°-Eである。この墓壙の中央に、内法長約1.9m、幅約0.4mを測る組み合わせ式木棺を埋置し、頭位を西に向けたものと考えられる。墓壙内には、木棺の南西隅にテラス状の平坦部が造られている。テラスの幅は0.07mを測る。墓壙底部

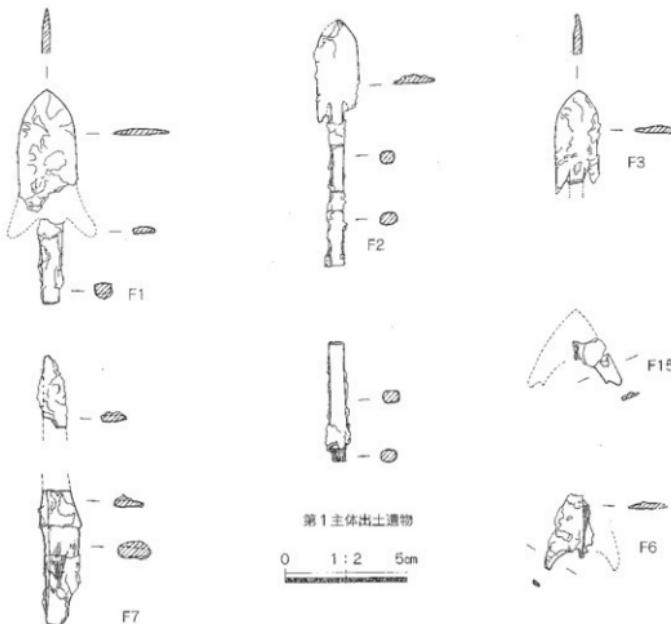
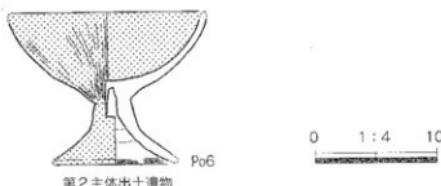


挿図12 新井三鷲谷2号墳、第2主体遺物出土状況図

は浅いU字状を成しており、舟底状の木棺であったと考えられる。所謂小口穴は検出されなかった。

第1主体の棺内遺物として、鉄器を7点検出している。鉄鏡（F1・3・5）は、墓壙の南東側隅で、床面よりやや浮いた状態で出土し、刀子（F7）は、墓壙中央よりやや南側の床面付近から出土した。

第2主体 第1主体の墓壙掘り形を切って造られている。墓壙掘り形は、長辺2.52m、短辺1.34m、深さ0.4mを測り、その主軸方位はN-62°-Eである。この墓壙の中央に組み合わせ式木棺を埋置したものと考えられる。墓壙内埋土は不明瞭なため、木棺の規模は不明である。



挿図13 新井三鷲谷2号墳、第1・2主体出土遺物実測図

出土遺物として、土師器高杯（Po 6）を1個体検出している。高杯は受部と脚部に分割され、土器枕として、転用されていた。

4) 出土遺物 [挿図13、挿表3・4、図版37]

第1主体出土遺物

鉄鎌（F 1～6）は、いずれも欠損品である。F 1～3は柳葉式の鎌である。F 2は長頭を呈し、関は台形か？、F 5・6は、1/2以上欠損しているが、残存する形態より三角形式の鎌と考えられる。無頭で鎌身中心部に木質痕が残る。F 5の逆刺は、重抉を呈する。刀子は（F 7）、身の中心部を欠く。茎に木質痕がある。

造構の時期については、第2主体と大過ないものと考えられる。古墳時代中期に築造されたものと推測される。

第2主体出土遺物

Po 6は高杯で、赤色塗彩されている。受部は内湾し、脚部は裾部でハの字形に開くものである。調整は、杯部外面タテハケメ、内面ヨコナデ、脚柱部はヨコナデ、裾部はヨコハケメ後工具ナデを施している。口径15.8cm、器高12.5cmを測る。

遺物の時期は、出土した高杯（Po 6）の形態より岩吉櫛年鑑期に相当すると考えられる。よって2号墳は古墳時代中期に築造されたものと考えられる。

3. 新井三鷲谷3号墳 [挿図6・14~19、図版9~11・38・39]

1) 位置と現状

新井三鷲谷地区の南側に位置する。本墳の北側には平坦部が所在し、これに連続して北側に新井三鷲谷2号墳が隣接している。墳丘の頂部は平坦面を成し、後世に何らかの削平を受けたものと考えられる。

2) 墳丘

地山整形

本墳は、標高16.5m~18.5mに立地している。北側は緩やかに平坦部に続いているが、南側には幅約2.8m、深さ0.2mを測る周溝を成す。周溝は、墳丘の周囲を巡らしておらず、丘陵の尾根上を区画するための措置であると考えられる。墳丘基底面は、北側では平坦部をベースとしている。黒褐色を呈した旧表土は標高18m付近で水平に遺存していることから、墳丘裾部を削平する事でマウンド状の高まりを造り出す地山整形が成されている。

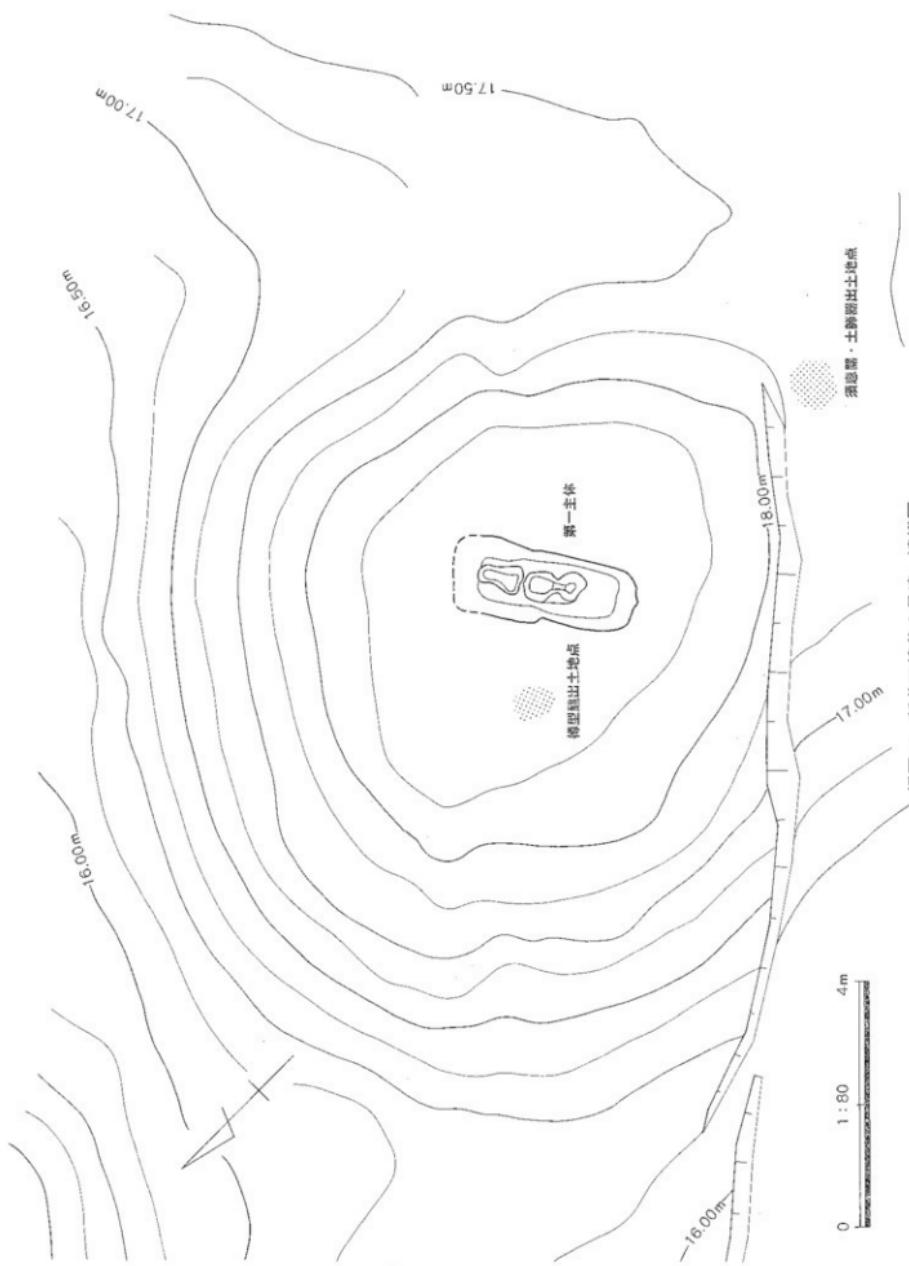
墳丘

墳丘は、古墳のマウンドとしての体裁をやや良好な状態で残していた。しかし、墳頂部は後世の開削を受けているため墳丘盛土の上部を失っていることが知られた。この開削は、墳頂部全面に行われているためほぼ水平な平坦面を成している。

本墳は、旧表土面より盛土が施されていた。墳丘盛土は、周溝掘削時に生じた地山土を主として盛り上げ構築している。このため、層序の確認には不明瞭さを伴うが、その築造過程は基本的には2段階に行われたものと考えられる。第1段階は、墓塚掘り下げに関わる面まで行う。第2段階は埋葬行為が終了した後、再度盛土（化粧土）を施して墳丘の体裁を整えたと考えられるが、後世の削平により盛土上層は失っていた。旧表土直上の墳丘盛土中よりベンガラを充填した須恵器樽型埴が正立状態で出土した。造墓に関わる祭祀行為が行われたものと考えられる。

墳丘裾部ラインはやや南北に長い橢円形を成し、長径約14m、短径約13mを測り、墳丘の高さは約1.7mである。墳頂部の標高は18.5mである。

插图14 新井三崎谷3号塘、遗沟图



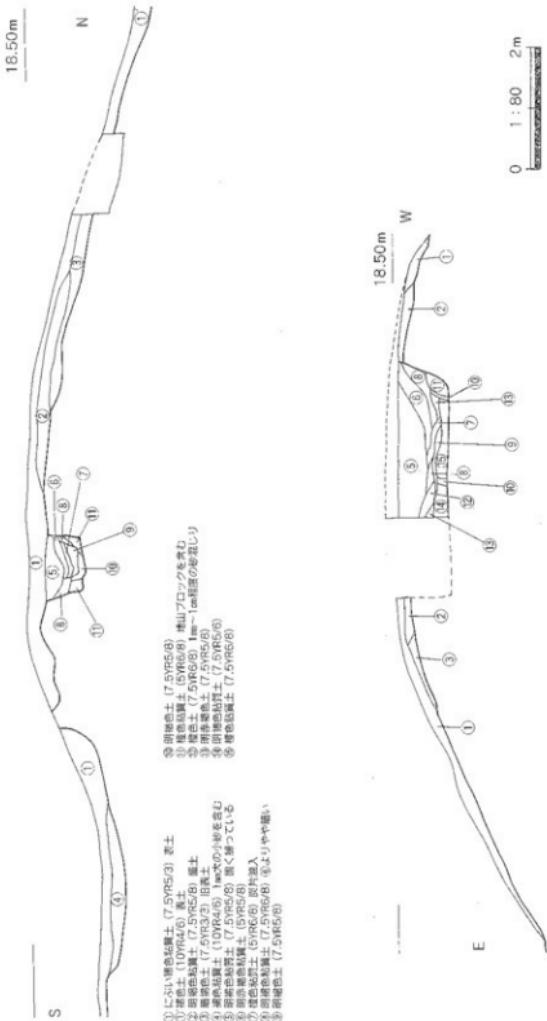
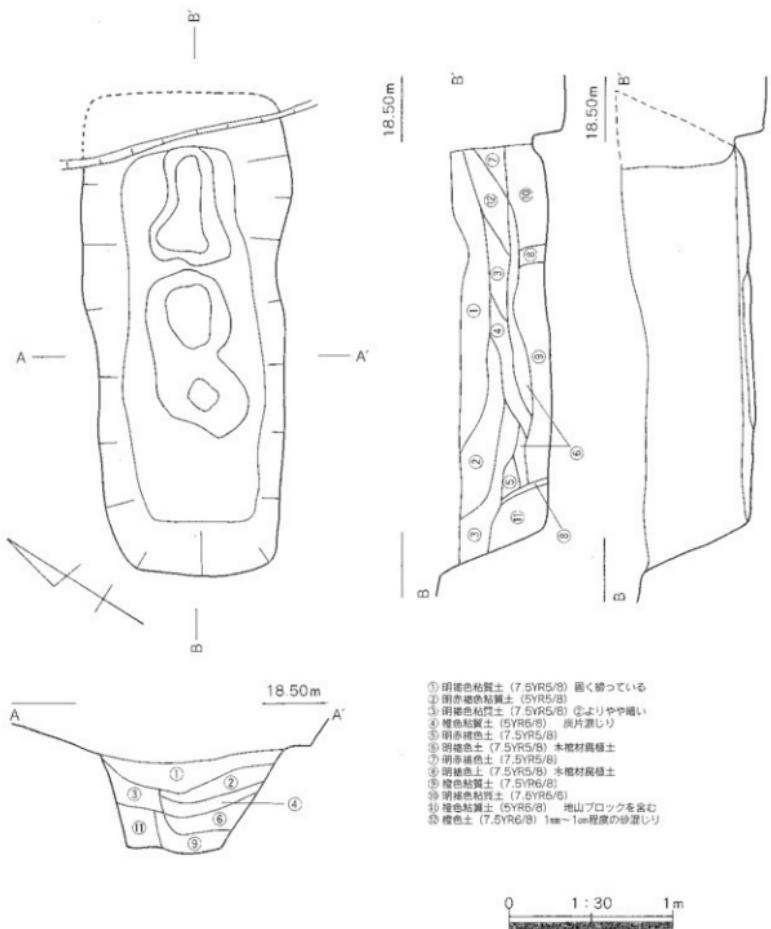


插图15 新井三崎谷3号壕、填丘断面図

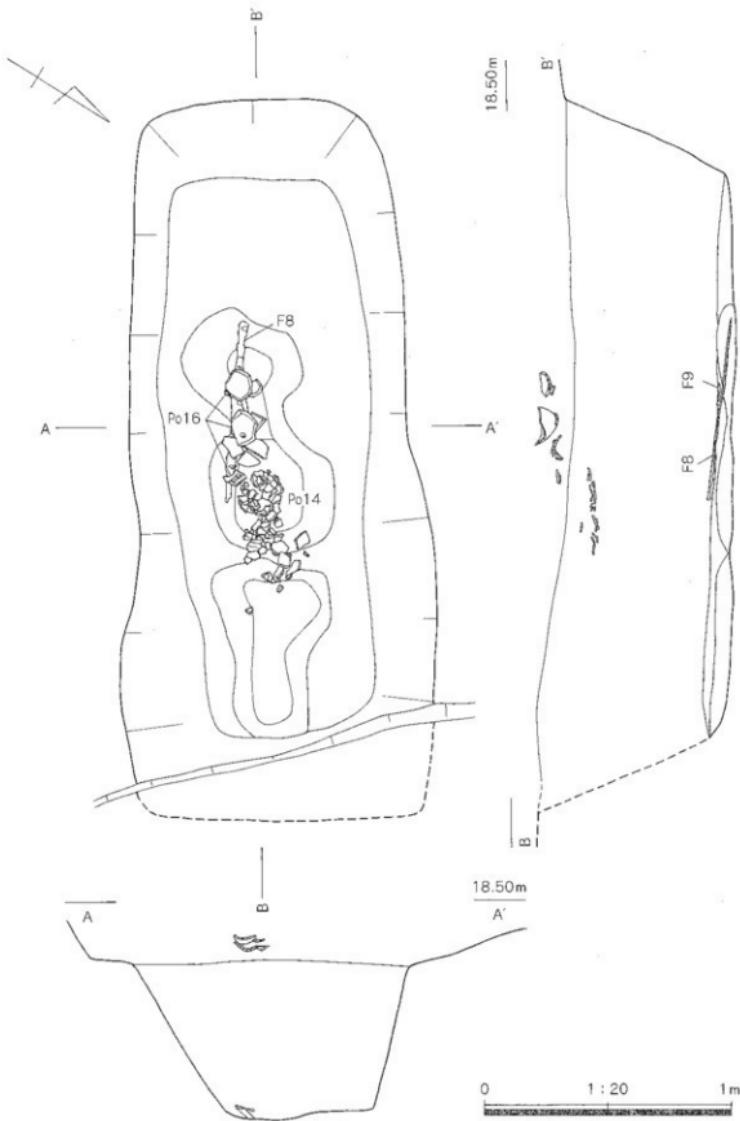


挿図16 新井三鶴谷3号墳、第1主体遺構図

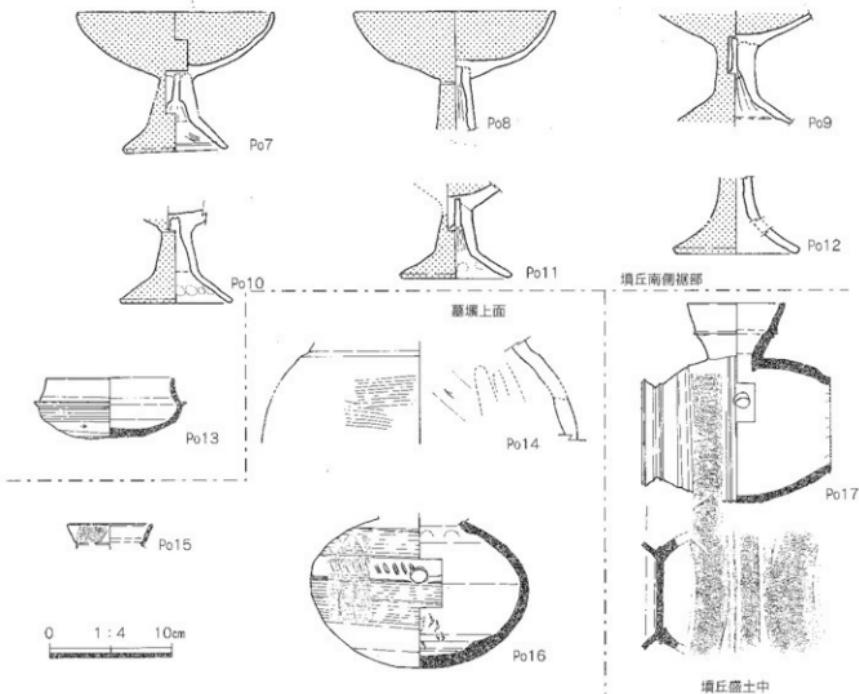
3) 埋葬施設 [挿図16・17、図版10]

墳頂平坦部のほぼ中央部に於いて1基の木棺墓を検出した。この木棺墓は、盛土面より掘り込まれて造られたものと考えられるが、後世の削平により盛土上層を失っている。墓壙掘り形は隅丸長方形を成す。

第1主体 墳頂部中央に位置し、墓壙掘り形の規模は長辺推定約2.95m、短辺約1.3m、深さ



插図17 新井三鷹谷3号墳、第1主体遺物出土状況図



挿図18 新井三鶴谷3号墳、出土遺物実測図

0.67mを測る。その主軸方位はN-58°-Eである。墓壙内埋土の堆積状況を見る限り、墓壙の南側に偏って内法長1.32m、幅0.35mを測る組み合わせ式木棺を埋置したものと考えられる。墓壙底部北側には木棺の長側板を安定化するための裏込め土が確認できた。墓壙内埋土の堆積状況から小口板の痕跡を確認したが、所謂小口穴は検出できなかった。東側の小口板は、長側板端部より内方に入り込んでいることが知られた。このことは、東側の小口板は両側板に挟まれたことを意味し、西側のそれは側板端部を押さえ込む形を取ったものと考えられる。これにより第1主体に埋置された木棺は、小口板の一方を両側板で挟み込んで組み合わされた所謂梯子型の類型と考えられる。墓壙底部から出土した鉄刀は、被葬者の足下に副葬されたものと考えられる。墓壙掘り形の東側が若干広く造られていることと符合する。従って、頭位は東にttiしたものと考えられる。

第1主体埋土上面より須恵器甕（Po16）、土師器甕（Po14）を検出した。これらは、ひとまとめの破片になって出土しており、本来は完形品が供獻されていたものと考えられる。

墓壇内床面より鉄刀（F 8）と刀子（F 9）を検出している。これらは、墓擴掘り形の中央よりやや南西側に並列した形で埋納されていた。鉄刀は刃を内側に、切先を北東側に向けて、また刀子は、鉄刀の横に刃を外側に向けて、同じく切先を北東側に向けて置かれていた。

墳丘南側裾部より、土師器高杯（Po7～12）、須恵器杯身（Po13）を検出した。これらは一ヶ所にかたまって出土しており、この場に供献された遺物と考えられる。

墳頂部からは、第1主体の西側で樽形龜（Po17）を検出した。墳丘盛土中に埋置されたもので、龜の中にはベンガラが充填されていた。造墓に際してなんらかの祭祀行為が行われたものと考えられる。

4) 出土遺物 [挿図18・19、挿表5・6、図版38・39]

土師器高杯（Po7～12）は、内湾する杯部を有し、脚は裾部でハの字形に開くものである。内外面ナデ調整する。杯底部、脚部にハケメ痕が残るものがある。内面受部と外面は赤色塗彩されている。

須恵器杯身（Po13）は、長い立ち上がりを有するもので、内湾気味に立ち上がり端部は丸く納める。体部は丸みをもち、受部はほぼ水平に伸びる。外面は体部ヘラケズリ後カキメ調整をし、体部1/3以下はナデ消す。内面はナデ調整する。

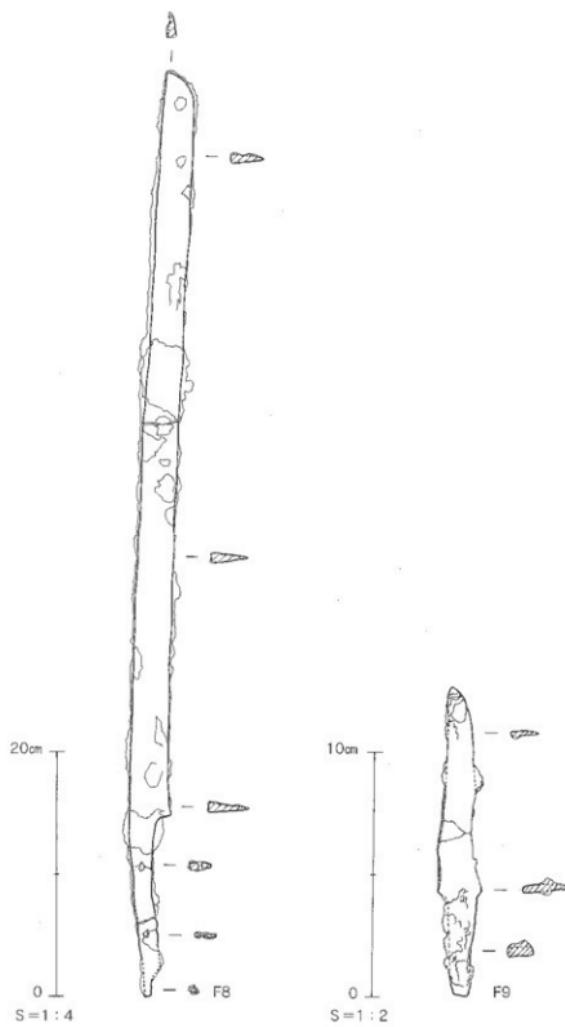
土師器甕は（Po14）、球形の体部を呈する体部片である。外面は、頸部ヨコナデ、体部ヨコ方向の荒いハケメ、内面は斜め上方へのヘラケズリを行う。

龜（Po15～17）は、小型の龜の口縁部片（Po15）と大型の龜（Po16・17）の3点がある。Po16は、球形の体部を呈し中位には沈線に挟まれて刺突列点文を施す。Po17は、樽型龜である。所謂ビア樽形を呈し、中央部はやや膨らみをもつ。口頭部は段をもち端部は面をなす。体部は4条の沈線を施し、その間は波状文で飾る。

鉄刀（F 8）は、全長75.7cm、身長61.0cm、茎長14.7cmを測る。フクラ切先を呈し、関は片関、茎には2カ所に目釘穴がある。刀身と茎部には木質痕がある。

刀子（F 9）は、全長12.6cm、身長8.5cm、茎長4.1cmを測る。フクラ切先を呈し、関は両関である。刃は関から身の2/3程度が摩滅している。

遺物の時期については、主体部西側の墳丘盛土の中から出土した樽型龜（Po17）が、上層からの掘り込みが確認されなかったことより、墳丘盛土中に埋置されたもので、古墳築造段階のものと推定される。主体部上面より出土した須恵器龜（Po16）と土師器甕（Po14）、また周溝内から検出された土器は供献されたものと思われる。樽型龜は陶邑編年T K-208型式に相当すると考えられ、その他の土器もこれと同時期のものであると推測される。土師器の高杯は岩吉編年Ⅶ期に相当すると考えられる。3号墳の築造年代は、古墳時代中期と考えられる。



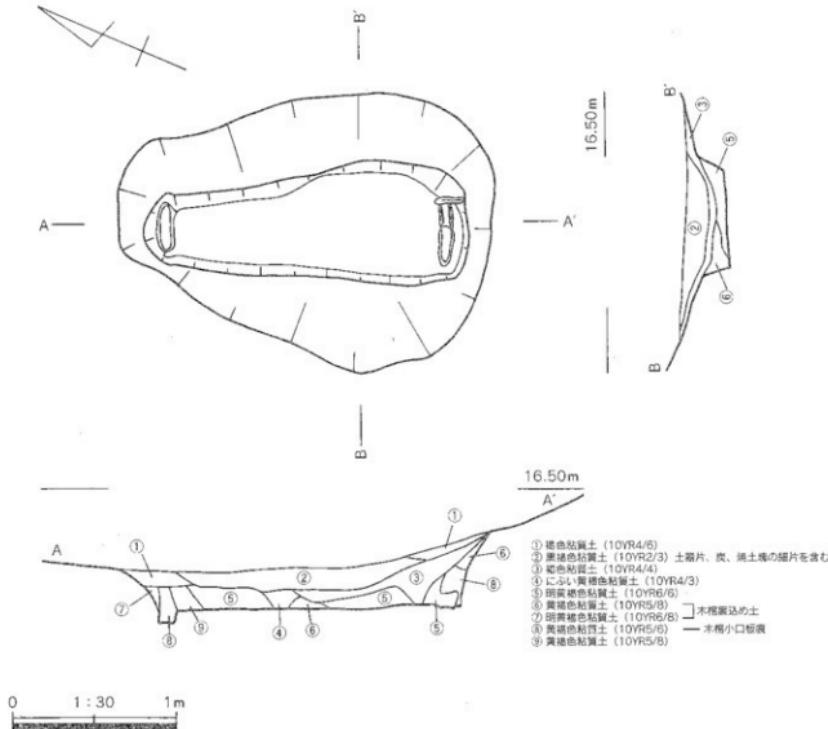
挿図19 新井三嶋谷3号墳、第1主体出土遺物実測図

4. 新井三嶋谷地区木棺墓

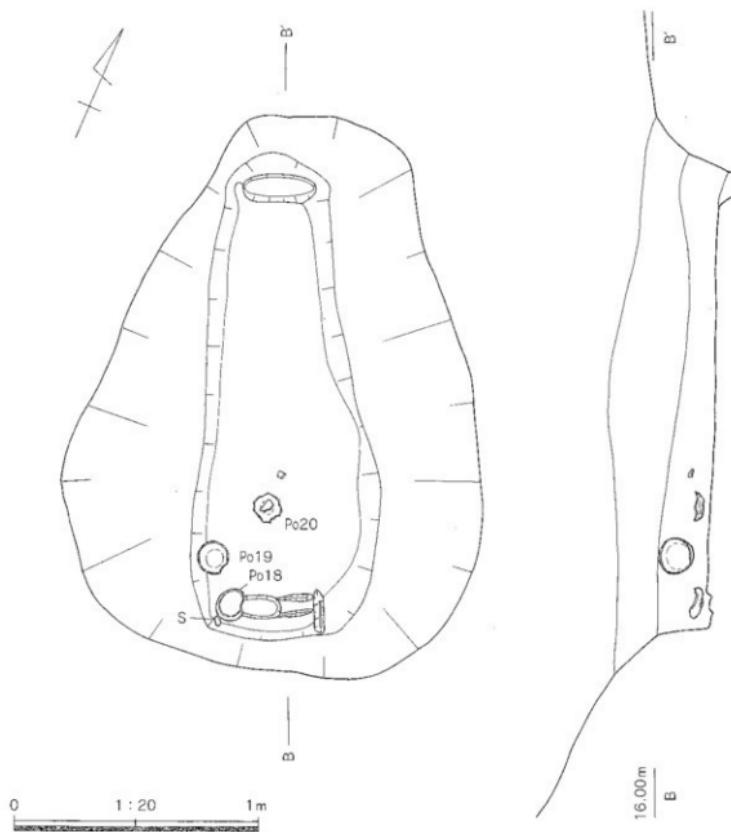
1) 遺構 [挿図6・20・21、図版12・13]

新井三嶋谷3号墳北側の墳丘斜面裾部に位置し、標高16.25mを測る。地山の岩盤を掘り込んで造られており、主軸はN-22°-Eをとる。まず、長径2.25m、短径1.7mの不定形な楕円を掘り込み、次に長辺2.0m、短辺0.42~0.75mの木棺を納めるための墓壙を掘り込む。南側はやや幅広となっている。墓壙底部の両端部には、小口板をはめ込んだ小口穴と、側板を差し込んだと考えられる痕跡と、南北土層断面では(挿図20)、木棺小口板の痕跡と思われる⑧黄褐色粘質土層を検出している。これを元に木棺を復元すると、内法長約1.75m、幅約0.3mとなる。

木棺の南側で須恵器杯蓋(Po18・19)、須恵器杯身(Po20)を検出している。これらは、木棺



挿図20 新井三嶋谷地区、木棺墓遺構図



挿図21 新井三鳴谷地区、木棺墓遺物出土状況図



挿図22 新井三鳴谷地区、木棺墓出土遺物実測図

墓南側から出土しているが、元位置を保つものではなく、木棺腐朽に伴って落ち込んだものと考えられる。

2) 出土遺物 [挿図22、挿表7、図版40]

Po18・19は杯蓋である。Po18は断面三角形の短いかえりを有し、天井部には低い偏平なつまみを付するものである。口径14.0cmを測る。Po19はかえりはなく、口縁端部は面をなし、天井部には偏平なつまみを付するものである。口径14.6cmを測る。

杯身(Po20)は、平坦な底部から内湾気味に口縁部へと続き、端部は丸く納めるものである。底部外縫はヘラ切り離し後未調整である。

遺物の時期については、新しい要素を持つPo19が陶邑編年MT-21に相当すると考えられ、木棺墓の造墓年代は古墳時代終末期のものと推定される。

第4項 時期不明の遺構

1. 新井三嶋谷地区SK-01 [挿図23・24]

新井三嶋谷2号墳と新井三嶋谷3号墳の鞍部に位置する。平面形は不整な隅丸方形を呈する。規模は検出面で長辺1.8m、短辺0.8m、深さ0.55mを測り、底面で長辺0.84m、短辺0.22mである。埋土は明褐色粘質土の2層(挿図24)である。①層からは拳大程度の石を1個と②層からは炭片を検出している。土坑の性格は不明であるが、墳丘墓が隣接することから土壙墓の可能性も考えられる。

2. 新井三嶋谷地区SK-02 [挿図23・25]

新井三嶋谷2号墳と新井三嶋谷3号墳の鞍部に位置し、SK-01に隣接する。平面形は不整な隅丸方形を呈する。規模は検出面で長辺0.2m、短辺0.74m、深さ0.22mを測り、底面で長辺1.15m、短辺0.32mである。土層は、にぶい黄褐色土と黄褐色粘質土の2層で、上層からは炭片を少量検出している。土坑の性格は不明であるが、形態が類似するSK-01と同様なものと推測され、土壙墓の可能性も考えられる。

3. 新井三嶋谷地区SK-03・SD-01 [挿図23・26]

新井三嶋谷2号墳東側の斜面に位置する。等高線に対して垂直に掘り込まれている。当初、一つの溝としてとらえていた(SD-01)が、土層の観察で後出する掘り込み(SK-03)があったことが分かった為、SK-03・SD-01として記載する。SK-03はSD-01を切って造られており、不定形な円形を呈すると考えられる。土坑の規模は検出面で、長さ約1.38m、深さ0.33mを測る。埋土は褐色土2層で、遺物は検出しなかった。SD-01の規模は検出面で、長辺約3.0m、短辺1.64m、深さ0.5mを測る。底面で長辺2.37m、短辺0.25mを測る。埋土は黒褐色土と褐色土の2層である。遺物は、黒褐色土中より土師器の縦片を検出したが、固化できなかった。

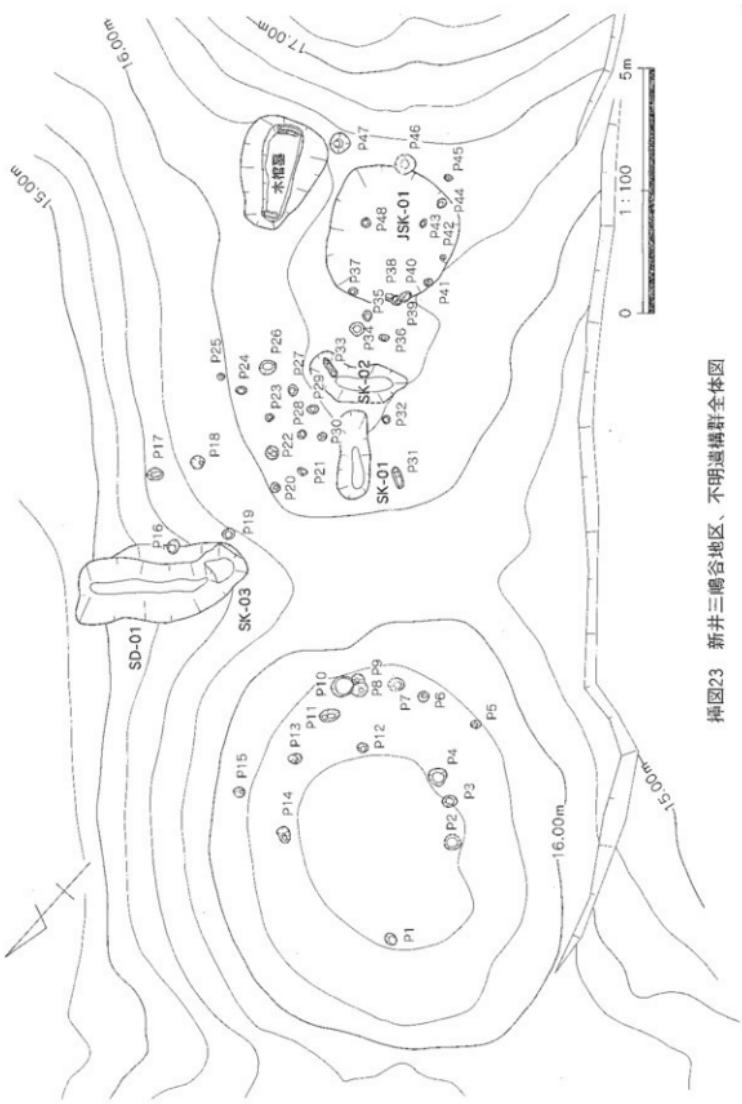
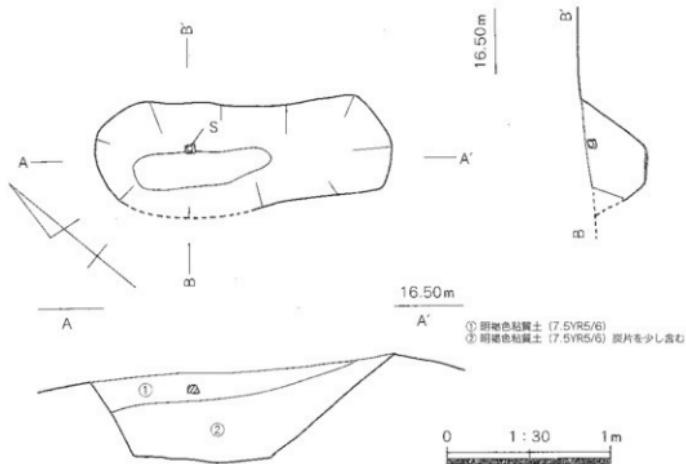
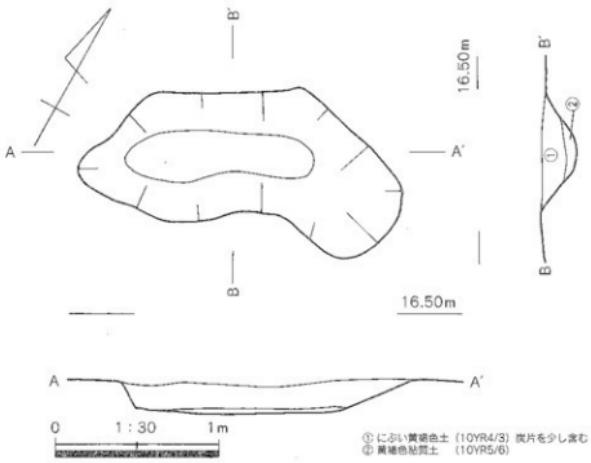


插图23 新井三鳴谷地区、不明遺構群全体図



挿図24 新井三鷗谷地区、SK-01 遺構図

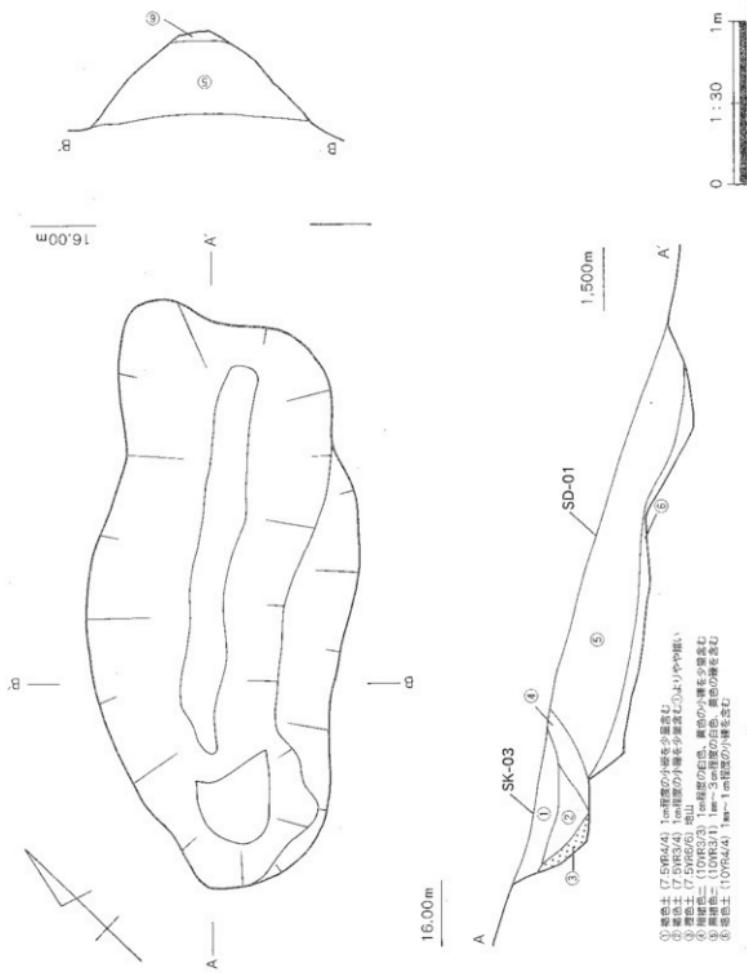


挿図25 新井三鷗谷地区、SK-02 遺構図

遺構の性格は SK-03・SD-01 ともに不明である。

4. 新井三鷗谷地区ピット群 [挿図23、挿表1]

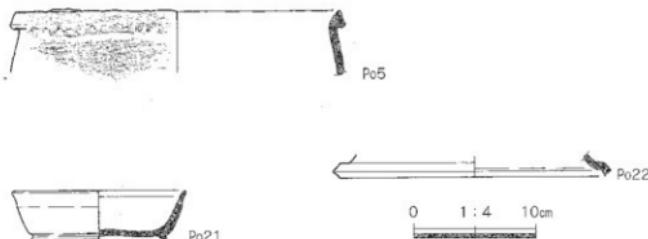
多数のピットを検出した。これらは主に、新井三鷗谷3号墳の北側平坦部の表土と新井三鷗谷



插図26 新井三鶴谷地区、SK-03・SD-01遺構図

2号墳の墳丘盛土を除去した段階で検出されたものである。ピットの検出状況を見る限り、新井三嶋谷2号墳の周溝と考えられる位置からは検出されていない。このことを考慮するとピット群の形成された時期は、新井三嶋谷2号墳の築造よりも先行するものと考えられるが、明確な時期は不明である。

それぞれのピットの規模等はピット一覧表に記載する。



挿図27 新井三嶋谷地区、遺構外出土遺物実測図

挿表1. 新井三嶋谷地区、ピット一覧表（計測値の単位はcm）

ピット名	地区名	長 径 (cm)	短 径 (cm)	深 さ (cm)	土 色 名
P 1	2号墳下層	25.0	24.0	12.3	暗褐色土
P 2	2号墳下層	32.0	14.0	20.0	暗褐色土
P 3	2号墳下層	30.0	27.0	10.0	暗褐色土
P 4	2号墳下層	38.0	37.0	1.0	暗褐色土
P 5	2号墳下層	20.0	15.0	9.0	暗褐色土
P 6	2号墳下層	23.0	22.0	24.0	暗褐色土
P 7	2号墳下層	27以上	27.0	6.0	暗褐色土
P 8	2号墳下層	35.0	28.0	16.0	暗褐色土
P 9	2号墳下層	25以上	22以上	23.0	暗褐色土
P 10	2号墳下層	45以上	37.0	8.0	暗褐色土
P 11	2号墳下層	21.0	22.0	18.0	暗褐色土
P 12	2号墳下層	27.0	21.0	15.0	暗褐色土
P 13	2号墳下層	34.0	20.0	22.0	暗褐色土
P 14	2号墳下層	24.0	24.0	17.0	暗褐色土
P 15	2号墳下層	29.0	20.0	13.0	暗褐色土
P 16	2号墳南	34.0	24.0	10.0	暗褐色土
P 17	2号墳南	27.0	27.0	20.0	黑褐色土
P 18	2号墳南	25.0	26.0	12.0	黑褐色土
P 19	2号墳南	20.0	24.0	16.0	暗褐色土
P 20	2号墳南	21.0	18.0	11.0	黑褐色土

P21	2号墳南	27.0	15.0	22.0	
P22	2号墳南	18.0	25.0	15.0	黒褐色土
P23	2号墳南	22.0	16.0	8.0	黒褐色土
P24	2号墳南	16.0	18.0	7.0	暗褐色土
P25	2号墳南	36.0	14.0	15.0	暗褐色土
P26	2号墳南	23.0	27.0	8.0	黒褐色土
P27	2号墳南	17.0	18.0	6.0	
P28	2号墳南	23.0	17.0	24.0	
P29	2号墳南	18.0	20.0	7.0	黒褐色土
P30	2号墳南		18.0	9.0	暗褐色土
P31	2号墳南	46.0	18.0	18.0	
P32	2号墳南	17.0	16.0	16.0	
P33	2号墳南	42.0	11.0	25.0	
P34	2号墳南	27.0	27.0	4.0	暗褐色土
P35	2号墳南	20.0	18.0	25.0	
P36	2号墳南	18.0	14.0	6.0	
P37	2号墳南	17.0	16.0	12.0	褐色土
P38	2号墳南	15.0	14.0	11.3	
P39	2号墳南	20.0	18.0	14.0	
P40	2号墳南	24.0	18.0	7.0	
P41	2号墳南	19.0	15.0	10.0	
P42	2号墳南	11.0	10.0	10.0	暗褐色土
P43	2号墳南	20.0	11.0	10.0	橙色土
P44	2号墳南	20.0	18.0	13.0	橙色土
P45	2号墳南	14.0	13.0	9.0	黄褐色土
P46	2号墳南	23以上	40.0	14.0	
P47	2号墳南	43.0	43.0	29.0	
P48	2号墳南	19.0	19.0	10.0	褐色土、しまる

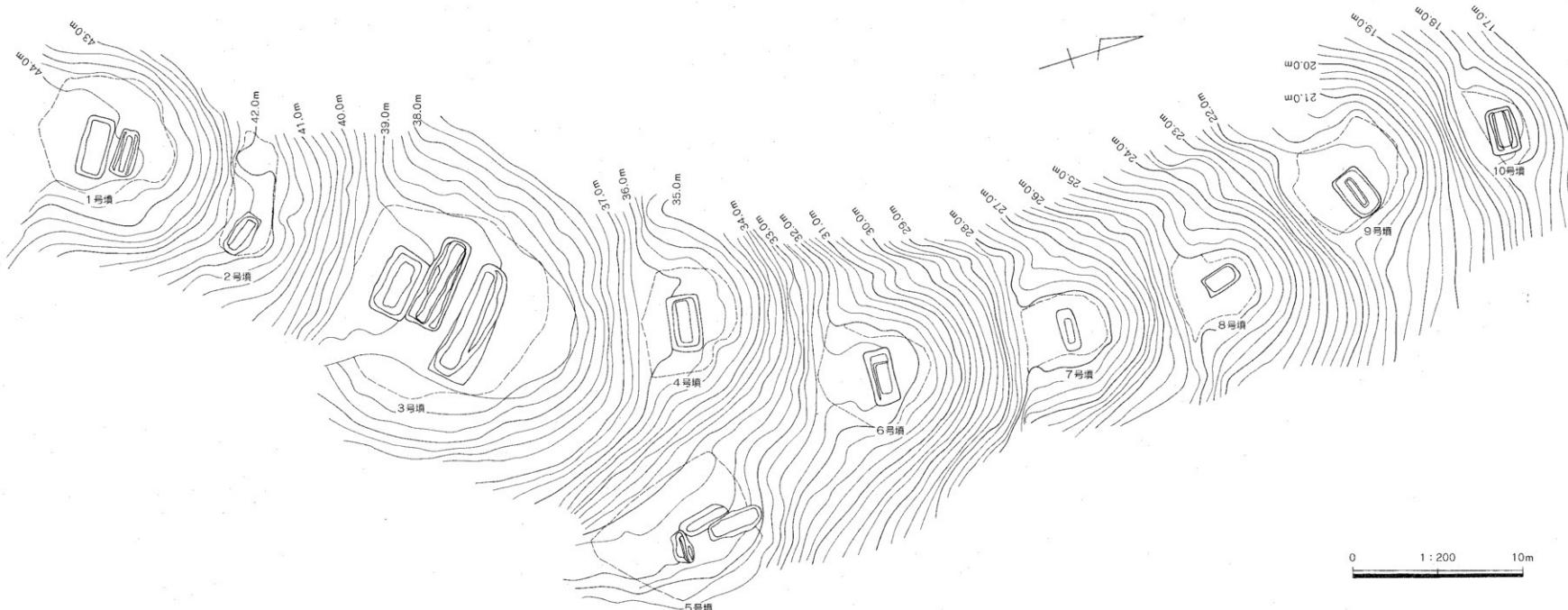
第5項 新井三鷲谷地区遺構外出土遺物 [挿図27、挿表8、図版40]

新井三鷲谷2号墳丘墓第1主体埋土中より縄文土器(Po5)を検出した。縄文時代晚期の突帶文土器と考えられる。

新井三鷲谷2号墳表上中より須恵器の脚部片(Po21)を検出した。復口径21.2cmを測る。内外面ヨコナデ調整する。

新井三鷲谷3号墳の南側より須恵器の高台付杯身(Po22)を検出した。復口径14.3cmを測る。比較的低めの高台を付す。杯部は外傾し、端部は先細り丸く納める。内外面ヨコナデ調整する。

8世紀代の遺物と考えられる。新井三鷲谷3号墳の南側に隣接した丘陵上の小ピークからの転落遺物と思われる。



挿図28 新井南谷地区、遺構全体図

第2節 新井南谷地区の調査

第1項 古墳時代の遺構

1. 新井南谷1号墳 [挿図3・4・28、図版14・15・41]

1) 位置と現状

新井南谷地区の最南端に位置し、調査区内最高所に立地する。墳丘の北側斜面中段に南谷2号墳が隣接する。南側は丘陵尾根が急傾斜で続く。墳丘の頂部は平坦面を成し、後世に城砦として再利用されていたものと考えられる。

2) 墳丘 [挿図32、図版16]

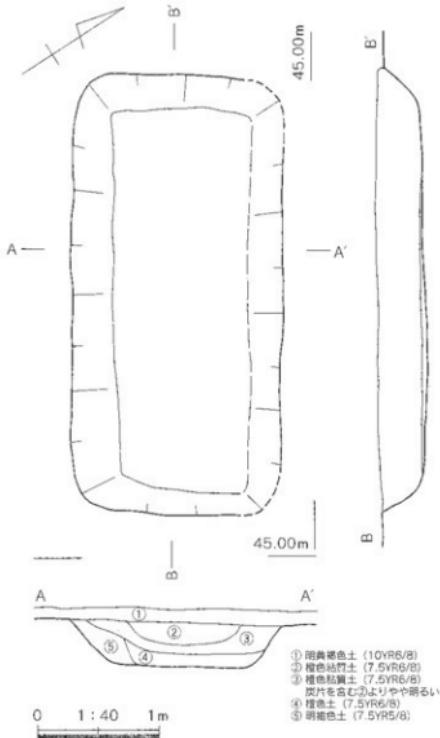
地山整形

本墳は標高42.5m~44.5mに立地している。墳丘の南側には、周溝を造っていたものと考えられるが、未検出である。墳丘北側の標高43.0m付近に傾斜変換点が認められる事から、墳丘基底面を示すものと思われる。墳丘南側に於いて、丘陵を開削する地山整形が成されたものと考えられる。

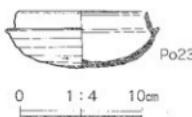
墳丘

墳丘の墳頂部は、後世の開削を受けていたため墳丘盛土の上部を失っていることが知られた。この開削は、墳頂部全面に行われているためほぼ水平な平坦面を成している。

本墳は、旧表土面より盛土が施されていた。墳丘盛土は、周溝掘削時に生じた地山土を主として盛り上げ構築したものと推定される。このため、層序の確認には不明瞭さを伴うが、その築造過程は基本的に2段階に行われたものと考えられる。第1段階は、墓壙掘り下げに関わる面まで行う。第2段階は、埋葬行為が終了した後、再度盛



挿図29 新井南谷1号墳、第1主体遺構図



挿図30 新井南谷1号墳、第1主体出土遺物実測図

土を施して墳丘の体裁を整えたと考えられる。

墳丘裾部ラインは円形を成し、長径15m、短径11mを測り、墳丘の高さは約2mである。墳頂部の標高は44.5mである。

3) 墓葬施設 [挿図29・31、図版16]

墳頂平坦部に於いて2基の墓葬施設を検出した。内部主体は木棺墓と考えられ、その占有する位置から北側のものを第1主体、南側を第2主体とした。これらの木棺墓は盛土面より掘り込まれて造られており、墓壙掘り形は隅丸長方形を成す。

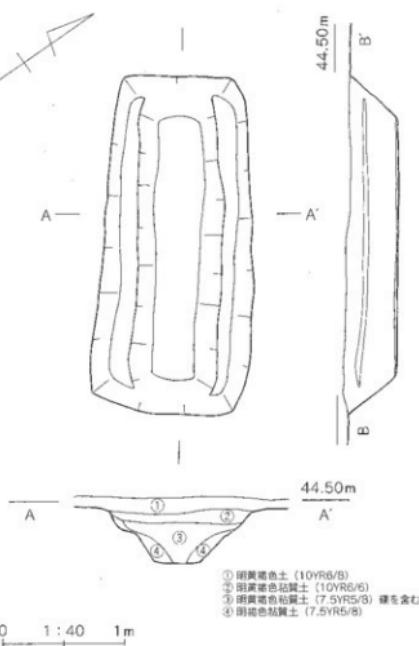
第1主体 墳頂部中央に位置する墓葬施設である。墓壙掘り形は、長辺3.62m、短辺1.73m、深さ0.36mを測り、その主軸方位はN-59°-Wである。この墓壙の北側に偏って木棺が埋置されたものと考えられる。墓壙埋土上層には、木棺腐朽に伴う陥没を示す状況が見られ、墓壙底部に於いても側板の裏込め土が確認できた。それによると、木棺の幅は約0.9mを測る。長辺は確認できていない。頭位は不明である。

第2主体 墳頂部北側に位置する墓葬施設である。墓壙掘り形は、長辺2.76m、短辺1.32m、深さ0.44mを測り、その主軸方位はN-57°-Wである。この墓壙の中央に、内法長2.15m、幅0.34mを測る組み合わせ式木棺を埋置していた。墓壙底の北側が若干広がることから、頭位を北西に向けたものと考えられる。墓壙内には、木棺の両側にテラス状の平坦部が造られている。北側のテラスは幅0.1~1.6m、南側で幅0.15m前後を測る。墓壙底部には、所謂小口板を設置するための溝は検出されなかった。

4) 出土遺物 [挿図30、挿表9、

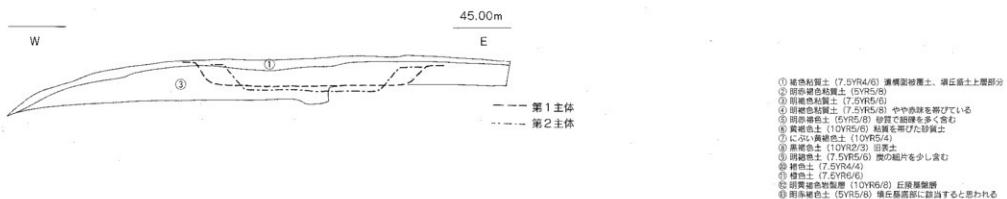
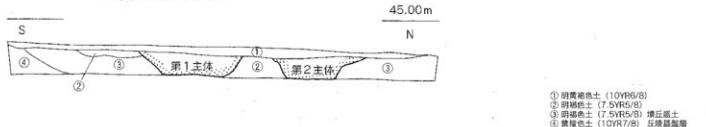
図版41]

第1主体南北トレンチ内より、須恵器、杯身(Po23)を検出した。比較的高い立ち上がりはやや内傾し、端部は段をもつ。底部は丸い。外面は1/3以下は右方向のヘラケズリ、他はヨコナデ調整する。口径は10.3cmを測る。

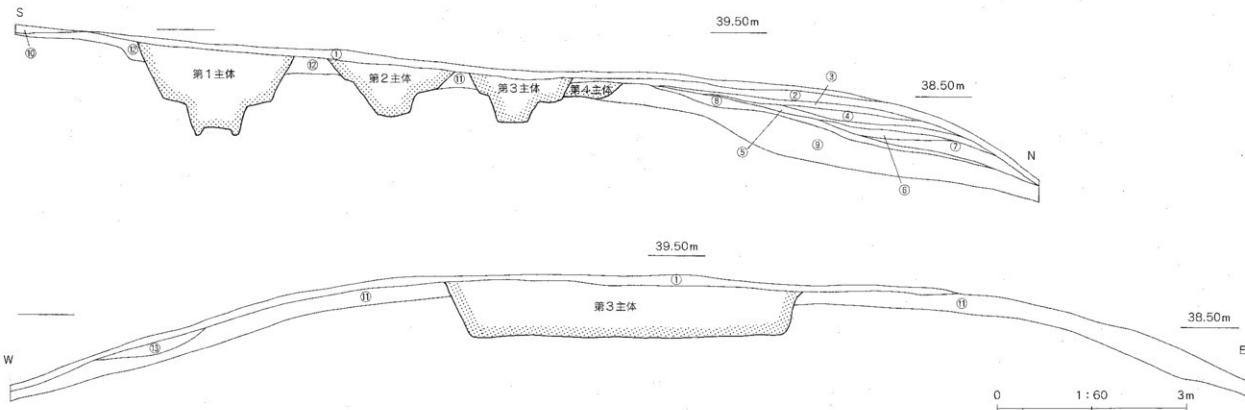


挿図31 新井南谷1号墳、第2主体遺構図

1号墳、墳丘断面図



3号墳、墳丘断面図



挿図32 新井南谷1・3号墳、墳丘断面図

2. 新井南谷2号墳 [挿図28・33~35、図版17・18・41]

1) 位置と現状

新井南谷2号墳は北へのびる尾根上にあって、新井南谷1号墳の墳丘北側中段に位置する。墳頂部の標高は42.25mを測る。

2) 墳丘 [挿図34、図版17・18]

地山地形

新井南谷1号墳から続く墳丘斜面をカットしてテラス状の平坦部を形成し、墓域を確保するものである。表土を除去した段階すでに石棺と見られる石材が露頭しており、本来の盛土がどの程度あったかは判然としないが、盛土は削平を受けているものと思われる。残存する盛土は、明黄褐色および橙色の粘質土を使用して、墳丘を整えていた。

墳丘

墳丘は方形あるいは半円形を呈するものと思われる。その規模は、東西約11m、南北約9m、高さは新井南谷3号墳との比高差より約3mを測る。

3) 埋葬施設 [挿図34・35、図版17・18]

第1主体 埋葬施設は墳頂平坦面の東側隅で箱式石棺を検出した。主軸は、N-33°-Wを取り、尾根の主軸線に対して斜交するものである。赤褐色～黄褐色を呈する地山を0.3～0.5m程度掘り込み2段掘りの墓壙掘り形を形成している（挿図33）。1段目の上縁部は長さ2.6m、幅1.25mを測る。2段目の掘り形は長さ2.13m、幅0.72m、深さ0.5mを測り、この中に箱式石棺が納められていた。石棺の石材は流紋岩の板石を用いている。石棺の内法は長さ1.65m、幅0.3m、高さ0.5mを測る。石棺の組み立て順序は、先ず北側の小口石を立て、これを挟み込む形で両側石を配置し、最後に南側の小口石を組んだものと考えられる。側石の隙間には、小石や黄褐色粘質土を詰めて固定している。墓壙と石棺の隙間は、黄褐色粘質土および明黄褐色粘土で裏込めされている。蓋石は板石を4枚並べ、明黄褐色粘土で目張りしながら、さらに板石と板石の間の隙間を塞ぐように上部に3枚の板石を、さらに小振りの板石を3枚重ねている。

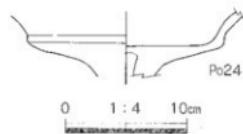
棺内には、少量の泥状の土がたまっており、雨水が流入したことが推定される。頭位と考えられる南側には板石をV字状に組み、その間に土器枕として、高杯の杯部（挿図34、Po24）が置かれていた。副葬品、人骨等は遺存していないかった。

4) 出土遺物 [挿図33、挿表10、図版41]

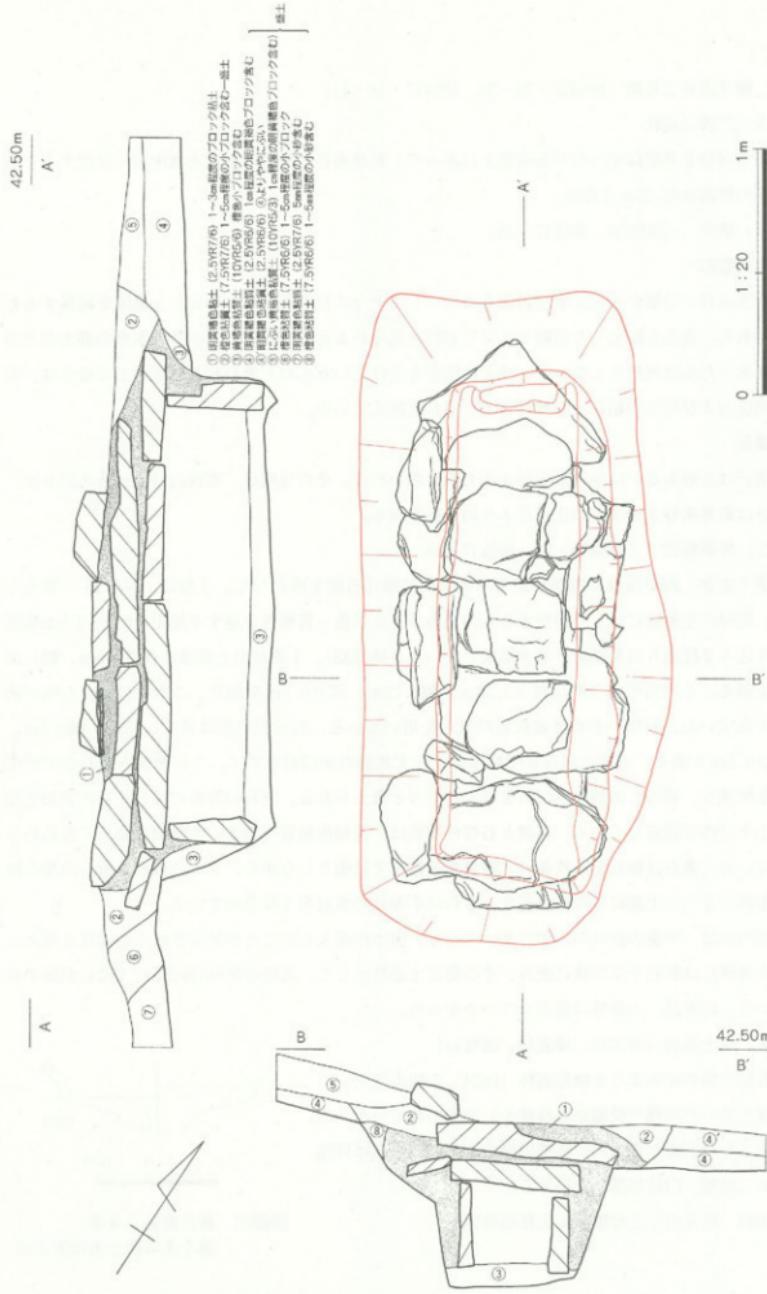
石棺北側の床面より土師器高杯（Po24）を検出した。

脚を欠いた状態で受部が土器枕として置かれていた。内外面ともに剥離が著しい。杯部は段をなし、口縁部は外傾する。脚部、口縁端部は欠損する。

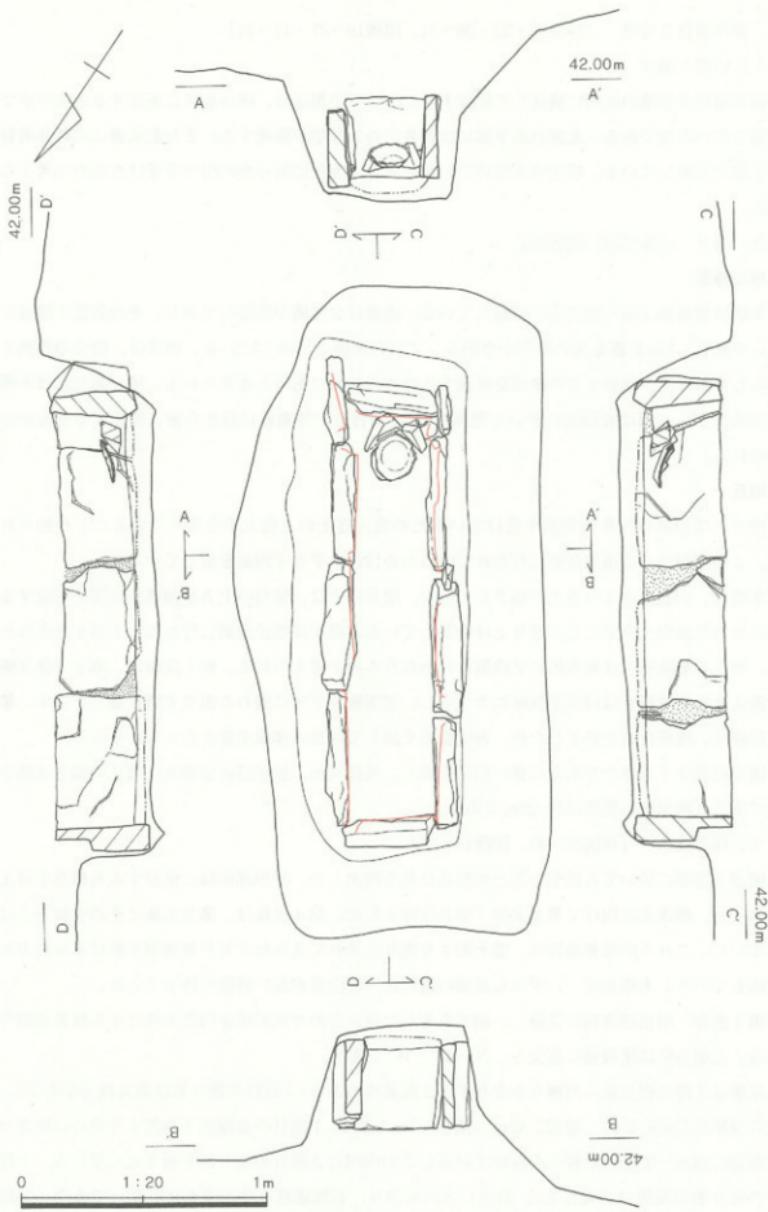
挿図34 新井南谷2号墳第1主体遺構図



挿図33 新井南谷2号墳、
第1主体出土遺物実測図



挿図34 新井南谷2号墳、第1主体造構図



插図35 新井南谷2号墳、第1主体遺物出土状況図

3. 新井南谷3号墳 [挿図28・32・36~51、図版19~27・41~44]

1) 位置と現状

新井南谷2号墳の北側に隣接して位置する。本墳の平坦部は、南谷地区に所在する古墳の中では最も広い占地である。北側斜面下部には新井南谷4号墳が隣接する。また北東側には新井南谷5号墳が立地している。墳丘の頂部は平坦面を成し、後世に何らかの削平を受けたものと考えられる。

2) 墳丘 [挿図32、図版19]

地山整形

本墳は標高36.2m~39.5mに立地している。南側は2号墳が隣接しており、その斜面下端部に於いて幅約1.5mを測る浅い緩やかな凹レンズ状の周溝を形成している。周溝は、墳丘の周囲を巡らしておらず、尾根上での墓域を区画するための措置であると考えられる。墳丘基底部は不明瞭であるが、北側墳丘斜面に於いて標高約37.25m付近で等高線に粗から密に変化する部分が認められる。

墳丘

墳丘の墳頂部は後世の開削を受けているため墳丘盛土の上部大半を失っていることが知られた。この開削は、墳頂部全面に行われているためほぼ水平な平坦面を成している。

本墳は、旧表土面より盛土が施されていた。墳丘盛土は、尾根の上方を開削し周溝を形成する際に生じた地山土を主として盛り上げ構築している。盛土は墳丘全面に行われたものと考えられる。墳丘の築造過程は基本的に2段階に行われたものと考えられる。第1段階は、第3主体北側付近より丘陵尾根をほぼ水平気味にカットし、墓擴掘り下げに開わる面まで墳丘盛土を施す。第2段階は、埋葬行為が終了した後、再度盛土を施して墳丘の体裁を整えたと考えられる。

墳丘裾部ラインはやや南北に長い円形を成し、長径21m、短径17mを測り、墳丘の高さは約2mである。墳頂部の標高は39.25mである。

3) 埋葬施設 [挿図34~45、図版19~27]

墳頂平坦部に於いて右石棺墓1基と木棺墓3基を検出した。平坦部南側に位置する石棺墓を第1主体とし、順次北に向けて第2主体・第3主体とした。第4主体は、第3主体とその主軸を一にしていた。これらの埋葬施設は、盛土面より掘り込まれて造られており墓壙掘り形は隅丸長方形を成している。木棺墓は、いずれも墓壙の幅に比べて全長が長い特徴を持っていた。

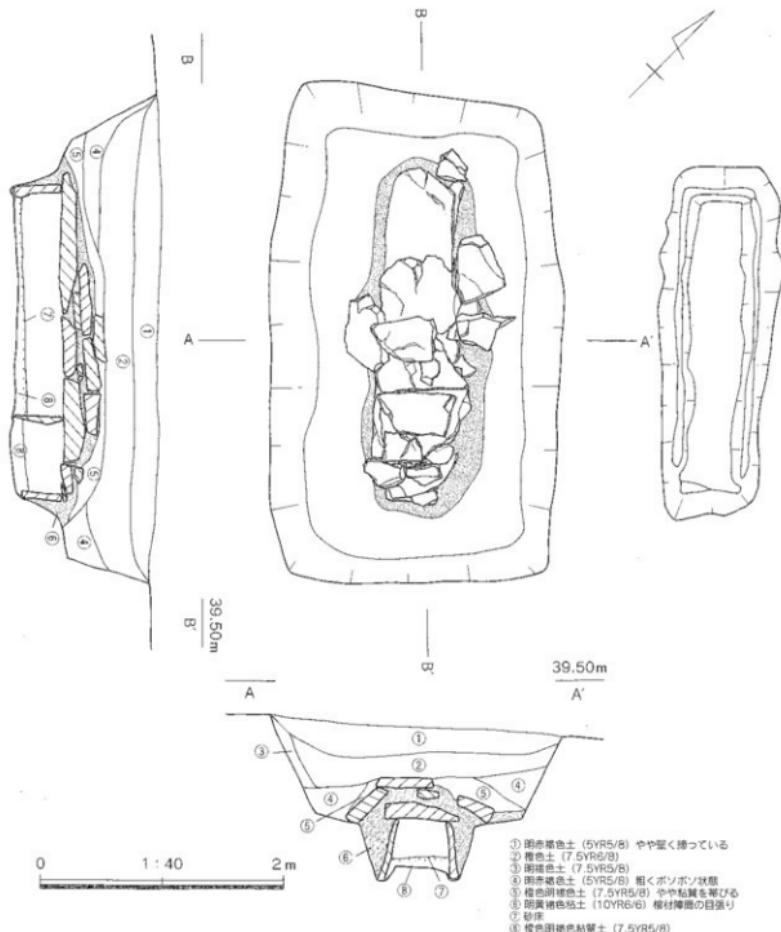
第1主体 墳頂部南側に位置し、副室を有した組み合わせ式石棺を内部主体とする埋葬施設である。主軸方位は尾根筋に直交し、N-46°-Wを指す。

墓壙は2段に掘り込んだ掘り形を有する2段墓壙である。1段目の掘り形は隅丸長方形を呈し、その規模は長辺4.13m、短辺2.42m、深さ0.7mを測る。1段目の墓壙底端部より中心に向かつて幅約0.24m~0.35mの控えを設けている。この内側に2段目の掘り形を掘り込んでいる。2段目の掘り形の規模は長辺2.9m、短辺1.05mを測り、石棺底部までの深さは0.46mである。2段目の掘り形底部は、石棺材を据え付ける部分を掘り下げ、棺床部を掘り残している。石材底部ま

での深さは0.32~0.49mである。

この2段目の掘り形内に構築されている石棺は、内法長1.81mを測り、幅は北側小口部で0.48m、南側小口部で0.48m、棺床までの深さは0.3~0.34mである。この南側小口部の外側に内法長0.52m、幅0.43m、棺床までの深さ0.3~0.35mの副室が設けられていた。

蓋石の構築状況を見てみると、これらの蓋石はそれぞれの端部を接して植身を被覆している。



挿図36 新井南谷3号墳、第1主体遺構図

最下段の蓋石は、北側から順に長さ約1.17m×幅約0.56m×厚さ約0.15m、長さ約0.52m×幅約0.61m×厚さ約0.11m、長さ約0.7m×幅約0.8m×厚さ約0.18m、長さ約0.25m×幅約0.63m×厚さ約0.1mを測る4枚の割石を使用している。

北側の蓋石は、棺身の幅に合わせて切削加工している。2段目の蓋石は、1段目の端部を接している部分に生じた隙間を塞ぐためにそれぞれの箇所で施されている。特に北側では1枚目と2枚目の境を3枚の割石で塞いだ丁寧な作りである。この措置は、2枚目と3枚目の境でも同様である。2段目の蓋石が施されると同時に、中央部に於いて（1枚目と2枚目の境）掘り形肩部との間に割石が斜めに立て掛けられている。この斜めに立て掛けられた石材が置かれた後、3段目の蓋石が施されている。蓋石を構成している割石の継ぎ目、更に蓋石と側石・小口石との隙間に小振りな割石と共に、明黄褐色粘土を用いて目張りが施されている。

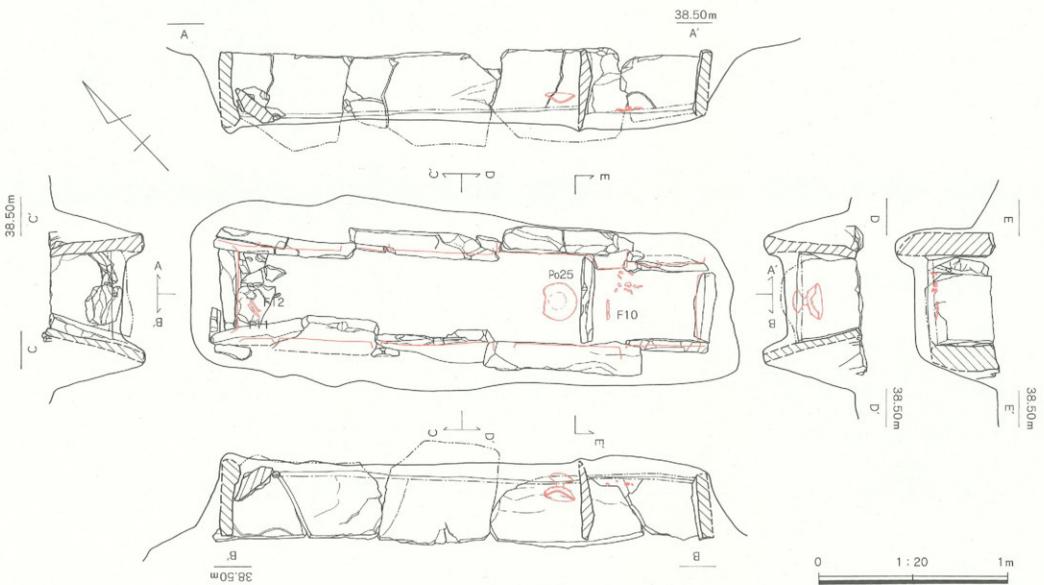
側石は北側・南側共に厚さ0.08~0.15mの割石4枚で構成されている。配置は、石材を横長に使用し、それぞれの端部を接している。側石は、接する端部の形状に合わせて切削加工した割石が用いられている。特に北側ではその措置が顕著である。副室側の石材は小振りで薄い割石が用いられているため、棺身の南側に継ぎ足したような感を与える。しかし、副室の側石は他の側石と同様、端部の形状に合わせた用いられ方が成されている為、当初より計画的に作られたものである。

北端部の小口石は、長さ0.45m×幅0.43m×厚さ0.06~0.1mの石材を、南側は長さ0.47m×幅0.42m×厚さ0.07mを用いている。副室側の小口石は長さ0.37m×幅0.35m×厚さ0.06mの石材を使用している。

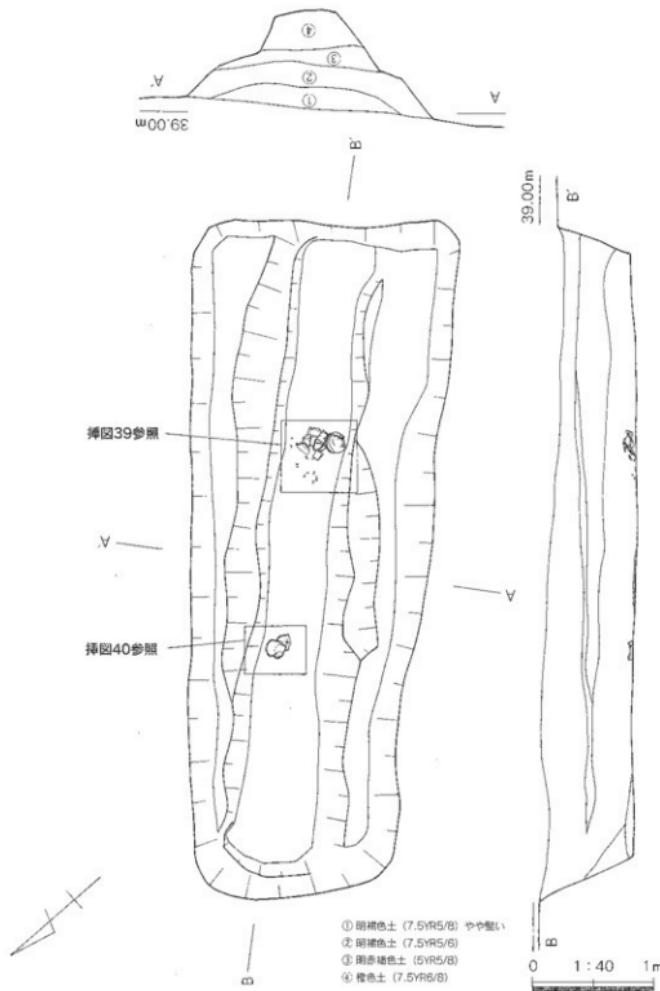
側石・小口石の配置を観察すると、副室側の小口石は比較的小振りであるが、北側と南側の石材は床面の幅を平行に保つように大きさを揃えている。また、側石の石材間の隙間を埋めるために補助的な割石を用いた箇所が一部に認められる。側石の構築は、側石端部の形状から見て副室側より据えられていったものと考えられる。東側割石の南より2枚目の石材は、その南側下部が凸状に脹らみを持たせている。この脹らみを利用して南側の小口石を据えている。

棺内は前述のとおり、2段目の掘り形を掘り込む際に掘り残したままの状態を棺床面としている。この棺床面上には、北側小口石の内面に割石を用い「V」字状の石枕を設けていた。また、南側小口石の内面には、土師器高杯を利用した土器転用枕を検出した。このことにより、棺内には2体の被葬者が向かい合わせの状態で仰臥伸展していたと考えられる。人骨は遺存していないかった。

棺内出土遺物として、石棺南側の小口部床面から土器転用枕として、土師器高杯（Po25）を検出した。北側小口部の石枕下部の床面からは刀子2口（F11・12）が並列して出土した。また南側の副室からは刀子1口（F10）と勾玉（J1~4）、管玉（J5~12）を検出している。

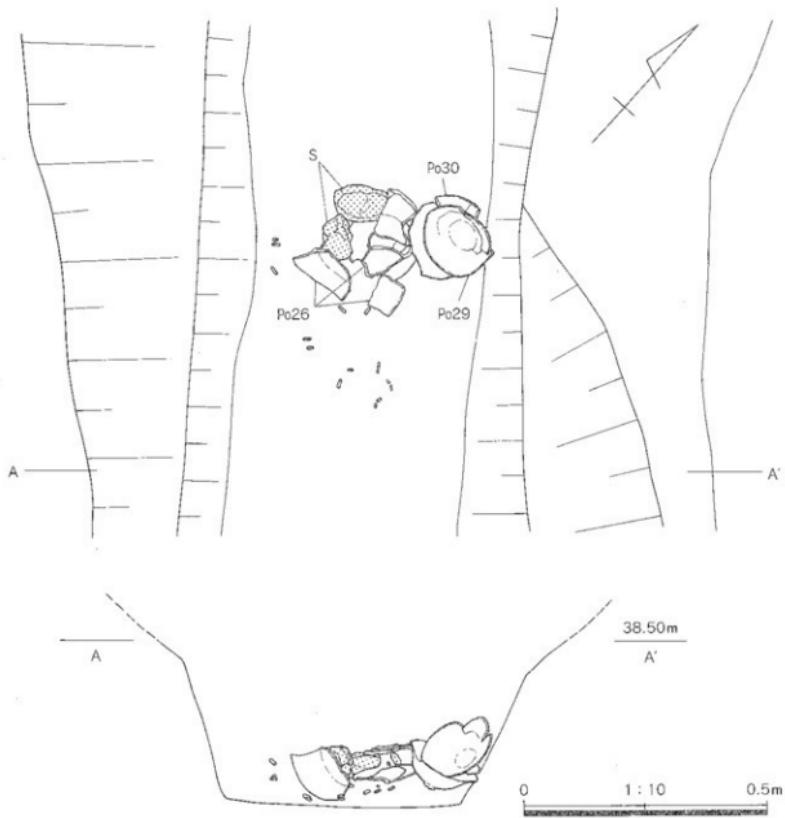


挿図37 新井南谷3号墳、第1主体遺物出土状況図



挿図38 新井南谷3号墳、第2主体遺構図

第2主体 第1主体の北側に隣接して位置する。墓壙掘り形の規模は長辺5.55m、短辺2.15m、深さ0.75mを測り、その主軸方位はN-46°-Wである。この墓壙底部の規模は、長辺5.12m、短辺0.47~0.65mを測る。墓壙内には、木棺の周囲にテラス状の平坦部が造られている。北側の

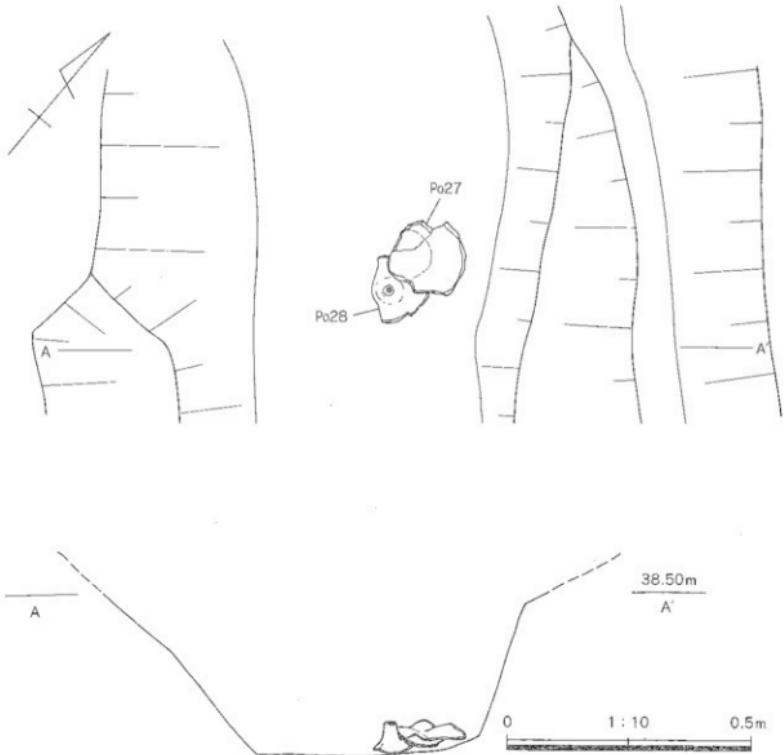


挿図39 新井南谷3号墳、第2主体遺物出土状況図（1）

テラスは幅0.06~0.5m、南側で幅0.14~0.47mを測る。墓壙底部の北端部では、墓壙壁の北側部分に小口板を嵌め込むための抉りが認められる。同様に、南端部に於いても南側の墓壙壁に抉り込みが造られている。従って、墓壙内に埋置された木棺は、長側板を小口板で挟み込んだ組み合わせ式木棺であったと考えられる。

墓壙底を3分割した中央部分の両側で、土器枕に転用された遺物の出土を見ているが、出土状況から2体の埋葬が行われていたものと考えられる。埋葬された順位は不明であるが、墓壙内埋土の堆積状況を見る限り2体同時埋葬である可能性が大である。

第2主体出土遺物として、墓壙掘り形の床面中央よりやや離れて、南側と北側で遺物を検出している。南側の遺物（挿図39）は角蝶とともに、土器枕として土師器高杯（Po26・29・30）が置

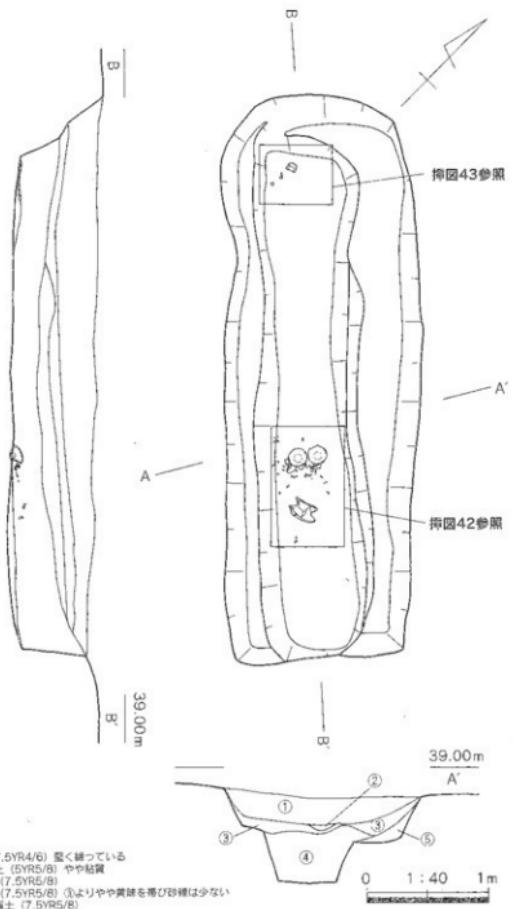


挿図40 新井南谷3号墳、第2主体遺物出土状況図（2）

かれ、死者の胸に当たる位置からは、碧玉製他の管玉（J 13~26）を検出している。Po29・30は脚部を欠損しており故意に割られ、重ねて置かれたものと思われる。

北側の遺物（挿図40）は、土師器高杯（Po27・28）を検出している。高杯の杯部と脚部で接合部を欠くものの胎土が似通っているため同一個体と考えられ、土器枕に利用されたものと思われる。

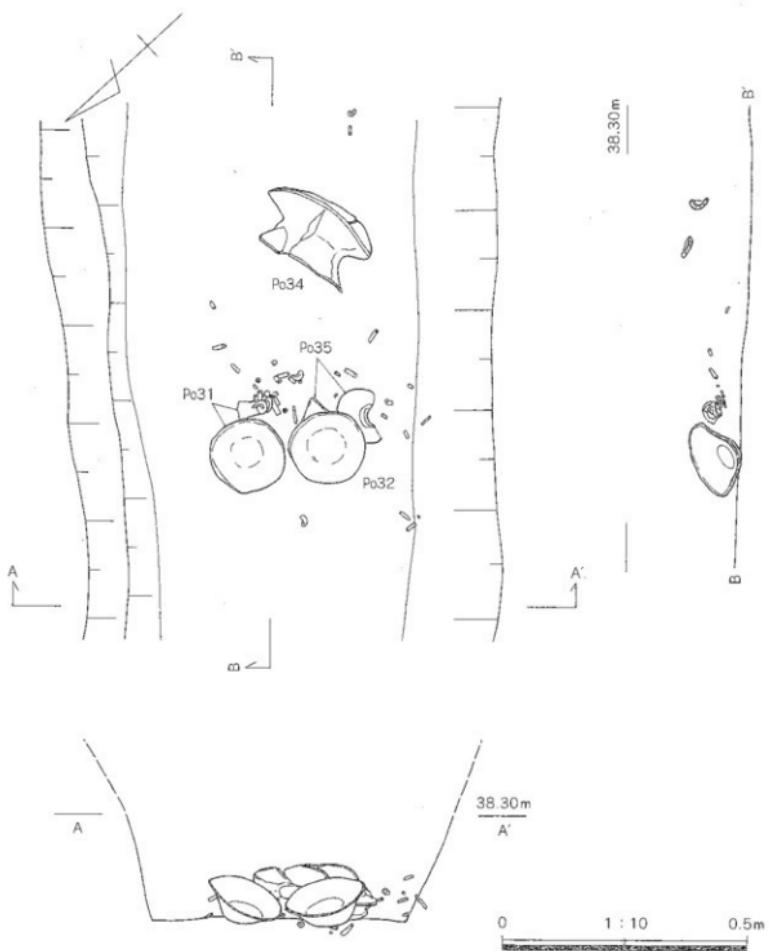
第3主体 第2主体の北側に隣接する埋葬施設である。墓壙は2段墓壙で、掘り形の規模は長辺4.65m、短辺1.6m、深さ0.7mを測り、その主軸方位はN-47°-Wである。墓壙内には、2段目の掘り形周辺部にテラス状の平坦部が造られている。東側のテラスは幅0.15~0.42m、西側で幅0.1~0.2mを測る。東側のテラス部は、一部北側の墓壙壁まで回り込んでいる。墓壙底部の規模は長辺4.07m、短辺幅0.43~0.66mを測り、北端部がやや広めに掘り込まれている。北端部



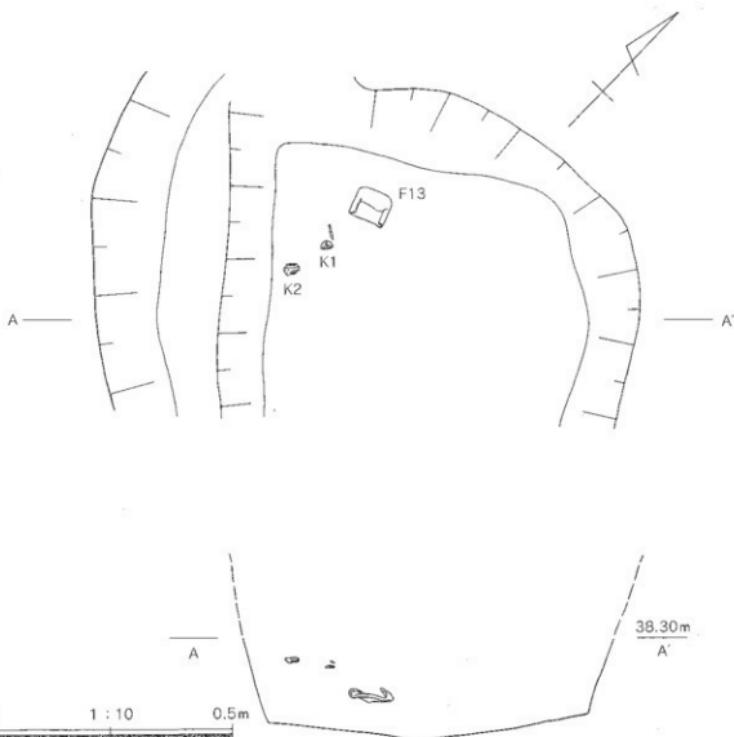
挿図41 新井南谷3号墳、第3主体遺構図

が広めに掘り込まれているのは、小口板を嵌め込むための措置と考えられる。これにより第3主体に埋置された木棺は、北側の小口板を長櫛板の端部で押さえ込む型式をとった組み合わせ式木棺であったと考えられる。墓壙底の南側に土器転用枕が出土していることから、頭位は東側にとったものと思われる。

第3主体出土遺物としては、墓壙掘り形の床面中央よりやや南側と北側小口部より遺物を検出



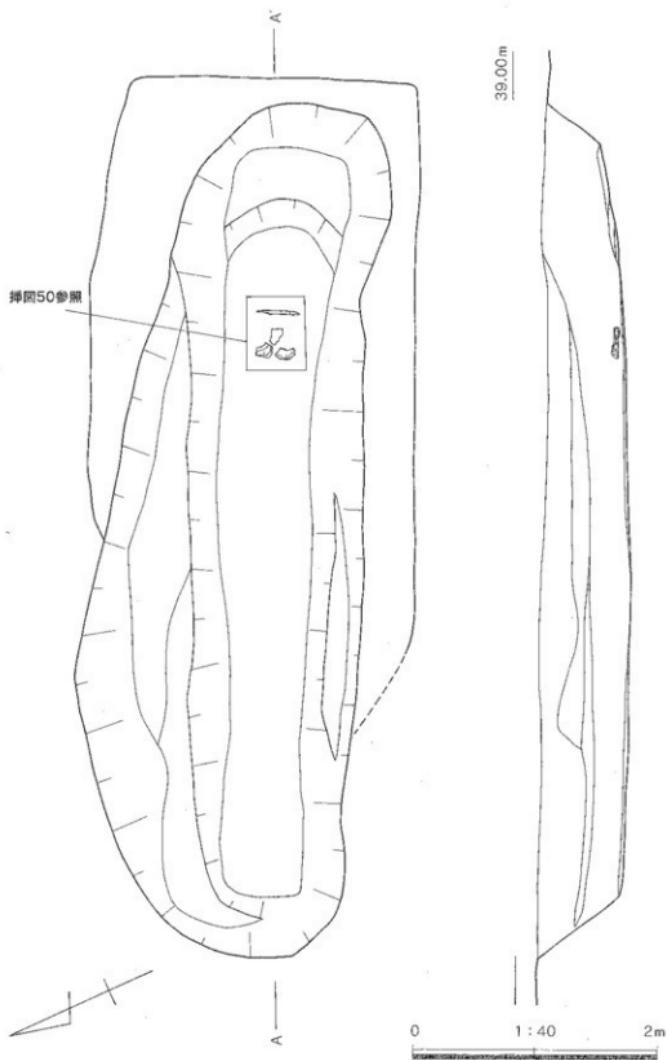
挿図42 新井南谷3号墳、第3主体遺物出土状況図（1）



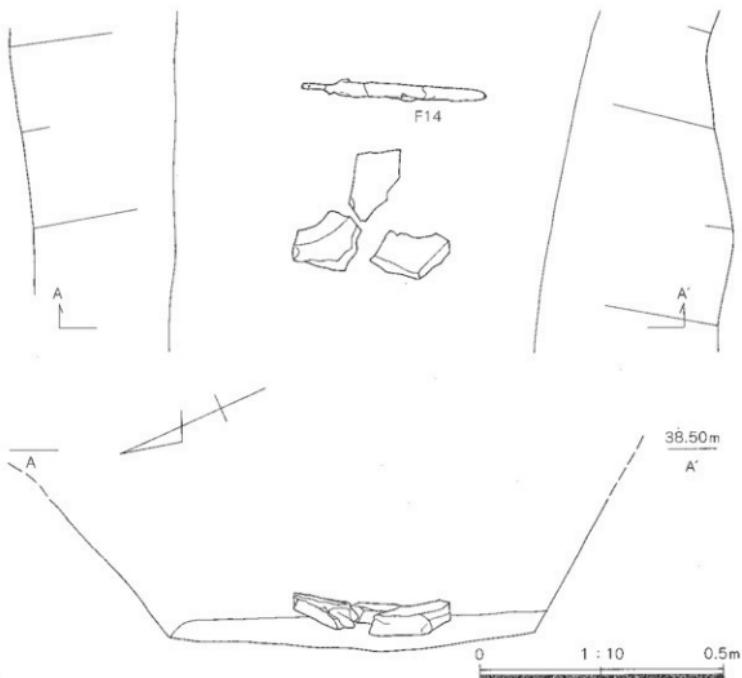
挿図43 新井南谷3号墳、第3主体遺物出土状況図（2）

している。南側の遺物（挿図42）は、土器転用枕として脚部と杯部に分割された土師器高杯（Po31～34）が置かれ、その南側を中心に玉製品（J27～65）が出土した。また、やや離れて土師器鼓型器台（Po35）が転倒した状態で検出した。北側隅の遺物（挿図43）は、堅拂（K1～3）と鉄製の鋤先（F13）が、床面よりやや浮いた状態（棺上副葬遺物）で出土している。

第4主体 第3主体の主軸に若干斜行するものの、墓壙を一にする埋葬施設である。墓壙は2段墓壙と思われるが、後出する第3主体により破壊を受けている。墓壙掘り形の規模は長辺約5.5m以上、短辺約2.65m、深さ0.6mを測り、その主軸方位はN-41°-Wである。墓壙内には、2段目の掘り形削辺部にテラス状の平坦部を設けていたものと考えられる。東側のテラスは幅約0.5m、西側で幅約0.15m以上が推定される。墓壙底部の東側小口部には、長さ0.42～0.7m×幅



挿図44 新井南谷3号墳、第4主体遺構図



挿図45 新井南谷3号墳、第4主体遺物出土状況図

0.95mのテラスを設けている。墓壇底部の遺存状況が悪いため、埋置された木棺の形式は不明である。

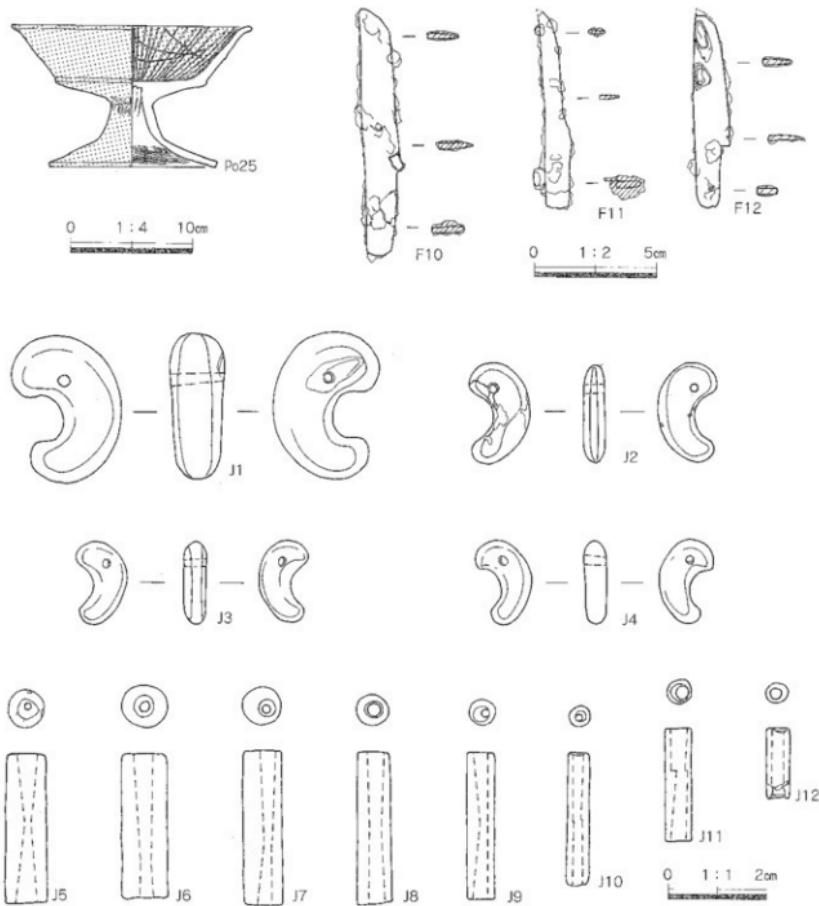
墓壇床面の南側より割石3個と、その南に於いて鐵剣1口（F14）の出土を見た。剣石は、被葬者の石枕と考えられる。鐵剣は第4主体の主軸に直交して置かれていた。

4) 出土遺物 [挿図46~51、挿表11・14・17、図版41~44]

第1主体出土遺物 [挿図46、挿表11・17、図版41]

高杯（Po25）は、有段の杯部をもつ。口縁部は大きく外反し、端部は丸く納める。脚は裾部で大きくハの字状に開く。杯部は内面と外面を赤色塗彩している。外面はヨコナデ。杯部と脚部の接合部にハケメ痕あり。内面は杯部ヨコナデ後赤色塗彩し、さらに放射状暗文を施す。裾部ハケメ、他ヨコナデする。

刀子（F10）は、全長10.0cm、茎長は3.5cmを測る。片刃でフクラ切先を呈する。F11は、全长8.2cm、茎長は2.7cmを測る。明瞭な刃はない。F12は全長7.8cm、茎長は2.5cmを測る。片刃を

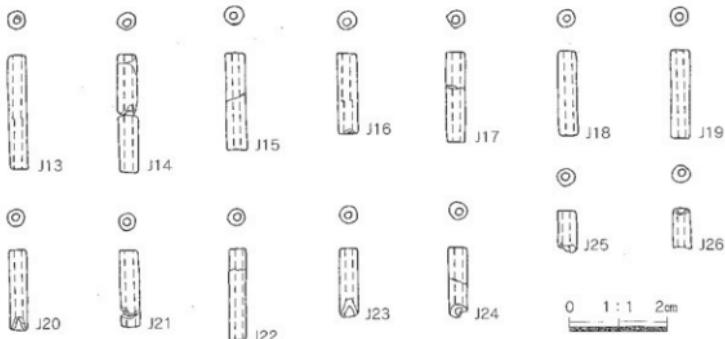
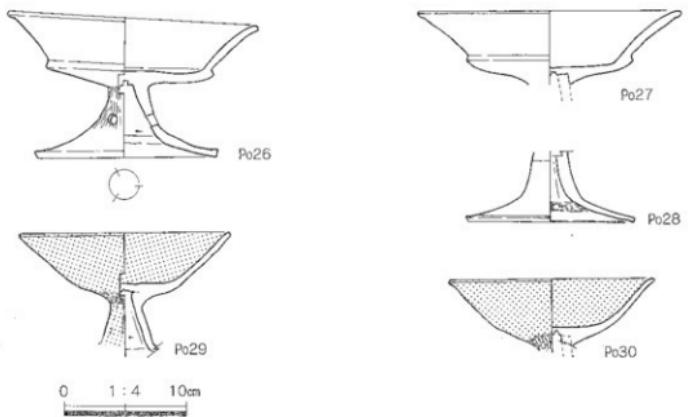


挿図46 新井南谷3号墳、第1主体出土遺物実測図

呈する。

勾玉は、水晶製（J 1）・蛇紋岩製（J 2）・滑石製（J 3）・翡翠製（J 4）のものがある。大きなもので、長さ2.96cm、小さなもので、長さ1.7cmを測る。

管玉は、碧玉製（J 5～9・11）・滑石製（J 10）・珪質緑色凝灰岩製（J 12）があり、長さ1.43～3.17cm、幅は、0.94～0.47cmを測る。

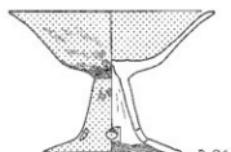


挿図47 新井南谷3号墳、第2主体出土遺物実測図

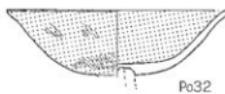
第2主体出土遺物 [挿図47、挿表11・17、図版42]

高杯は有段の杯部をもつもの (Po26・27) と無段の杯部をもつもの (Po29・30) とがあり、有段のものは口縁部が外反し、端部は面を成すものと丸く納めるものがある。脚は裾部で大きくハの字形に開く。Po26の脚柱部には3ヶ所円形の穿孔がある。無段のものは、杯部が外傾し口縁端部で面をもつものと、内湾気味に立ち上がり口縁端部でやや外反するものがあり、脚部はともに欠損する。これらは赤色塗彩されている。

管玉 (J13~26) は、碧玉製で淡水色を呈し軟質である。長さ2.42~1.39cm、幅0.4~0.36cmを測り、両面穿孔される。



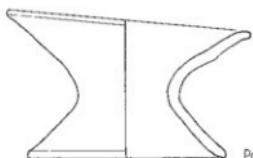
Po31



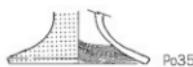
Po32



Po33

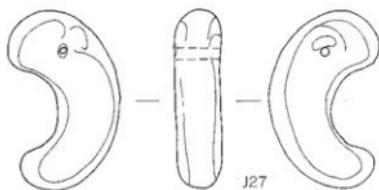


Po34



Po35

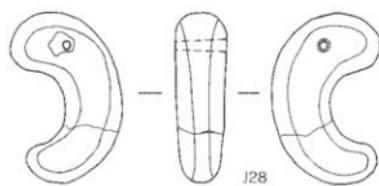
0 1 : 4 10cm



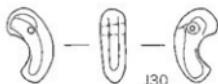
J27



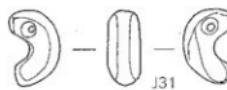
J29



J28



J30



J31



J32



J33



J34



J35



J36



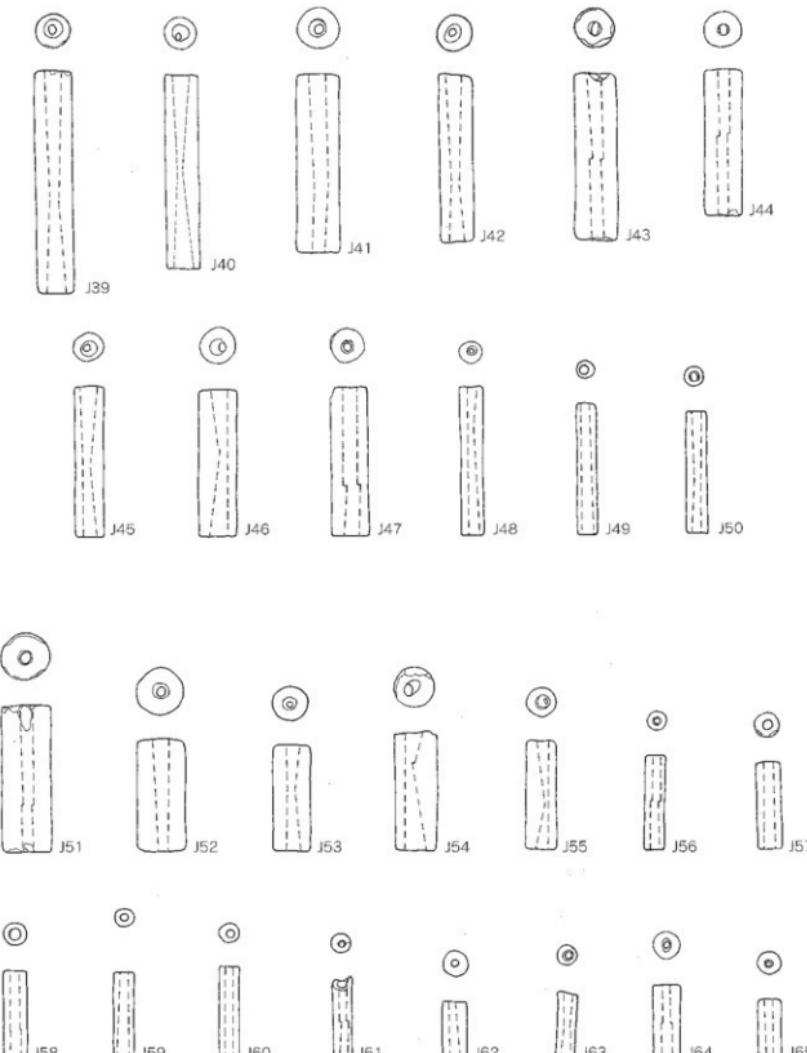
J37



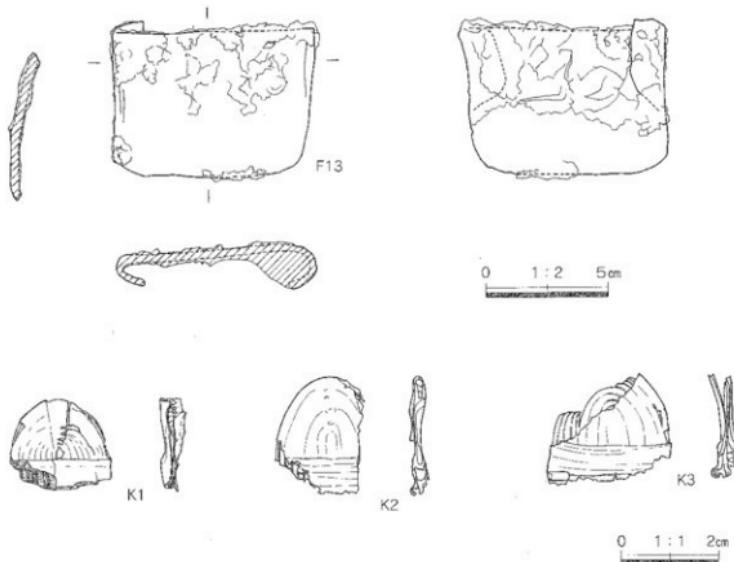
J38

0 1 : 1 2cm

挿図48 新井南谷3号墳、第3主体出土遺物実測図（1）



挿図49 新井南谷3号墳、第3主体出土遺物実測図(2)



挿図50 新井南谷3号墳、第3主体出土遺物実測図（3）

第3主体出土遺物 [挿図48~50、挿表11・14・17、図版43・44]

高杯受部（Po31・32）は、やや外反気味に立ち上がる。脚（Po33・34）は、裾部でハの字形に開くものである。Po31は脚部に不規則な間隔で円形透かしをいれる。

器台（Po35）は、受部と脚部に明瞭な段をもたない鼓型器台で、所謂開地谷型器台と呼ばれるものである。口縁端部、脚端部には弱い面をもつ。

玉製品は、蛇紋岩・水晶・翡翠製の勾玉（J 27~31）とガラス小玉（J 32~38）、そして碧玉・緑色凝灰岩製の管玉（J 39~65）がある。勾玉は、長さ1.52cmの小型のものから、長さ3.62cmの大型のものがある。ガラス小玉は、濃紺色、淡青色を呈し、濃紺色のものはやや大振りである。管玉は、長さ4.55~1.16cm、幅は1.02~0.39を測り、大きさにばらつきがみられる。

鋒先（F 13）は、最大長6.0cm、最大幅8.0cm、最大厚0.3cmを測る。刃部はほぼ直線的で、装着部は折り返しがある。

堅櫛（K 1~3）は、所謂「結歯式」のものである。結縛部漆膜のみの残存で歯部は欠損している。結縛部の幅が2cm前後の小型品と考えられ、歯は、18~24本前後あったと推定される。K 1は、K 2・3に比してやや小型で薄茶色を呈する。K 2・3は黒色を呈する。

第4 主体出土遺物 [挿図51、挿表14、図版44]

鉄劍（F14）を墓壙床面の南側で検出している。（挿図33）

全長43.4cm、身長33.5cm、茎長9.9cmを測る。目釘穴が2カ所あるが貫通しない。

4. 新井南谷4号墳 [挿図28・52~54、図版28]

1) 位置と現状

新井南谷3号墳の北側に位置する。本墳の北側には新井南谷6号墳が所在し、東側には新井南谷5号墳が立地している。墳丘の頂部は平坦面を成し、後世に何らかの削平を受けたものと考えられる。

2) 墳丘 [挿図54、図版28]

地山整形

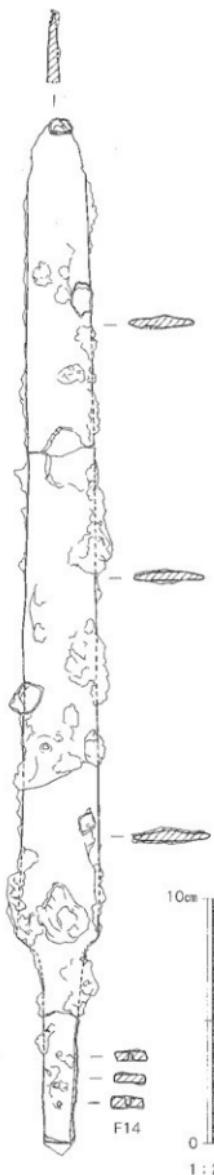
本墳は、標高33.5m~36.0mに立地している。北側は急傾斜の斜面を成し、斜面下部に新井南谷6号墳が立地している。南側は幅約1.5mを測る浅い凹レンズ状の周溝を成す。周溝は墳丘の周囲を巡らさず馬蹄形状を成し、丘陵の尾根上を区画するための措置であると考えられる。墳丘斜面の標高34.0m付近に傾斜変換点が認められることから、墳丘基底部を成すと考えられる。墳丘築造は、墳丘南側の丘陵を開削する際に生じた地山土を盛り上げて構築したものと考えられる。墳丘の東西部分で周溝を造り出すため、部分的な削平を行う地山整形が成されている。

墳丘

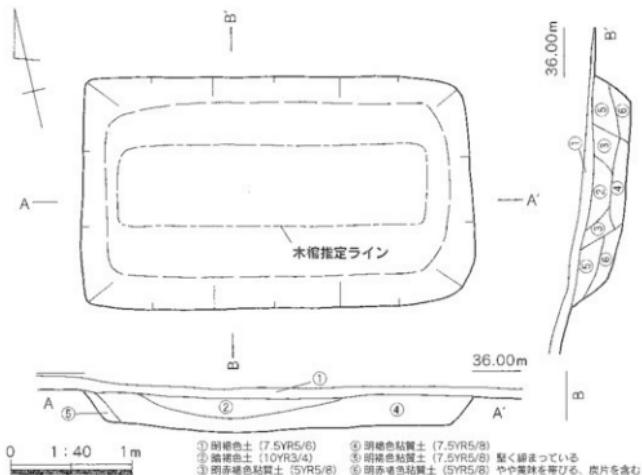
墳丘の墳頂部は、後世の開削を受けているため墳丘盛土の大半を失っていることが知られた。この開削は、墳頂部全面に行われているためほぼ水平な平坦面を成している。

本墳は、旧表土面より盛土が施されていた。墳丘盛土は、周溝掘削時に生じた地山土を主として盛り上げ構築している。このため、層序の確認には不明瞭さを伴うが、その築造過程は基本的に2段階に行われたものと考えられる。第1段階は、墓壙掘り下げに関わる面まで行う。第2段階は、埋葬行為が終了した後、再度盛土を施して墳丘の体裁を整えたと考えられる。

墳丘裾部ラインはやや東西に長い円形を成し、長径13m、短径9mを測り、墳丘の高さは約2mである。墳頂平坦部の標高は36.0mである。



挿図51 新井南谷3号墳、第4
主体出土鉄劍実測図



挿図52 新井南谷 4号墳、第1主体遺構図

3) 埋葬施設 [挿図52、図版28]

墳頂平坦部のほぼ中央部に於いて1基の木棺墓を検出した。木棺墓は、盛土面より掘り込まれて造られたものと考えられ隅丸長方形の幕壙掘り形を成す。

第1主体 墓頂部中央に位置する埋葬施設である。墓壙掘り形の規模は、長辺3.23m、短辺1.9m、深さ0.27mを測り、その主軸方位はN-80°-Wである。この墓壙の中央に、推定内法長2.5m、幅0.65mを測る組み合わせ式木棺を埋置していた。

埋置された木棺の長側板の外側には、側板を安定化させるための裏込め土が施されていた。

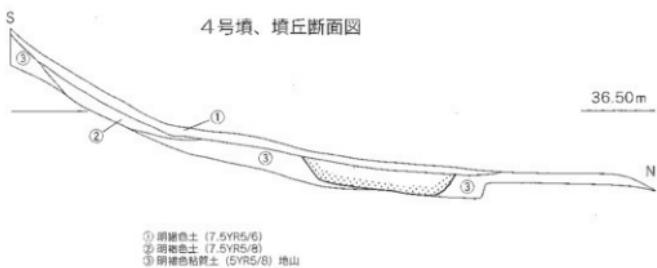
4) 出土遺物 [挿図53、挿表12、図版45]

須恵器の杯蓋 (Po36) を検出している。天井部はほぼ平坦で、天井部と口縁部の境に稜をもつものである。口縁端部に弱い段をもつ。外面天井部は1/2以上右方向のヘラケズリを施し、他はヨコナデする。

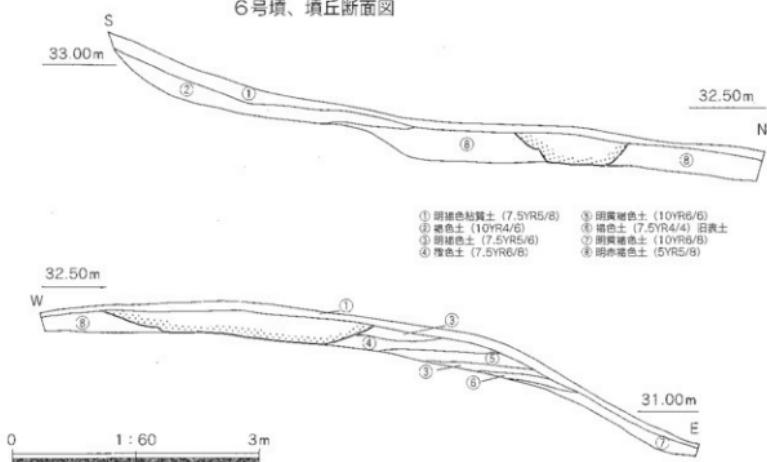


挿図53 新井南谷 4号墳、第1主体出土遺物実測図

4号墳、墳丘断面図



6号墳、墳丘断面図



挿図54 新井南谷4・6号墳、墳丘断面図

5. 新井南谷5号墳 [挿図28・55~59、図版29・30]

1) 位置と現状

新井南谷3号墳の北東側斜面下部に位置し、新井南谷4号墳の東側に立地している。新井南谷地区の古墳の中では唯一、尾根軸線から外れて斜面をテラス状に開削して立地している。墳丘頂部は開削により平坦面を成していた。

2) 墳丘 [挿図55、図版29・30]

地山整形

本墳は、丘陵の軸線から外れた東側斜面部に所在し、標高31.0m~34.0mに立地している。周溝は認められない。丘陵尾根の東側斜面を馬蹄形状に開削して墳丘を作り出したものと思われる。墳丘は、掘削して平坦面を造り出す際に生じた地山土を盛り上げて造られたものと考えられる。

墳丘

墳丘は、後世の開削を受けているため墳丘盛土の上部を失っていることが知られた。この開削は、墳丘頂部全面に行われているためやや緩やかな傾斜の平坦面を成している。

本墳の墳丘盛土は、丘陵斜面掘削時に生じた地山土を主として盛り上げて構築したものと考えられる。墳丘盛土の大半を失っているため層序は不明瞭であるが、その構造過程は基本的に2段階に行われたものと考えられる。第1段階は、墓壙掘り下げに関わる面まで行う。第2段階は、埋葬行為が終了した後、再度盛土を施して墳丘の体裁を整えたと考えられる。

墳丘基底部は判然としないが、墳丘はやや南北に長い楕円形を成し、長径14m、短径9mを測り、墳丘の高さは約2mである。墳頂部の標高は34.0mである。

3) 埋葬施設 [挿図55~58、図版29・30]

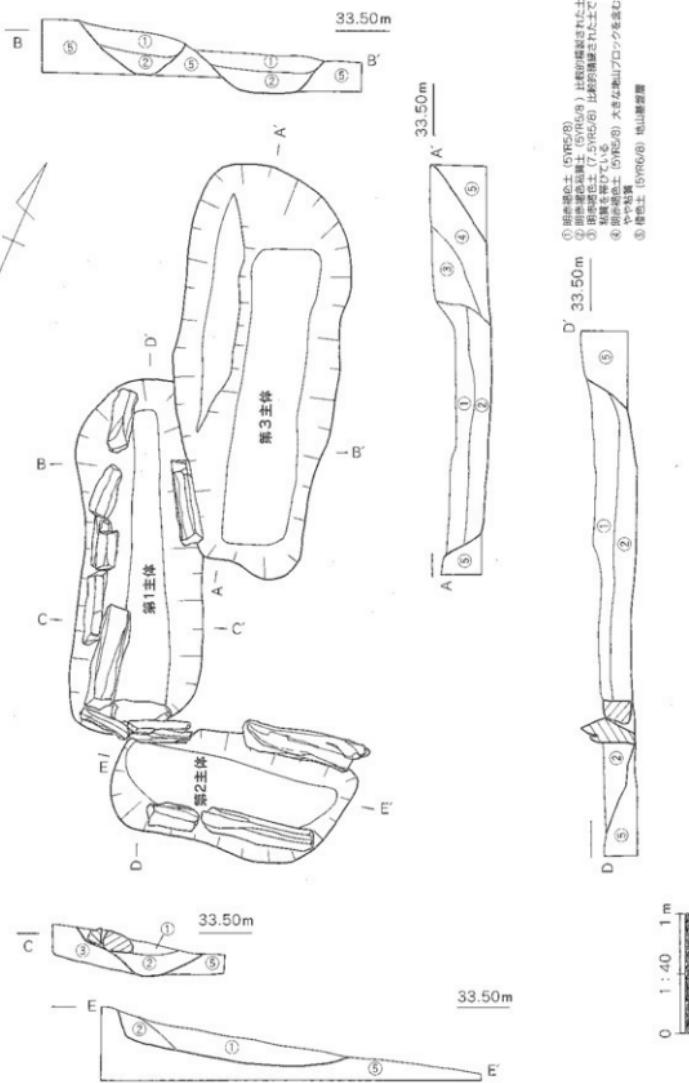
墳頂平坦部に於いて2基の配石墓と1基の木棺墓を検出した。3基の墓壙はそれぞれ端部を接して位置するため、中央部に位置する配石墓を第1主体、両側の配石墓を第2主体、北側の木棺墓を第3主体とした。

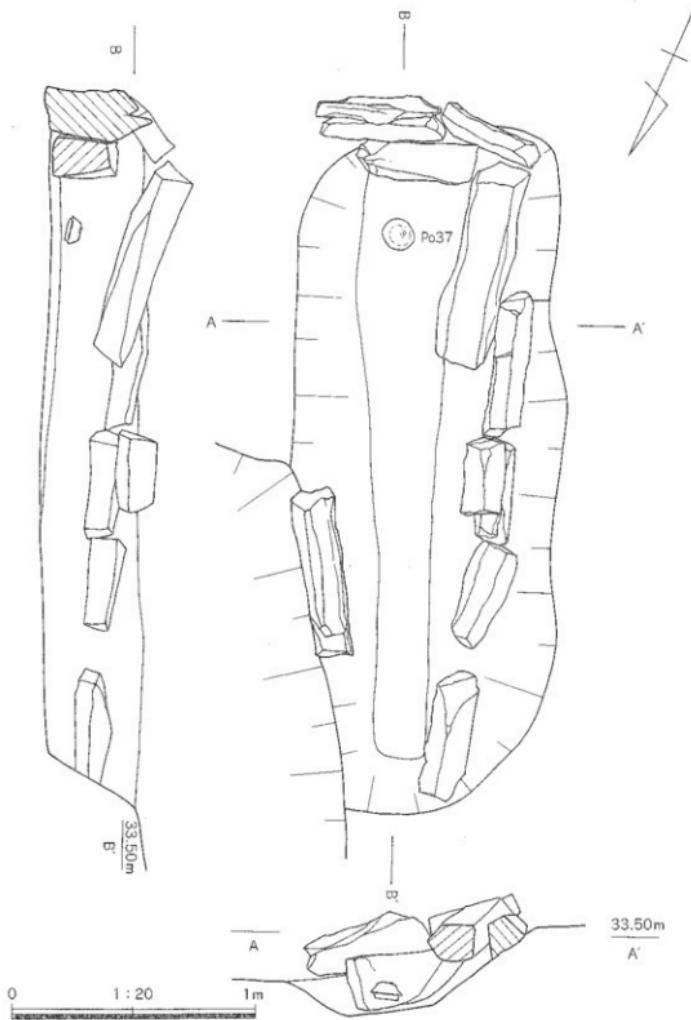
第1主体 3基の墓壙の内、中心に位置する埋葬施設である。墓壙掘り形の規模は長辺2.93m、短辺1.12m、深さ0.4mを測り、その主軸方位はN-11°-Wである。墓壙底部の規模は長辺2.37m、短辺は北側小口部で0.22m、南側小口部では0.43mを測り、南側が広くなっている。墓壙の断面形は逆台形を呈している。

墓壙掘り形の肩部に沿って、柱状節理の石材を横置き状態で廻らせている。墓壙の南側小口部には、長さ0.5m×幅0.23m×厚さ0.15mとその外側に、長さ0.54m×幅0.45m×厚さ0.21mの石材を設置している。この石材は、墓壙底部に埋置した木棺の小口部を成したものと考えられる。墓壙の西辺と東辺に見られる柱状石は、木棺長側板の上部に配石されたものと思われる。墓壙の南西隅部には、小口石と側板を補強する柱状石も施されている。東辺部に石材が遺存していないのは、後世の抜き取りと考えられる。

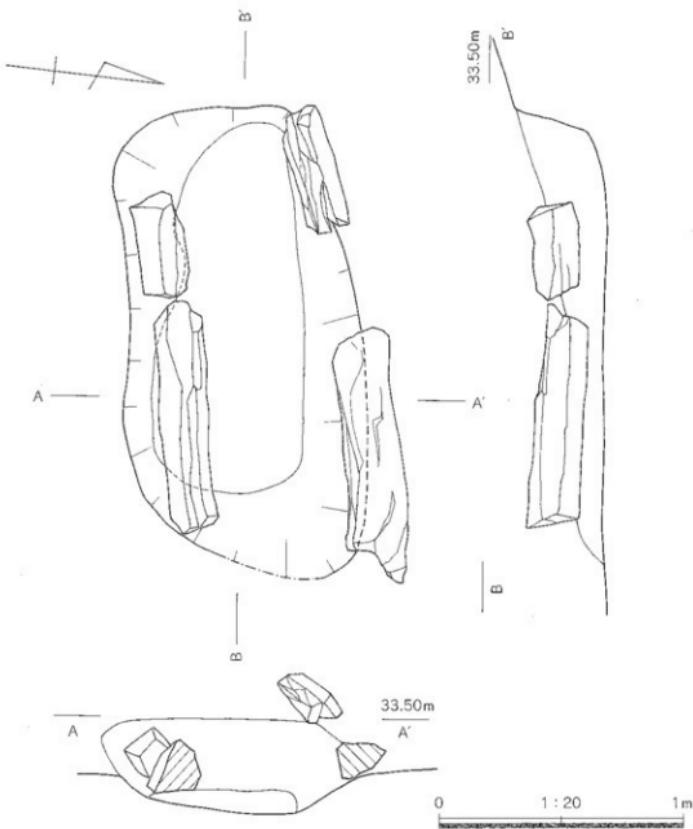
墓壙底部南側が北側に比べて広く造られていること、土器枕に転用されたと考えられる須恵器杯身(Po37)の出土から、頭位を南に向いたものと考えられる。

插図55 新井南谷5号墳、第1～3主体遺構図





挿図56 新井南谷5号墳、第1主体遺構図

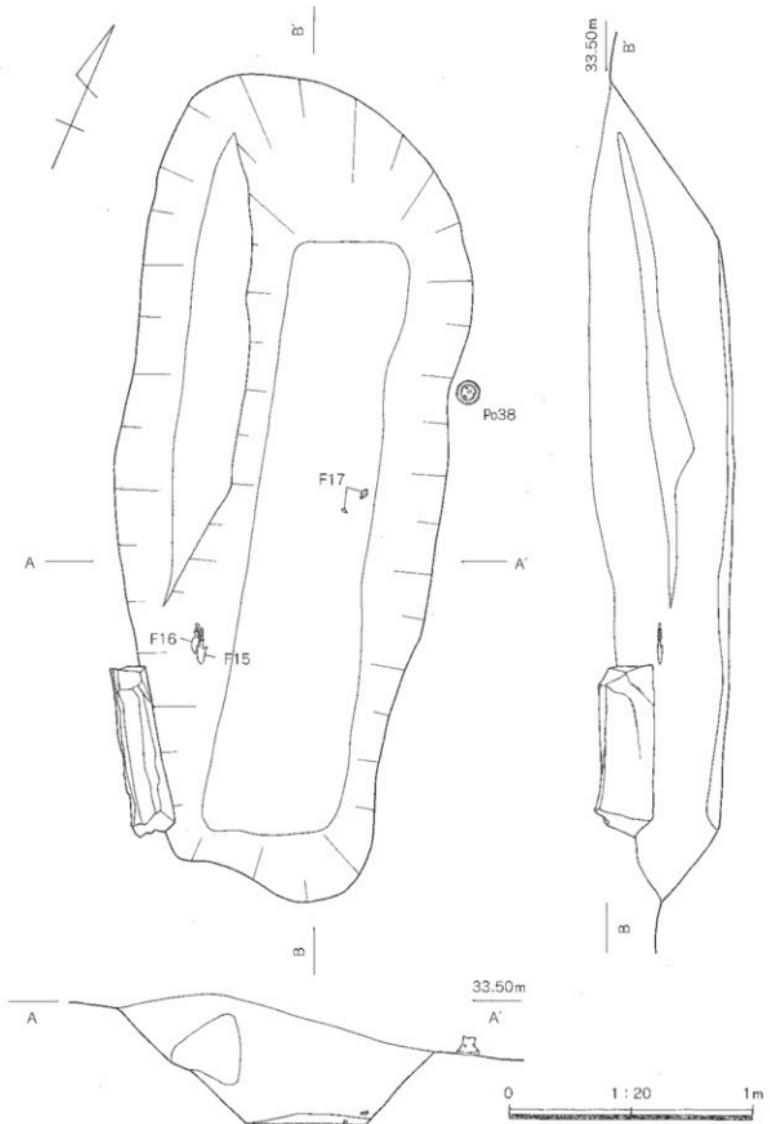


挿図57 新井南谷5号墳、第2主体遺構図

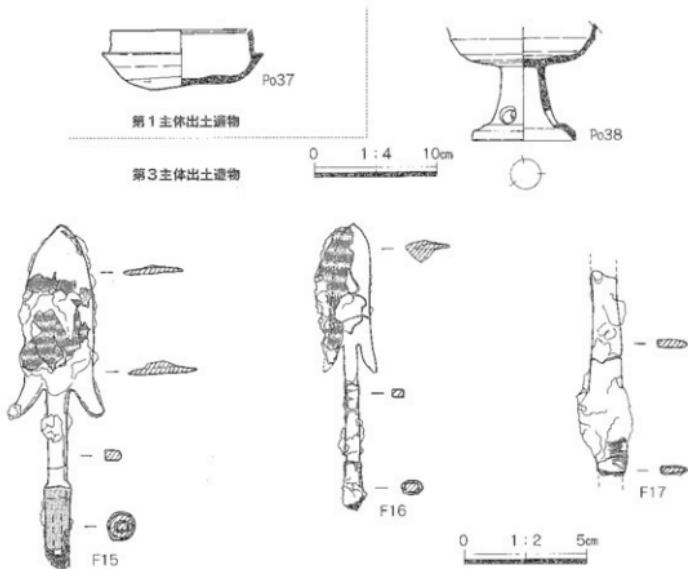
第2主体 3基の墓壙の内、南側に位置する埋葬施設である。墓壙掘り形の規模は長辺1.95m、短辺1.0m、深さ0.38mを測り、その主軸方位はN-89°-Wである。墓壙底部の規模は長辺1.5m、短辺は0.45~0.6mを測り、東側が広くなっている。墓壙の断面形は緩やかな逆台形を呈している。

墓壙掘り形の肩部に沿って、柱状節理の石材を横置き状態で廻らせている。南側の石材は墓壙底部付近まで落ち込んでいる。墓壙の小口部には、石材の配置は見られない。墓壙の北辺と南辺に見られる柱状石は、木棺長側板の上部に配石されたものと思われる。

墓壙底部東側が西側に比べて広く造られていることから、頭位を東に向けたものと考えられる。



插図58 新井南谷5号墳、第3主体遺構図



挿図59 新井南谷5号墳、第1・3主体出土遺物実測図

第3主体 3基の墓壙の内、北側に位置する埋葬施設である。墓壙の南西隅を第1主体と接する。墓壙掘り形の規模は長辺約3.4m、短辺1.45m、深さ0.58mを測り、その主軸方位はN-14°-Wである。墓壙は一部テラス状の平坦部を設けた2段墓壙である。墓壙底の規模は長辺2.45m、短辺は0.48~0.56mを測り、南側が広く造られている。墓壙の断面形は広がり気味の逆台形を呈している。

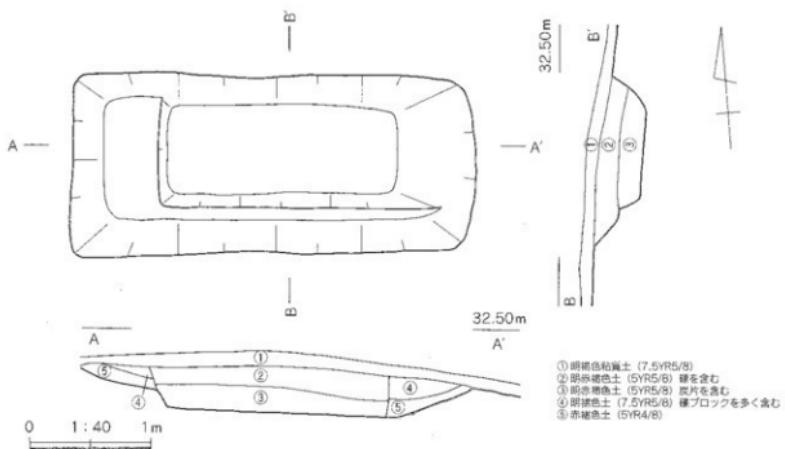
墓壙掘り形の東側に幅0.25mのテラスを造っている。テラス状の平坦部は、墓壙壁の北側のみに造られていた。

墓壙底部南側が北側に比べて広く造られていることから、頭位を南に向けたものと考えられる。墓壙内からは、西側墓壙壁の南寄りに於いて矢柄が装着された鉄鎌2口（F15・16）が出土し、墓壙底部中央に於いても刀子1口（F17）が検出された。鉄鎌は切先を南側に向けている。また、東辺の墓壙掘り形の外側より須恵器脚部（Po38）の出土も見ている。

4) 出土遺物 [挿図59、挿表13、図版45]

第1主体出土遺物 [挿図59、挿表13、図版45]

須恵器の杯身（Po37）を掘り形南側で検出した。口縁を下にして、床面よりやや浮いた状態で出土している。底部は、ほほ平坦で、比較的長い口縁部は直立し、口縁端部は段をなすものである。外面底部中央はヘラ切り未調整し、他は右方向のヘラケズリを施す。



挿図60 新井南谷6号墳、第1主体遺構図

第3主体出土遺物 [挿図59、挿表13、図版45]

須恵器高杯 (Po38) を墓壙東側検出面で、鉄鎌2丁 (F15・16) を墓壙南側の床面から25cm程度浮いた位置から、また、刀子1口 (F17) を墓壙中央の床面付近から検出している。

高杯 (Po38) は、杯部が内湾しながら立ち上がり、口縁部を欠損する。脚部は裾部で段をなす。円形透かしを3カ所施す。

鉄鎌 (F15・16) は、柳葉式片丸造りのものである。矢柄の木質部分が残存し、F15は、木質の上に樹皮を巻いている。また鎌身部から笠被にかけては、漆?が付着している。

刀子 (F17) は、切先、茎を欠損している。茎部に樹皮を巻いた痕跡がある。

6. 新井南谷6号墳 [挿図28・54・60、図版31・33]

1) 位置と現状

新井南谷4号墳の北側に位置し、本墳の北側斜面下部には新井南谷7号墳が所在する。墳丘の頂部は平坦面を成し、後世に何らかの削平を受けたものと考えられる。

2) 墳丘 [挿図54・60、図版31]

地山整形

本墳は、標高29.75m~32.25mに立地している。北側は急傾斜の斜面を成し、新井南谷7号墳に連続している。南側は、新井南谷4号墳から続く斜面下部を浅くカットして幅約2mの周溝を造っている。周溝は、丘陵の尾根上を区画するための措置であり、直線的な溝を呈している。墳丘斜面の標高29.75m付近に傾斜変換点が認められることから、墳丘基底部を成すと考えられる。

北側斜面の墳丘基底部は、やや直線的なラインを示す。墳丘築造は、墳丘南側の丘陵を開削する際に生じた地山土を盛り上げて構築したものと考えられる。

墳丘

墳丘の墳頂部は、後世の開削を受けているため墳丘盛土の大半を失っていることが知られた。この開削は、墳頂部全面に行われているためほぼ水平な平坦面を成している。

本墳は、旧表土面より盛土が施されており、4層が確認できた。墳丘盛土は、周溝掘削時に生じた地山土を主として盛り上げ構築している。その築造過程は基本的に2段階に行われたものと考えられる。第1段階は、墓壙掘り下げに関わる面まで行う。第2段階は、埋葬行為が終了した後、再度盛土を施して墳丘の体裁を整えたと考えられる。

墳丘裾部ラインはやや南北に長い方形を成し、長径12m、短径10.5mを測り、墳丘の高さは約2.5mである。墳頂平坦部の標高は32.25mである。

3) 埋葬施設　【挿図60、図版31】

墳頂平坦部のほぼ中央部に於いて1基の木棺墓を検出した。木棺墓は、盛上面より掘り込まれて造られたものと考えられ隅丸長方形の墓壙掘り形を成す。

第1主体　墳頂部中央に位置する埋葬施設である。墓壙掘り形の規模は、長辺3.32m、短辺1.5mを測る2段墓壙である。主軸方位はN-86°-Wを指す。2段目の墓壙掘り形は長さ1.87m、幅0.73m、深さ0.38mを測り、組み合わせ式木棺を埋置していたものと思われる。墓壙壁にはテラス状の平坦部が、西側小口部より南辺にかけてL字状に造られている。その幅は、南辺で約0.1m、西側小口部で0.45mを測る。

7. 新井南谷7号墳　【挿図28・61・62、図版32・33】

1) 位置と現状

新井南谷6号墳の北側に位置する。本墳の北側には新井南谷8号墳が所在している。墳丘の頂部は平坦面を成し、後世に何らかの削平を受けたものと考えられる。

2) 墳丘　【挿図61・62、図版32】

地山整形

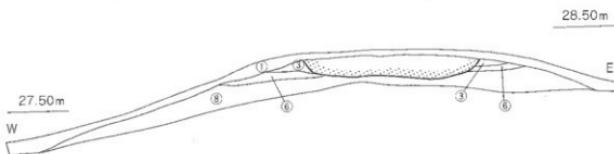
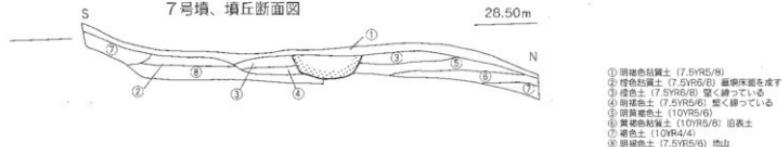
本墳は、標高26.0m～28.0mに立地している。北側斜面下部に新井南谷8号墳が連続している。南側は、新井南谷6号墳の北側斜面下部を幅深さ最大0.25m掘り下げて周溝を成す。周溝は墳丘の上半を馬蹄形状に廻らしたものと考えられる。墳丘北側斜面の標高26.0m付近に傾斜変換点が認められることから、墳丘基底部を成すと考えられる。墳丘築造は、墳丘南側の丘陵を開削する際に生じた地山土を盛り上げて構築したものと考えられる。

墳丘

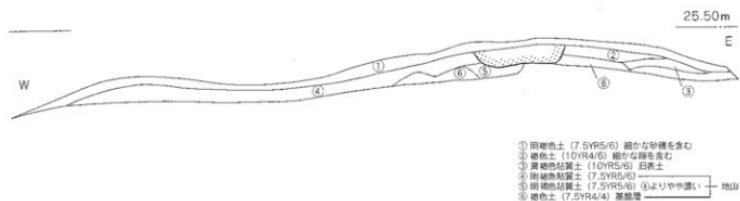
墳丘の墳頂部は、後世の開削を受けているため墳丘盛土の大半を失っていることが知られた。この開削は、墳頂部全面に行われているためほぼ水平な平坦面を成している。

本墳は、旧表土面より盛土が施されていた。墳丘盛土は、周溝掘削時に生じた地山土を主とし

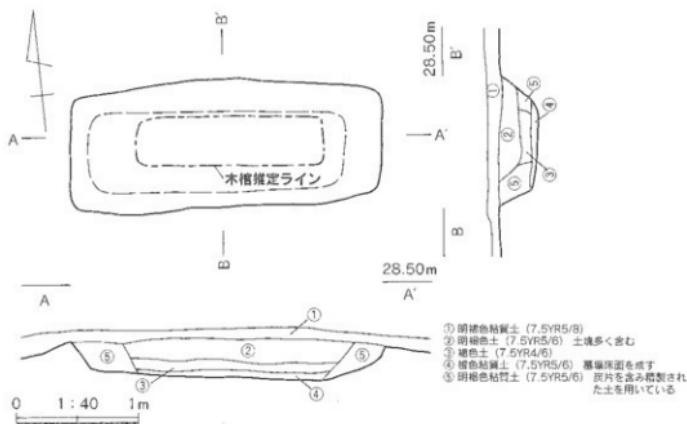
7号墳、墳丘断面図



8号墳、墳丘断面図



挿図61 新井南谷7・8号墳、墳丘断面図



挿図62 新井南谷7号墳、第1主体造構図

て盛り上げ構築している。墳丘盛土は4層が確認できた。その構造過程は基本的に2段階に行われたものと考えられる。第1段階は、墓壙掘り下げに関わる面まで行う。第2段階は、埋葬行為が終了した後、再度盛土を施して墳丘の体裁を整えたと考えられる。

墳丘裾部ラインはやや東西に長い円形を成し、長径11m、短径8.5mを測り、墳丘の高さは約2mである。墳頂平坦部の標高は28.0mである。

3) 埋葬施設 [挿図62、図版32・33]

墳頂平坦部のほぼ中央部に於いて1基の木棺墓を検出した。木棺墓は、盛上面より掘り込まれて造られたものと考えられ隅丸長方形の墓壙掘り形を成す。

第1主体 墳頂部中央に位置する埋葬施設である。墓壙掘り形は2段墓壙を成し、その規模は長辺2.55m、短辺1.05mを測り、主軸方位はN-87°-Wを指す。2段目の墓壙中央に、長さ1.5m、幅0.4m、深さ0.32mを測る組み合わせ式木棺を埋置していた。

埋置された木棺の長側板の外側には、側板を安定化させるための裏込め土が施されていた。

8. 新井南谷8号墳 [挿図28・61・63、図版33・34]

1) 位置と現状

新井南谷7号墳の北側に位置する。本墳の北側には新井南谷9号墳が所在している。墳丘の頂部は平坦面を成し、後世に何らかの削平を受けたものと考えられる。

2) 墳丘 [挿図61・63、図版33・34]

地山整形

本墳は、標高23.0m~25.3mに立地している。北側は急傾斜の斜面を成し、斜面下部に新井南

谷9号墳が接続している。南側は浅いレンズ状の周溝を成している。周溝は墳丘の周囲を巡らしたものと考えられる。墳丘斜面北側の標高23.0m付近に傾斜変換点が認められることから、墳丘基底部を成すと考えられる。墳丘築造は、墳丘南側の丘陵を開削する際に生じた地山土を盛り上げて構築したものと考えられる。

墳丘

墳丘の墳頂部は、後世の開削を受けているため墳丘盛土の大半を失っていることが知られた。この開削は、墳頂部全面に行われているためほぼ水平な平坦面を成している。

本墳は、旧表土面より盛土が施されていた。墳丘盛土は2層が確認できた。墳丘の築造過程は基本的に2段階に行われたものと考えられる。第1段階は、墓壙掘り下げに関わる面まで行う。第2段階は、埋葬行為が終了した後、再度盛土を施して墳丘の体裁を整えたと考えられる。

墳丘裾部ラインはやや南北に長い円形を成し、長径10m、短径9mを測り、墳丘の高さは約2mである。墳頂平坦部の標高は25.32mである。

3) 埋葬施設 [挿図63、図版33・34]

墳頂平坦部のはば中央部に於いて1基の木棺墓を検出した。木棺墓は、盛土面より掘り込まれたものと考えられ隅丸長方形の墓壙掘り形を成す。

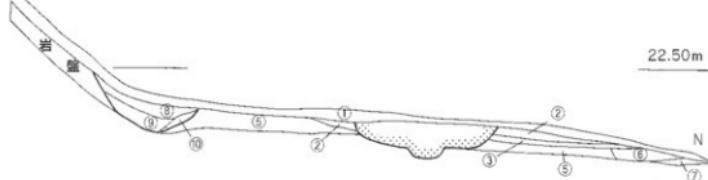
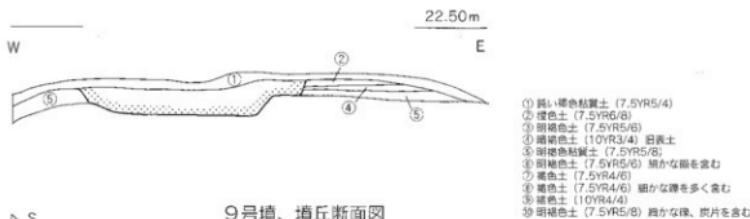
第1主体 墳頂部中央に位置する埋葬施設である。墓壙掘り形の規模は、長辺2.30m、短辺1.27m、深さ0.27mを測る。その主軸方位はN-14°-Wを指し、尾根軸線に平行に造られている。この墓壙の中央に、推定内法長1.7m、幅0.43m、深さ0.12mを測る組み合わせ式木棺を埋置していたと考えられる。

埋置された木棺の長側板の外側には、側板を安定化させるための裏込め土が施されていた。

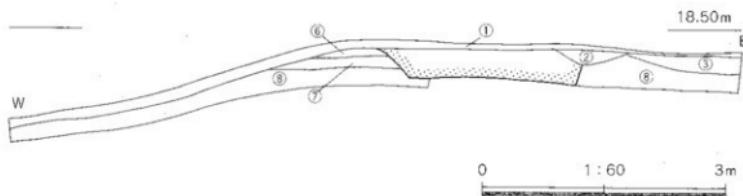
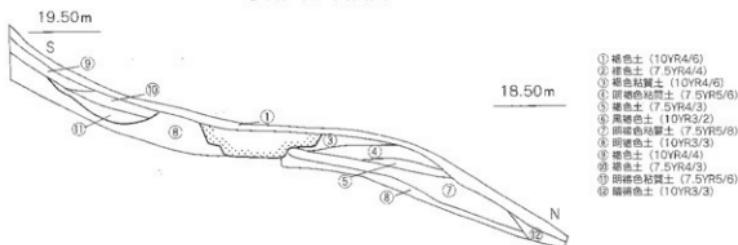
9. 新井南谷9号墳 [挿図28・64・65、図版33・35]

1) 位置と現状

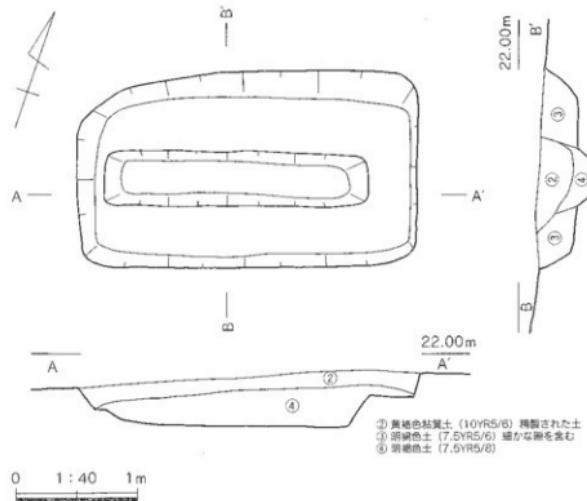
新井南谷8号墳の北側に位置する。本墳の北側には新井南谷10号墳が所在している。墳丘の頂部は平坦面を成し、後世に何らかの削平を受けたものと考えられる。



10号墳、墳丘断面図



挿図64 新井南谷 9・10号墳、墳丘断面図



挿図65 新井南谷9号墳、第1主体遺構図

2) 墳丘 [挿図64・65、図版33・35]

地山整形

本墳は、標高20.25m～21.75mに立地している。墳丘北側の斜面下部に10号墳が連続している。南側は幅約1.3m、深さ0.35mを測る周溝を成している。周溝は墳丘の周囲を台形状につくってしたものと考えられる。墳丘斜面北側の標高20.25m付近に傾斜変換点が認められることから、墳丘基底部を成すと考えられる。墳丘築造は、墳丘南側の丘陵を開削する際に生じた地山土を盛り上げて構築したものと考えられる。

墳丘

墳丘の墳頂部は、後世の開削を受けていたため墳丘盛土の大半を失っていることが知られた。この開削は、墳頂部全面に行われているためほぼ水平な平坦面を成している。

本墳は、旧表土面より盛土が施されていた。墳丘盛土は、周溝掘削時に生じた地山土を主として盛り上げ構築している。墳丘の築造過程は基本的に2段階に行われたものと考えられる。第1段階は、墓壙掘り下げに関わる面まで行う。第2段階は、埋葬行為が終了した後、再度盛土を施して墳丘の体裁を整えたと考えられる。

墳丘裾部ラインはやや南北に長い方形を成し、長径11m、短径9.5mを測り、墳丘の高さは約1.5mである。墳頂平坦部の標高は21.75mである。

3) 埋葬施設 [挿図65、図版35]

墳頂平坦部のほぼ中央部に於いて1基の木棺墓を検出した。木棺墓は、盛土面より掘り込まれて造られたものと考えられ陽丸長方形の墓壙掘り形を成す。

第1主体 墳頂部中央に位置する埋葬施設である。墓壙掘り形の規模は、長辺2.80m、短辺1.60m、深さ0.31mを測り、その主軸方位はN-72°-Wである。この墓壙の中央に、推定内法長2.17m、幅0.45m、深さ0.12mを測る組み合わせ式舟底形木棺を埋置していたと思われる。木棺の周辺にはテラス状の平坦部を廻らせてある。北辺は0.43m、南面は0.4m、東辺は0.35m、西辺は0.08mである。

埋置された木棺の長側板の外側には、側板を安定化させるための裏込め土が施されていた。

10. 新井南谷10号墳 [挿図28・64・66、図版33・36]

1) 位置と現状

新井南谷9号墳の北側に位置する。本墳の北側は丘陵尾根の裾部を成す。墳丘の頂部は平坦面を成し、後世に何らかの削平を受けたものと考えられる。

2) 墳丘 [挿図64・66、図版33・36]

地山整形

本墳は、標高18.25mに立地している。北側は丘陵尾根の裾部に続く。南側は幅約1.4m、深さ0.3mを測る周溝を成す。周溝は墳丘の後背部を馬蹄形状に廻らしている。墳丘基底部は不明である。墳丘の築造は、墳丘南側の丘陵を開削し周溝を造り出す際に生じた地山土を盛り上げて構築したものと考えられる。

墳丘

墳丘の墳頂部は、後世の開削を受けているため墳丘盛土の大半を失っていることが知られた。この開削は、墳頂部全面に行われているためほぼ水平な平坦面を成している。

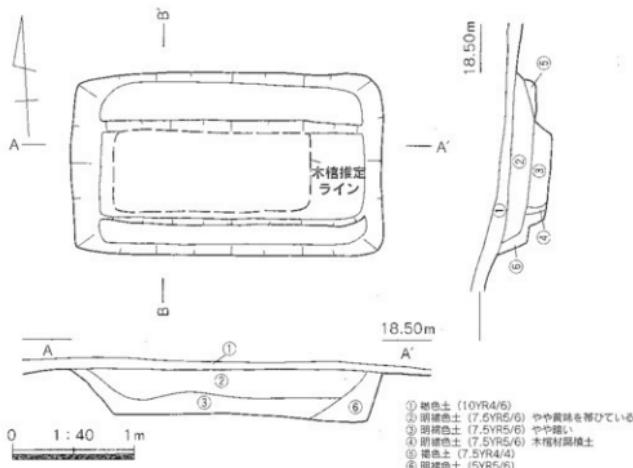
本墳は、旧表土面より盛土が施されていた。墳丘盛土は1層が遺存していた。墳丘の築造過程は基本的に2段階に行われたものと考えられる。第1段階は、墓壙掘り下げに関わる面まで行う。第2段階は、埋葬行為が終了した後、再度盛土を施して墳丘の体裁を整えたと考えられる。

墳丘裾部ラインは検出し得ていないため不明であるが、やや東西に長いテラス状の凹形を成し、長辺7m、短辺6mを測り、墳丘の高さは推定約1.5m位であろう。墳頂平坦部の標高は18.25mである。

3) 埋葬施設 [挿図66、図版36]

墳頂平坦部のほぼ中央部に於いて1基の木棺墓を検出した。木棺墓は、盛土面より掘り込まれて造られたものと考えられ陽丸長方形の墓壙掘り形を成す。

第1主体 墳頂部中央に位置する埋葬施設である。墓壙掘り形の規模は、長辺2.55m、短辺1.5m、深さ0.25mを測り、その主軸方位はN-89°-Wである。この墓壙の中央に、推定内法長1.61m、幅0.65m、深さ0.18mを測る組み合わせ式木棺を埋置していた。テラス状の平坦部が造



挿図66 新井南谷10号墳、第1主体遺構図

られており、北辺で0.3m、南辺で0.15mを測る。

埋置された木棺の長側板の外側には、側板を安定化させるための裏込め土が施されていた。

第2項 新井南谷地区遺構外出土遺物 [挿図67、挿表16、図版45]

遺構外より土師器を4点(Po39~42)、須恵器杯身(Po43)を1点検出した。Po39は壺の口縁部片である。口縁はほぼ直立し複合口縁をなす。口縁端部は丸く納める。内外面ヨコナデ調整する。Po40は碗で、底部を欠損している。内湾しながら立ち上がり、端部はやや先細り気味に納める。内外面ヨコナデ調整する。Po41・42は、皿の底部片である。底部は回転糸切りを行う。

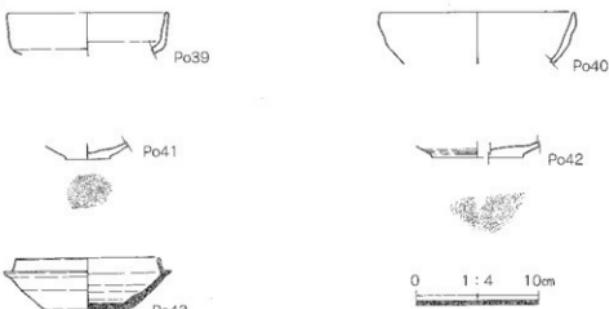
Po43は、杯身である。口縁部の立ち上がりはやや内傾し、端部は丸く納める。底部はほぼ平坦で、ヘラ切り離し後末調整である。内面には、僅かに同心円文タタキの痕跡がある。

第3項 新井南谷地区古墳出土遺物について [挿図2・3・28、図版14・15]

それぞれの古墳から出土した遺物について、築造時期を検討することとする。因幡地域の古墳時代土師器については、岩吉編年案が示されており、ここではこれに準拠するものであるが、一部天神川下流域を中心として示されている編年案を参考とする。また須恵器については、陶邑編年に準拠するものである。

新井南谷1号墳 出土した杯身【挿図30、Po23】の形態から陶邑編年M.T-1.5に相当すると考えられる。よって本墳の築造時期は6世紀前半代と考えられる。

新井南谷2号墳 土器枕として転用された有段の高杯【挿図35、Po24】を出土している。表面



挿図67 新井南谷地区、遺構外出土遺物実測図

の剥離が著しく、調整の観察が不可能であったが、そのプロポーションが新井南谷3号墳の有段高杯に類似することから、同墳とはほぼ同じ頃築造されたものと思われる。

新井南谷3号墳 第1主体からは、土器枕として高杯【挿図46、Po25】を検出している。有段の高杯で、杯部は外反し、内面には放射状の暗文が施されている。第2主体からも、同じく高杯を検出している。有段【挿図47、Po26・27】と無段【挿図47、Po29・30】のものがあり、有段のものは、外反する杯部で、杯底部の屈曲部は稜をなしている。無段のものは、杯底部から緩やかに外傾し口縁端部で面をもつものと、内湾気味に立ち上がり、口縁端部でやや外反するものがある。第3主体からは無段の高杯【挿図48、Po31~34】と器台【挿図48、Po35】を検出している。高杯は、杯底部からやや外反気味に立ち上がり、端部は丸く納めるものである。器台は受部と脚部に明瞭な段がない所謂開地谷型器台と呼ばれるものである。これらの土器は長瀬高浜遺跡から出土した遺物に類似するものがみられ、天神川下流域の土器編年案に準拠すれば、天神川Ⅲ期に相当すると考えられる。千代川流域の土器編年案でみると、岩吉編年VI期に相当すると思われる。従って、本墳の築造時期は古墳時代前期中頃に該当する。

新井南谷4号墳 新井南谷4号墳からは須恵器の杯蓋【挿図53、Po36】を検出している。天井部と口縁部の境に稜を有し、口縁端部に弱い段を持つものである。陶邑編年MT-15に相当すると考えられる。よって本墳の築造時期は6世紀前半代と考えられる。

新井南谷5号墳 新井南谷5号墳第1主体床面付近から杯身【挿図59、Po37】を検出している。比較的長い立ち上がりは直立し、口縁端部は段をなすものである。第3主体より高杯【挿図59、Po38】を検出している。短い脚部で、円形の透かしを有す。口縁部は欠損している。これらの遺物の形態は、陶邑編年MT-15に相当すると考えられる。よって本墳の築造時期は6世紀前半代と考えられる。

参考文献 田辺昭三「須恵器大成」角川書店 1981

中村 浩「和泉陶邑の研究」柏書店株式会社 1981

第4項 新井南谷地区城砦跡群について

新井南谷地区の丘陵尾根上に所在が確認された古墳は、全て後世による開削が認められた。この開削によって、墳丘の上半部分がカットされ平坦面を成していた。このカット面は、中・近世に於ける戦術上の城砦跡であると考えられる。カット面は、標高18mから44mまでの間に11面が確認されている。

新井南谷地区が立地するこの丘陵は、蒲生川と小田川に挟まれた南北に伸びる低丘陵上の標高約90mを測る小ピークより派生したものである。尾根は急角度で丘陵裾部へと下垂している。尾根上には、今回調査を行った平坦面のほかに、小ピーク上を含めて2~3面の平坦部を確認している。

本城砦跡は、細くて急角度の尾根上に狭いテラス状の平坦面を造って構成されていることが判明した。これらのテラス面は、古墳の墳丘を簡単な土木工事によって削平面を作り出すことで終わっており、柱穴・構列など特別な施設を伴っていない。

古墳の墳丘を開削して造られた平坦面は、15m²~120m²を測り必ずしも広い面を造っているとは言えない。これらの平坦面は、いわゆる曲輪を成していたものと考えられる。新井南谷5号墳の所在する斜面部の平坦面は、帶曲輪を成したものと考えられる。同様な平坦部が、新井南谷4号墳の西側斜面下部にも認められている。新井南谷6号墳の北西斜面下部より新井南谷10号墳付近まで続く堅掘状の窪みが連続しているのは、各曲輪を連絡する通路状遺構と思われる。この通路状遺構の最上端部には、新井南谷5号墳の埋葬施設に使用されていたと考えられる柱状節理の石材が階段のステップとして流用されていた。

本城砦跡の造られた年代は不明であるが、本遺跡の南西約3km、小田川左岸に立地する二上山城の存続時期併行あるいは安土・桃山時代までの期間に該当するものと考えられる。

南北朝・室町期の山城の特色としては、純軍事施設としての性格を強く持っている。基本的には山岳戦法として天険な地形を選ぶ。これは、いわゆる悪党戦法（ゲリラ的、反体制的、在地的）から発展したものである。南北朝・室町期の山城（城砦）の特徴として、天険の利用は言うまでもなく、小規模な城砦群の連繋が指摘される。この小規模な城砦の構造としては、痩せ尾根を開削するだけの簡単な土木工事、不明瞭な削平が行われる。従って、土壠や虎口などの特異な施設を持たず、曲輪は帶曲輪を主体で小規模で段差は小さく、配置は専ら自然地形に従っている。

本城砦跡は、まさしくこれらの特徴をよく表していると思われる。

参考文献 角田 誠「近畿地方における南北朝期の山城」『中世城郭研究論集』1990年

山上雅弘「戦国時代の山城－西日本を中心とする15世紀後半～16世紀前半の山城について－」『中世城郭研究論集』1990

年

第4章 まとめにかえて

本報告書は、岩美町立南小学校建設工事に伴う緊急発掘調査であった。調査は当初、城砦の発掘調査を目的としていた。しかし、丘陵上の古墳が築造され廃絶した後に、当該地が城砦を造る為に開削されていることが確認された。このため急速、発掘調査を古墳調査に切り替えた経緯がある。工事施工時期との兼ね合いもあり、充分な調査が出来なかつた感は否めない。

しかしながら調査によって得られた知見は、鳥取県東部の原始・古代の文化を考える上でも貴重な資料が得られた。このことは、不充分な発掘調査が成された中でエポックメーリングな出来事であった。

最後に、調査を実施するにあたり各方面より、多くの方のご支援・ご協力を得た。ここに記して感謝の意を表す。

出土遺物観察表

☆法量は①口径 ②器高 ③底径 ④脚部径および高台径 ⑤胸部径 ⑥厚さ ⑦筒部径をcmで示す。

☆法量の記載の中で*は復元値を、△は残存値を示す。

☆色調は土器の地色を示し、赤色塗彩の色とは区別した。

☆焼成は、良・やや不良・不良の三段階に分けた。

☆鉄鎌の形態分類は、関 義則の分類に従う。

挿表2. 新井三鷲谷地区、JSK-01出土土器観察表

遺物番号 取上番号	出土 地 点	器 種 類	法 量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調
Po 1 5 1	JSK-0 1	縄文	②2. 0 △	内溝する口縁部片。端部下半に沈縄文あり。	(外) 口縁端部縄文。 (内) ナデ。	1mm以下 の砂粒を 少量含む	良	黒褐色
Po 2 9 2	JSK-0 1	縄文	②1. 8 △	口縁部片か? 端部を欠く。突帯を付ける。	(外) 縄文。 (内) ナデか? ☆内面に煤付着。	1mm程度 の砂粒を 多量含む	良	茶褐色～ 黒褐色
Po 3 5 3	JSK-0 1	縄文	②1. 7 △	口縁部片。	(外) 縄文。 (内) ナデ。	1mm以下 の砂粒を 多量含む	良	茶褐色
Po 4 1 0 1	JSK-0 1	縄文	②2. 5 △	体部片。	(外) 縄文。 (内) ナデ。	1mm程度 の砂粒を 多量含む	良	茶褐色

挿表3. 新井三鷲谷2号墳、出土土器観察表

遺物番号 取上番号	出土 地 点	器 種 類	法 量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色 調
Po 6 1 4 1	第2主体	土師器 高杯	①15. 8 ②12. 5 ④10. 0	内溝する杯部、口縁端部は剥離のため不明瞭。脚は鋸部でハの字形に開く。端部不明瞭。	(外) 杯部タテハケメ後赤色塗彩。脚部ヨコナデ。 (内) 杯部ヨコナデ。鋸部ヨコハケメ後、T貝ナデ。	1mm以下 の砂粒を 少量含む	やや 不良	浅黄褐色～ 明赤褐色 赤色塗彩 あり。

挿表4. 新井三鷲谷2号墳、第1主体出土鉄器観察表

遺物番号 取上番号	種 類	出土 地 点	全長 (cm)	鎌 身 部			頭部	兜 被	茎	備考
				平面	断面	長さ×幅×厚さ				
F 1 1 3 7	鉄鎌	床面	8.3△	柳葉?	片丸	4.9△×2.3×0.3	欠損	3.4△×0.6×0.4		
F 2 1 4 0	鉄鎌	床面	10.1 △	柳葉	片丸	4.2×1.7×0.35	長頭	5.9×0.6×0.5		関は台形か?
F 3 1 3 9	鉄鎌	床面	3.9△	柳葉	片丸	3.9△×1.8×0.3	欠損			
F 4 1 4 0	鉄鎌	床面	4.9△				長頭?	4.2△×0.6 ×0.5	0.7△×0.5×0.6	蓋部に木質痕 樹皮痕あり。
F 5 1 3 8	鉄鎌	床面	1.9△	三角			無頭			鎌身中心部に 木質痕あり。 逆刃は重抉か
F 6 1 3 8	鉄鎌	床面	3.2△	三角		3.2△×-×0.2	無頭			鎌身中心部に 木質痕あり。

遺物番号 取上番号	出土 地 点	種類	全長 (cm)	身	身 先	身 元	茎	備 考
F 7 1 3 6	床面	刀子		長さ	幅×厚さ	幅×厚さ	長さ×幅×厚さ	蓋に木質痕あり。身の中心 部欠損。

挿表5. 新井三鷄谷3号墳、出土土器観察表

遺物番号 取上番号	出土点	器種類	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調
Po 7 3 5 3 9	南西周溝内	土師器 高杯	① 1.6.0* ② 1.1. 5	内溝する杯部。口縁端部は丸く納める。脚柱部はやや膨らみをもち縫部でハの字形に開く。端部は面をもつ。内面に一束の沈線を有する。	(外) 杯底部にハケメが残る。他はナデ。 (内) 杯部ナデ。脚部成形時の絞り痕をナデ消す。縫部はハケメ後ナデ。	1~2mm程度の砂粒を含む	良	橙色 赤色塗彩
Po 8 3 5 3 9	南西周溝内	土師器 高杯	① 1.6.4* ② 1.0.0△	内溝する杯部。口縁端部は丸く納める。脚柱部は直線的に伸び、縫部で大きくハの字形に開く。全体的に剥離する。	(外) ナデ。 (内) ナデ。絞り痕あり。	密。砂粒を含まない	良	にぶい黄 褐色 赤色塗彩
Po 9 3 5 3 9	南西周溝内	土師器 高杯	② 8. 8△	口縁部、脚柱部を欠損する。脚柱部は直線的に伸び、縫部で大きくハの字形に開く。全体的に剥離する。	(外) ナデ。 (内) ナデ。脚柱部は絞り後、棒状工具によるナデ。縫部は、ハケメ後ヨコナデ。	密。砂粒を含まない	良	にぶい橙 色 赤色塗彩
Po 10 3 5	南西周溝内	土師器 高杯	③ 7. 6△ ④ 9. 0	杯部欠損。脚柱部はやや膨らみをもち縫部でハの字形に開く。端部は面をもつ。全体的に剥離する。	(外) ナデ。 (内) ナデ。縫部指押えあり。	密。砂粒を含まない	良	黒褐色~ 明褐色 黒運有 赤色塗彩
Po 11 3 5 3 9	南西周溝内	土師器 高杯	③ 7. 7△ ④ 8. 8	杯部欠損。脚柱部はやや膨らみをもち縫部でハの字形に開く。端部は面をもつ。	(外) ナデ。 (内) ナデ。縫部指押えあり。絞り痕あり。	1mm程度の砂粒を微量含む	良	にぶい褐 色 赤色塗彩
Po 12 3 5	南西周溝内	土師器 高杯	② 6. 2△ ④ 9. 8*	杯部、縫部上半欠損。全体的に剥離する。	内外面ナデ。	密。砂粒を含まない	良	橙色 赤色塗彩 か?
Po 13 4 0	南西周溝内	須恵器 杯身	① 1.4. 5 ② 5. 0	立上がりは比較的の長く、器高の1/3を占める。やや内湾気味に立ち上がり、縫部は丸く納める。体部は丸みをもち、受部はほぼ水平に伸びる。	(外) 体部へラ削り後カキメ調整、体部1/3以下はナデ消す。 (内) ヨコナデ。	1~3mm程度の砂粒を含む	良	灰色
Po 14 4 3	墓壙 上面	土師器 甕	② 8. 0△ ⑤ 2.6. 0*	口縁部、体部下半を欠損し球形の体部をなすと考えられる。粘土純ぎ足し痕あり。	(外) 頸部ヨコナデ。体部ヨコ方向の粗いハケメ。 (内) 斜め上方へのヘラケズリ、タテ方向の指押え痕あり。	1~3mm程度の砂粒を多く含む	良	橙色
Po 15 3 6	墓壙 上面	須恵器 風口縁 部片	① 6. 8* ② 1. 9△	縫の口縁か? 迷ハの字形に伸び、縫部は丸く納める。	(外) ヨコナデ後ハケ状工具による波状文。 (内) ヨコナデ。	1mm以下の砂粒を含む	良	灰色
Po 16 4 1	墓壙 上面	須恵器 甕	② 1.2.4* ⑤ 1.8. 0	口縁部欠損。横にやや長い球形を呈す。	(外) 体部2/3以上カキメ後若干のナデ、以下、不整方向のナデ。体部中位に沈線に抉まれて剝突点文。	1~3mm程度の砂粒を多く含む	良	灰黃~灰 白色
Po 17 3 8	埴丘 盛土中	須恵器 樽形甕	① 7. 8 ② 1.5. 9 ③ 1.5. 6*	ビア樽形の底。中央部に膨らみをもつ。体部側面は、被蓋される側を欠く。口縁部は段をもち、口縁端部は面をなす。	(外) 体部は4条の沈線を施し、その間は波状文。他、ヨコナデ。指押さえ痕あり。	1mm程度の砂粒を微量含む	良	灰~灰白色 自然釉付 着火標痕有

插表6. 新井三鷲谷3号墳、出土鉄器観察表

遺物番号 取上番号	出土 地點	種類	全長 (cm)	身	身先	身元	茎	備 考
				長	幅×厚さ	幅×厚さ	長さ×幅×厚さ	
F 8 1 3 5	床面	鉄刀	75.7	61.0	2.5×0.7	3.4 × 0.8	14.7 × 1.6 × 0.7 (茎中央) 0.5 × 0.5 (茎尻)	フクラ切先。片開。茎部に2 カ所目釘穴あり。 刀身、茎部に木質痕あり。
F 9 1 3 4	床面	刀子	12.6	8.5	1.0 × 0.2	1.8 × 0.2	4.1 × 1.0 × 0.35 (茎中央) 0.6 × 0.3 (茎尻)	フクラ切先。片開。刃先を欠く。

插表7. 新井三鷲谷地区、木棺墓出土土器観察表

遺物番号 取上番号	出上 地點	器種 種類	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調
Po 1 8 4 8	木棺墓	須恵器 杯蓋	①14.0 ②3.3	断面三角形の短いかえりを有する蓋で、天井部には低い偏平なつまみを付す。内面中央にヘラ記号あり。	(外) 天井部左方向のヘラケズリ。他ヨコナデ。 (内) ヨコナデ。天井部仕上げナデ。	1~3mm程度の砂粒を含む	良	灰黄色
Po 1 9 4 7	木棺墓	須恵器 杯蓋	①14.6 ②3.3	天井部は偏平なつまみを付す。丸みをもたらす1線部へと続き、端部は面をもつ。	(外) 天井部ヘラケズリ後ヨコナデ。他仕上げナデ。 (内) ヨコナデ。天井部ヨコナデ。	1~4mm程度の砂粒を含む	良	灰黄~青灰色
Po 2 0 4 6	木棺墓	須恵器 杯身	①14.2 ②4.6	平坦な底部から内汚気味に口縁部へと続き、端部は丸く納める。	(外) 底部ヘラ切り未調整。他ヨコナデ。 (内) ヨコナデ。	1mm程度の砂粒を含む	不良	灰黄~暗青灰色

插表8. 新井三鷲谷地区、遺構外出土土器観察表

遺物番号 取上番号	出上 地點	器種 種類	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調
Po 2 1 4	2号墳 表土中	須恵器 脚部片?	②1.9△ ④21.2*	脚部片か?	内外面ヨコナデ。	1mm程度の砂粒を微量含む	良	灰色
Po 2 2 6 1 2 4	3号墳 南側	須恵器 杯身	①14.3* ②4.1 ③11.1	比較的低めの高台を付す。杯部は外傾し、端部は先細り、丸く納める。	内外面ヨコナデ。	1mm程度の砂粒を微量含む	良	灰白~灰黄色
Po 5 1 5 1	2号墳 丘墓墳 丘塚上	純文 深鉢	①26.4* ②5.1△	口縁帶の下位に1条の割目突番を施す。砲弾形の体部へと続く。	内外面ナデ。	1~3mmの砂粒を多量含む	良	赤褐色

插表9. 新井南谷1号墳、第1主体出土土器観察表

遺物番号 取上番号	出上 地點	器種 種類	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調
Po 2 3 5	墓塹内埋 土	須恵器 杯身	①10.3 ②4.7	比較的高い立上がりを有し、内側気味に立ち上がる。端部は段をもつ。底部はまるい。	(外) 底部1/3以下右方向のヘラケズリ。他ヨコナデ (内) ヨコナデ。	1~5mm程度の砂粒を含む	良	灰色

挿表10. 新井南谷2号墳、第1主体出土土器観察表

遺物番号 取上番号	出土 地點	器種 種類	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調
Po 2 4 9. 10 11. 12	石榴床面	土師器 高杯	②5. 4△ ③5. 4△	脚部、杯部口縁端を欠く。杯部は段をなし、口縁部は外傾する。内外面ともに剥離。	外面ともに剥離のため不明瞭。	1mm程度の砂粒を少量含む	不良	外面 褐色

挿表11. 新井南谷3号墳、出土土器観察表

遺物番号 取上番号	出土 地點	器種 種類	法量	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調
Po 2 5 8 4	第1主体 床面	土師器 高杯	①19. 6 ②11. 6 ④13. 5	有段の杯部。口縁部は大きく外反し、端部は丸く納める。脚部は脚部で大きくハの字状に開く。故意に口縁部を打ち欠いている部分あり。	(外) ヨコナデ。杯部と脚部の接合部にハケメ軋。赤色塗影。 (内) 杯部ヨコナデ後赤色塗影し、さらに放射状暗文を施す。脚柱部は工具によるナデ。据部ハケメ、端部付近ヨコナデ。	1~3mm程度の砂粒を少量含む	良	にぶい 褐色 赤色塗影
Po 2 6 3 1	第2主体 床面	土師器 高杯	①20. 2 ②11. 5 ④14. 5	有段の杯部。口縁部は大きく外反し、端部は面をもつ。脚柱部に3ヶ所円形の穿孔あり。柄部で大きくハの字形に開く。杯部と脚部の接合部に棒状工具痕あり。	(外) 杯部ヨコナデ。脚部ハケメ後ヨコナデ (内) 杯部ヨコナデ。脚部上左方向へのハラケズリ後ナデ。下平ヨコナデ。	1mm程度の砂粒を多く含む	やや 不良	にぶい 黃褐色
Po 2 7 2 8	第2主体 床面	土師器 高杯	①21.4*②6.0△	有段の杯部。口縁部は外反し、端部は丸く納める。脚部欠損。接合部に棒状工具痕あり。	外面ヨコナデ。	1~2mm程度の石英を多量に含む	良	黃褐色 黒斑り
Po 2 8 2 9	第2主体 床面	土師器 高杯	②5. 8*④13.6△	杯部欠損。脚部欠損で大きくハの字形に開く。端部は面をもつ。	(外) ヨコナデ。 (内) 脚柱部ヨコナデ絞り痕あり。脚柱部ハケメ後ヨコナデ。	1~2mm程度の砂粒を含む	良	褐色
Po 2 9 3 3	第2主体 床面	土師器 高杯	①17. 0 ②9. 8△	杯部は外傾し口縁端部で面をもつ。脚部は欠損。杯部と脚部の接合部に棒状工具痕あり。	(外) 接合部ハケメ、他ヨコナデ後赤色塗影 (内) 杯部ヨコナデ後赤色塗影。脚柱部左方向のハラケズリ。脚部ヨコナデ。	1~3mm程度の石英を多量に含む	良	褐色 赤色塗影
Po 3 0 3 4	第2主体 床面	土師器 高杯	①16. 6 ②5.8△	杯部は内渦気味に立ち上がり、口縁端部でやや外反する。端部は面をもつ。脚部欠損。接合部に棒状工具痕あり。	(外) ハケメ後ヨコナデ。接合部ハケメ後ヘラミガキ。 (内) ヨコナデ。外面赤色塗影。	1mm以下の砂粒を含む	良	にぶい 褐色 赤色塗影
Po 3 1 3 7 3 9	第3主体 床面	土師器 高杯	①16. 8 ②12. 0 ④11. 0	外反50度に立ち上がる杯部で、端部は丸く納める。脚部は脚部でハの字形に開き、端部は面をもつ。円形の穿孔が不規則な間隔で5ヶ所あり。	(外) 杯部ハケメ後ヨコナデ、赤色塗影。脚柱部に若干のハケメ痕がこる。他ヨコナデ (内) 杯部ヨコナデ。脚部ハケメ、他、ヨコナデ、赤色塗影。脚柱部に絞り痕あり。	1mm程度の砂粒を含む	不良	橙色 赤色塗影

遺物番号 取上番号	出上 地點	器種類	法量	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調
Po 3 2 3 8	第3主体 床面	土師器 高杯	①18.0° ②5.4△	杯部は外傾し、端部でやや外反気味に伸びる壠部は丸く納める。脚部欠損。	(外) ハケメ後ヨコナデ、赤色塗彩。 (内) ヨコナデ後赤色塗彩。	1mm程度 砂粒を含む	不良	黄褐色 赤色塗彩
Po 3 3 7	第3主体 床面	土師器 高杯	②2.5* ④10.4△	ハの字形に開く脚部片。	(外) ヨコナデ後赤色塗彩。 (内) 剥離のため不明。	1mm程度 砂粒を含む	やや不良	にぶい 橙色 赤色塗彩
Po 3 4 4 0 4 1	第3主体 床面	土師器 高杯	③4.2 * ④11.0△	ハの字形に開く脚部片。	(外) ヨコナデ、端部にハケメ痕あり。 (内) 壁部ハケメ、他ヨコナデ。	1mm程度 砂粒を含む	良	にぶい 橙色 赤色塗彩
Po 3 5 3 6	第3主体 床面	土師器 鏡形器 台	①20.0 ②11.3 ④16.2	受部と脚部に明瞭な段をもつない。口縁端部・脚端部に面をもつ。	内外面ヨコナデ。	1mm程度 砂粒を含む	不良	橙色

挿表12. 新井南谷4号墳、出土土器観察表

遺物番号 取上番号	出上 地點	器種類	法量	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調
Po 3 6 1	墳頂平坦部	須恵器 杯蓋	①14.8 ②5.0	大井部はほぼ水平で、天井部と口縁部の境に段をもつ。口縁端部に弱い段をもつ。	(外) 天井部1/2以上右方向のハラケズリ。他ヨコナデ。 (内) ヨコナデ、天井部仕上げナデ。	1~3mm 程度の砂粒を含む	良	灰色

挿表13. 新井南谷5号墳、出土土器観察表

遺物番号 取上番号	出上 地點	器種類	法量	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調
Po 3 7 1 0 0	第1主体 床面南側	須恵器 杯身	①11.4 ②4.5	底部はほぼ水平で、口縁部は直立する。端部は段をなす。	(外) 底部中央部へラ切り未調整。他右方向へのハラケズリ。体部へ口縁部にかけてヨコナデ。	1~5mm 程度の砂粒を含む	良	青灰色
Po 3 8 1 0 2	第3主体 掘り形 肩部	須恵器 高杯	③9.7△ ④8.3	杯部は内湾しながら立ち上がる。口縁部欠損。脚部は壠部で段をなす。円形透かし3ヶ所あり。	(外) 杯部へラケズリ後ヨコナデ。脚部ヨコナデ。 (内) 杯部中央部仕上げナデ、他ヨコナデ。	1~4mm の砂粒を含む	良	褐色~青灰色

挿表14. 新井南谷3号墳、出土鉄器・豎櫛観察表

遺物番号 取上番号	出上 地點	種類	全長 (cm)	身	身先	身元	茎	備考				
				長さ	幅×厚さ	幅×厚さ	長さ×幅×厚さ					
F 1 0 8 5	第1主体 副室	刀子	10.0	6.6	1.3×0.2	1.5×0.2	3.5×1.4×0.25	片開。 フクラ切先。				
F 1 1 9 9	第1主体	刀子	8.2	5.4	0.8×0.2	1.2×0.2	2.7×1.6×0.1	刃部欠損。				
F 1 2 9 8	第1主体	刀子	7.8	5.3	1.2×0.2	1.5×0.3	2.5×0.95×0.3	片開。				
F 1 4 1 0 6	第4主体	鉄刺	43.4	33.5	2.7×0.5	3.2×0.5	9.9×1.3×0.4	目釘穴が2ヶ所あるが貫通しない。				
F 1 3 7 6	第3主体	箇先	最大長(cm)		最大幅(cm)		最大厚(cm)					
			6.0		8.0		0.3					
			形態上の特徴									
			刃部は直線。装着部は折り返し。									

K 1 7 4	第3主体	堅 梶	結縛部長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	備 考		
			1. 9	2. 1	0. 15	縛曲結筋式。18齒。結縛部漆のみ残存。 漆薄茶色。遺存状態不良。		
K 2 7 5	第3主体	堅 梶	2. 4*	1. 8△	0. 3	縛曲結筋式。24齒。結縛部下部に横方向の竹ひご状の痕跡。結縛部漆のみ残存。漆黒色。 遺存状態不良。		
K 3 1 0 8	第3主体	堅 梶	2. 3*	2. 5	0. 3	縛曲結筋式。24齒。結縛部下部に横方向の竹ひご状の痕跡。結縛部漆のみ残存。 漆黒色。遺存状態不良。		

挿表15. 新井南谷5号墳、第3主体出土鉄器観察表

遺物番号 取上番号	出 土 地 点	種 類	全長 (cm)	鎌身部			頭部	竪被	茎	備 考
				平面	断面	長さ×幅×厚さ		長さ×幅×厚さ	長さ×幅×厚さ	
F 1 5 1 0 3	墓壇内 南側	鉄鎌	14.1 △	柳葉	片丸	7.9△×2.7△ ×0.25	7.3	3.9△×0.6△ ×0.4	3.4△×0.4△ ×0.3	鎌身部～竪被にかけて 漆？付着。 茎部は木質の上に樹皮を巻く。
F 1 6 1 0 4	墓壇内 南側	鉄鎌	11.6 △	柳葉	片丸	6.1△×1.7△ ×0.3	6.7	4.5△×0.5△ ×0.3	2.2△×0.6△ ×0.4	鎌身部～竪被にかけて 漆？付着。 台形闘。 木質根。
F 1 7 1 0 1	床面	刀子	8.4△	身	身 先	身 元		茎	備 考	
				長さ	幅×厚さ	幅×厚さ		長さ×幅×厚さ		
				6.9 △		1.2 ×0.3		1.5 △×1.2 ×0.35		切先・茎部欠損。 茎部に樹皮の痕跡。

挿表16. 新井南谷地区、遺構外出土土器観察表

遺物番号 取上番号	出 土 地 点	器種 種 類	法 量	形態上 の 特徴	手法上 の 特徴	胎土	焼成	色 調
Po 3 9 6	7号墳付 近	土師器 甌	①13.0* ②3.4 △	複合口縁部片。ほぼ直立し、端部は丸く納める。	内外面ヨコナデ。	密。角閃石を少量含む	良	浅黄色 ～黒褐色
Po 4 0 1 3	9号墳付 近	土師器 甌	①15.8* ②4.2 △	内溝する口縁部片。端部はやや先細り気味に納める。	内外面ヨコナデ。	1～3mm程度の砂粒を含む	良	にぶい 黄褐色 ～褐灰色
Po 4 1 3	9号墳付 近	土師器 皿	③3.6 ②1.3 △	口縁部を欠く。高台は全面で接地させる。	(外) 底部回転糸切り 他ヨコナデ。 (内) ヨコナデ。	密。角閃石を少量含む	良	にぶい 黄褐色
Po 4 2 4	10号墳 付近	土師器 皿	③7.4 ②1.3 △	口縁部を欠く。高台は全面で接地させる。	(外) 底部回転糸切り 他ヨコナデ。 (内) ヨコナデ。	密。角閃石を少量含む	良	浅黄色 ～黒褐色
Po 4 3 8	A地区 工事中 発見	須恵器 杯身	①10.6* ②4.6 △	底部はほぼ平坦、口縁部の立上がりはやや内傾し、端部は丸く納まる。	(外) 底部へラ切り未調整。工具痕あり。他ヨコナデ。 (内) 底部に若干、同心円文痕あり。他ヨコナデ。	1～4mm程度の砂粒を含む	良	オリー ブ灰～ 暗オリ ーブ灰 色

揮表17. 新井南谷3号墳、出土玉製品観察表

遺物番号 取上番号	出 土 地 点	種類	材質	法 量 (cm)				色 調	備 考
				長さ	幅	穿孔幅	重 量 (g)		
J1 86	第 1 体	勾玉	水 晶	2. 9 6	1. 0	0.23~0.18	8. 4 9	透 明	片面穿孔
J2 87		勾玉	蛇紋岩	2. 0	0. 4 3	0.2~0.17	1. 3 5	淡水色~ 濃緑色	片面穿孔。軟 石材風化状態
J3 88		勾玉	滑 石	1. 7	0. 4 6	0.19	0. 8	白~淡 緑色	片面穿孔。軟
J4 89		勾玉	碧玉かアルビタイト の風化したものか?	1. 7	0. 4 4	0.19~0.15	0. 7 4	白色	両面穿孔
J5 95		管 玉	碧 玉	3. 0 3	0. 8 5	0.40~0.16	3. 5 8	濃緑色	両面穿孔
J6 91		管 玉	碧玉	2. 9 6	0. 9 4	0.38~0.2	4. 6 2	濃緑色	両面穿孔
J7 93		管 玉	碧 玉	3. 1 7	0. 8	0.31~0.16	3. 4 3	淡水色	両面穿孔
J8 97		管 玉	碧玉	3. 1 2	0. 7 2	0.34	2. 5 6	濃緑色	両面穿孔
J9 90		管 玉	碧 玉	3. 0	0. 5 5	0.32~0.17	1. 2 9	濃緑色	両面穿孔
J10 92		管 玉	滑 石	2. 7	0. 4 7	0.25~0.15	0. 9 8	灰~淡 緑色	両面穿孔
J11 96	第 2 体	管 玉	碧 玉	2. 3 2	0. 5	0.34~0.21	0. 8 5	濃緑色	両面穿孔
J12 94		管 玉	硅質綠色凝灰岩	1. 4 3	0. 4 9	0.24	0. 4 2	淡黃綠 色	両面穿孔
J13 17		管 玉	淡緑色凝灰岩	2. 3 6	0. 3 8	0.15~0.14	0. 3 5	淡水色	両面穿孔
J14 27		管 玉	碧 玉	2. 4 2	0. 3 9	0.16	0. 3 4	淡水色	両面穿孔
J15 16		管 玉	風化した碧玉	2. 0 2	0. 4	0.16	0. 2 9	淡水色	両面穿孔
J16 18		管 玉	風化した緑色凝灰岩	1. 6 9	0. 4	0.16	0. 2 9	淡水色	両面穿孔
J17 14		管 玉	硅質綠色凝灰岩の風 化したもの	1. 8 7	0. 3	0.15	0. 2 8	淡水色	両面穿孔
J18 24		管 玉	碧玉(光沢あり)	1. 7 3	0. 3 9	0.15	0. 2 7	淡水色	両面穿孔
J19 23		管 玉	緑色凝灰岩	1. 8 2	0. 4	0.16	0. 3	淡水色	両面穿孔
J20 22		管 玉	緑色凝灰岩	1. 6 4	0. 3 7	0.14	0. 2 1	淡水色	両面穿孔
J21 21	第 3 体	管 玉	緑色凝灰岩	1. 5 8	0. 3 9	0.18	0. 2 2	淡水色	両面穿孔
J22 25		管 玉	緑色凝灰岩	1. 8 8	0. 3 6	0.14	0. 2 4	淡水色	両面穿孔
J23 19		管 玉	硅質綠色凝灰岩?	1. 4 △	0. 3 8	0.15	0. 2 1	淡水色	両面穿孔
J24 15		管 玉	碧 玉	1. 3 9	0. 3 8	0.14	0. 1 9	淡水色	両面穿孔
J25 26		管 玉	绿色凝灰岩	0. 9 △	0. 3 9	0.15	0. 1	淡水色	両面穿孔
J26 20		管 玉	硅質綠色凝灰岩	0. 8 △	0. 3 8	0.13	0. 0 9	淡水色	?
J27 66		勾玉	蛇紋岩	3. 6 2	1. 3 4	0.27~0.14	9. 5 1	黃白~ 緑色	両面穿孔。軟 石材風化状態
J28 67		勾玉	水 晶	3. 5	1. 0	0.25~0.15	8. 4	透 明	片面穿孔
J29 45		勾玉	翡翠	1. 7 4	0. 7 5	0.3~0.17	2. 6 4	淡綠~ 白色	両面穿孔
J30 42	第 4 体	勾玉	翡翠	1. 5 2	0. 5 1	0.23~0.12	1. 2 2	透綠色	片面穿孔
J31 51		勾玉	翡翠	1. 5 2	0. 6 8	0.37~0.12	1. 7 7	淡緑色	両面穿孔
J32 59		小 玉	ガラス	0. 5 9	0. 8 4	0.2	0. 5 4	淡緑色	
J33 55		小 玉	ガラス	0. 7 4	0. 7 6	0.24	0. 5 3	淡緑色	
J34 57		小 玉	ガラス	0. 5	0. 7 2	0.2	0. 4 6	淡緑色	
J35 58		小 玉	ガラス	0. 4	0. 5 5	0.21	0. 1 5	淡褐色	
J36 56		小 玉	ガラス	0. 3 6	0. 4 8	0.2	0. 0 9	淡褐色	
J37 81		小 玉	ガラス	0. 3 3	0. 4 2	0.15	0. 0 7	淡褐色	
J38 80		小 玉	ガラス	0. 4 2	0. 3 5	0.1	0. 0 7	淡褐色	
J39 60		管 玉	碧玉	4. 5 5	0. 7 6	0.41~0.18	4. 9	透緑色	両面穿孔
J40 78	第 5 体	管 玉	翡翠	3. 9 5	0. 6 7	0.36~0.1	3. 1 6	淡緑色	両面穿孔
J41 83		管 玉	翡翠	3. 6 5	0. 8 9	0.37~0.21	3. 5 2	淡緑色	両面穿孔
J42 63		管 玉	碧玉	3. 4 5	0. 7	0.37~0.13	3. 6 4	透緑色	両面穿孔
J43 69		管 玉	碧玉	3. 4	0. 8 6	0.27~0.16	4. 3 2	灰色	両面穿孔
J44 72		管 玉	淡緑色碧玉	3. 0	0. 8	0.24~0.17	3. 2 2	淡水色	両面穿孔
J45 54		管 玉	碧 玉	3. 1 4	0. 6	0.36~0.16	2. 1 9	淡緑色	両面穿孔
J46 53		管 玉	碧玉。(網状斑点状、 シリケート細脈)	3. 1	0. 7 8	0.38~0.15	1. 7	乳白~ 淡緑色	両面穿孔
J47 44		管 玉	碧玉(良質)	3. 0 8	0. 7 7	0.25~0.15	3. 0 7	淡水色	両面穿孔
J48 49		管 玉	碧玉	3. 0 8	0. 5	0.25~0.19	1. 0 5	淡水色	両面穿孔
J49 50		管 玉	碧玉(良質)	2. 7 2	0. 4	0.22~0.18	0. 5 3	淡水色	両面穿孔
J50 79	第 6 体	管 玉	碧玉(良質)	2. 5	0. 4	0.2~0.13	0. 6 2	淡水色	両面穿孔
J51 64		管 玉	碧玉	3. 0	1. 0	0.23	5. 8 1	淡水色	両面穿孔
J52 65		管 玉	緑色凝灰岩	2. 3 6	1. 0 2	0.32~0.21	3. 3 9	淡緑色	両面穿孔
J53 68		管 玉	碧玉	2. 1 8	0. 7 8	0.31~0.14	2. 2 8	淡緑色	両面穿孔
J54 61		管 玉	碧玉	2. 4 4	0. 8 8	0.42~0.15	3. 4 5	淡緑色	両面穿孔
J55 62		管 玉	碧玉	2. 2 3	0. 6 2	0.25~0.08	1. 4 8	淡緑色	両面穿孔

遺物番号	出土地点	種類	材質	法量(cm)			色調	備考
				長さ	幅	穿孔幅		
J56 52	第	管玉	緑色凝灰岩	1. 9 2	0. 4	0.18	0. 3 9	淡水色 両面穿孔
J57 46		管玉	碧玉	1. 7 9	0. 5	0.23~0.19	0. 7 2	淡水色 片面穿孔
J58 73		管玉	碧玉	1. 8 4	0. 5	0.2	0. 3 2	淡水色 両面穿孔
J59 48		管玉	碧玉	1. 7 9	0. 4 2	0.27~0.17	0. 5 1	淡綠色 片面穿孔
J60 43	3	管玉	碧玉	1. 9	0. 4 1	0.19	0. 4 4	淡水色 片面穿孔
J61 70		管玉	緑色凝灰岩	1. 7 2	0. 3 9	0.17	0. 2 1	淡水色 片面穿孔軟。
J62 47		管玉	碧玉(良質)	1. 1 9	0. 5 1	0.21~0.12	0. 5	淡水~ 淡水綠 色 片面穿孔
J63 77	主體	管玉	碧玉(良質、光沢)	1. 3 3	0. 4 2	0.2~0.15	0. 3 6	淡水 鮮色 片面穿孔
J64 82		管玉	碧玉	1. 5 2	0. 5 8	0.22~0.12	0. 8 6	淡水色 片面穿孔
J65 71		管玉	碧玉(良質)	1. 1 6	0. 5	0.19~0.12	0. 4 7	濃灰色 両面穿孔

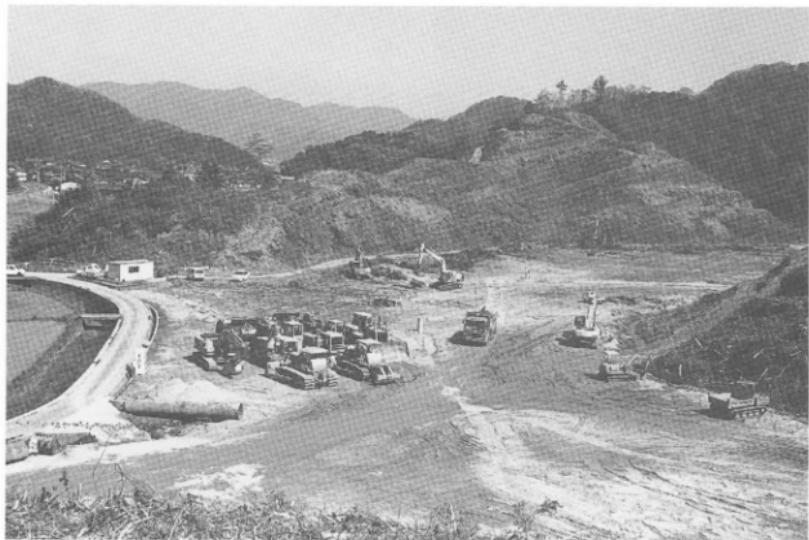
報 告 書 抄 錄

ふりがな	にいみしまだにいせきはくつちょうさほうこくしょ
書名	新井三嶋谷遺跡発掘調査報告書
副書名	
卷次	
シリーズ名	岩美町文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第24集
編著者名	中野 知照、松本 美佐子
編集機関	岩美町教育委員会
所在地	〒681-0003 岩美県岩美郡岩美町浦富675番地1
発行年月日	2001.8.20

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村・遺跡番号	北緯 。〃。〃	東經 。〃。〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
新井三嶋谷遺跡	鳥取県岩美郡岩美町新井字長道路418-1、三嶋谷419-2、南谷420-15		35° 33' 38"	134° 20' 19"	1999.04.01 ~ 1999.08.31	1000m ²	岩美町立南小学校建設工事に伴う緊急発掘調査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新井三嶋谷遺跡	(新井三嶋谷地区) 弥生墳丘墓 古墳	弥生時代 古墳時代	貼石墳丘墓 墳丘墓 木棺墓 横穴式石室 ピット群 石器製作跡	弥生土器：器台・高杯・壺 須恵器：樽型甕 甕・杯蓋・杯身・直口壺・高杯・皿・壺 土師器：高杯・甕 石材	1号墳丘墓は、弥生時代後期初頭の築造で、その規模は当時としては最大級の規模を持つものであることが知られた。貼石には、石列や目地を通して部分が認められた。蓋板も大きく、第1主体は2棺同時埋葬である。 新井三嶋谷3号墳の墳丘盛土中より、ベンガラを充填した樽型甕が検出された。
	(新井南谷地区) 古墳 城砦跡	古墳時代 室町時代	木棺墓 箱式石棺 副室付石棺 配石墓 曲輪 帶曲輪 通路状遺構	土師器：高杯・壺 ・甕 須恵器：杯蓋・杯身・高杯脚部 玉製品：管玉・勾玉 鉄製品：鉄劍・鉄鎌・刀子・鉄斧 装身具：豎櫛	新井南谷3号墳第1主体は4世紀後半での副室を有する組み合わせ式石棺であり、県内では初見である。新井南谷5号墳第1主体・2主体は蓋板の四辺に石棺を配した配石墓であることが確認された。 城砦跡は、古墳の墳丘を開削して造られていたが、顯著な遺構は検出されなかった。

圖 版 編

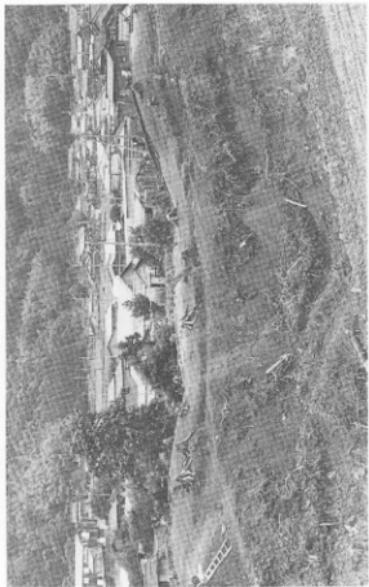


1. 新井三鷗谷地区全景（調査前、西より）

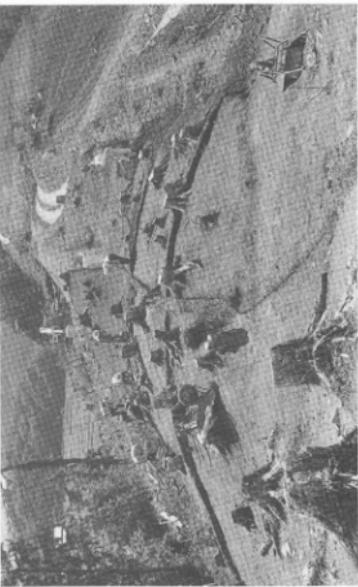


2. 新井三鷗谷1・2号墳丘墓全景（調査前、南東より）

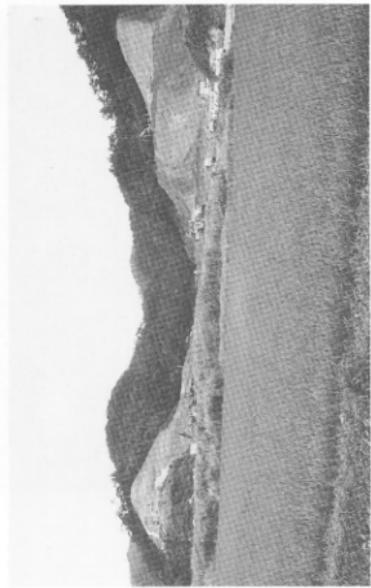
図版 2



2. 新井三鷲谷地区（南西より）



4. 新井三鷲谷地区（北西より）



1. 新井三鷲谷遺跡全景（北西より）



3. 新井三鷲谷地区作業風景（北西より）

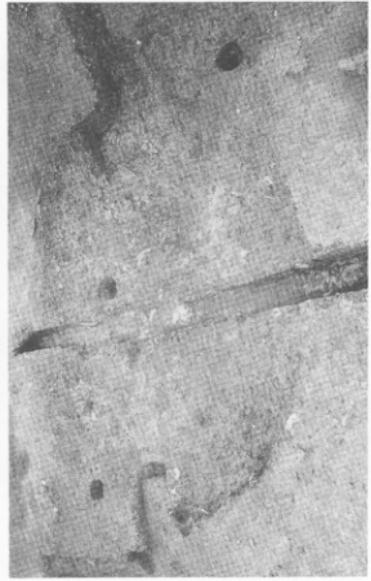
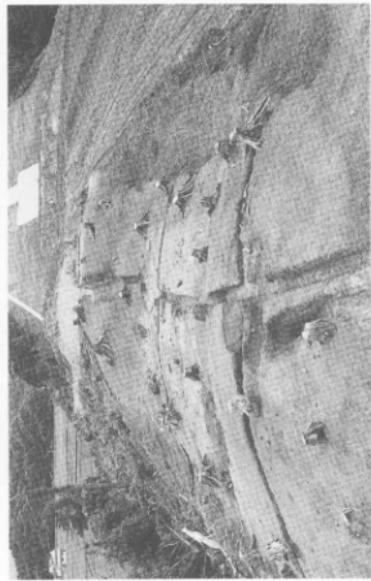


1. 新井三鷗谷 1号墳丘墓（東より）



2. 新井三鷗谷地区、J S K -01・木棺墓・ビット群（南東より）

図版 4





1. 新井三鶴谷地区、SK-02 土層断面検出状況（南西より）



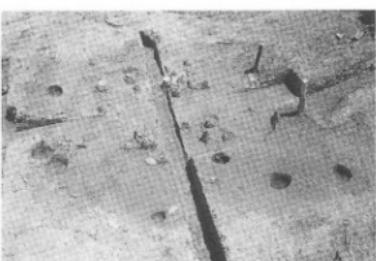
2. 新井三鶴谷地区、不明遺構群検出状況（南東より）



3. 新井三鶴谷地区、SK-01 完掘状況（北より）



4. 新井三鶴谷地区、JSK-01 遺物出土状況（北東より）



5. 新井三鶴谷地区、JSK-01 遺物出土状況（南西より）



6. 新井三鶴谷地区、JSK-01 遺物出土状況（北東より）



7. 新井三鶴谷地区、JSK-01 焼土検出状況（北西より）

図版 6



1. 新井三鶴谷 2 号坑全景 (南東より)

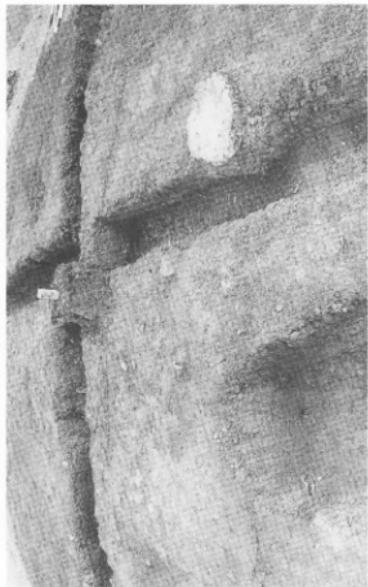


2. 新井三鶴谷 2 号坑全景 (北西より)



3. 新井三鶴谷 2 号坑全景 (北西より)

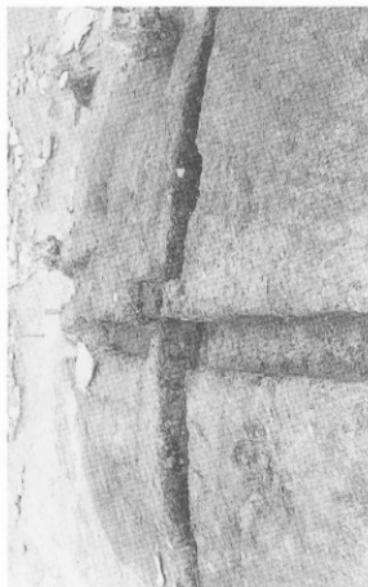
4. 新井三鶴谷 2 号坑全景 (北西より)



2. 新井三鷗谷 2号坑、遺構面検出状況（北西より）



4. 新井三鷗谷 2号坑、第1主体・第2主体完掘状況（南東より）



1. 新井三鷗谷 2号坑、遺構面検出状況（南東より）



3. 新井三鷗谷 2号坑、遺構面検出状況（南西より）

図版 8



1. 新井三鷗谷 2 号墳、第 1 主体埋土堆積状況（南西より）



2. 新井三鷗谷 2 号墳、第 1 主体完掘状況（南西より）



3. 新井三鷗谷 2 号墳、第 1 主体完掘状況（南西より）



4. 新井三鷗谷 2 号墳、第 1 主体完掘状況（南東より）



5. 新井三鷗谷 2 号墳、第 2 主体完掘状況（南東より）



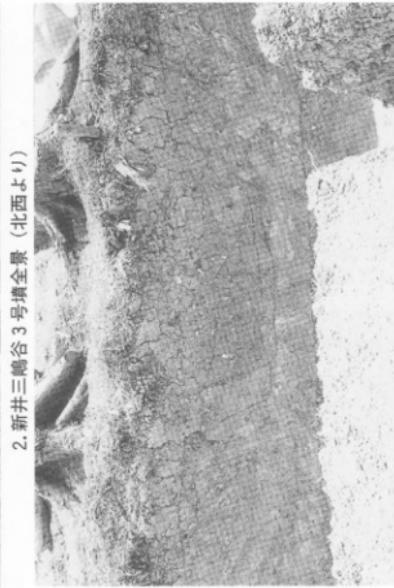
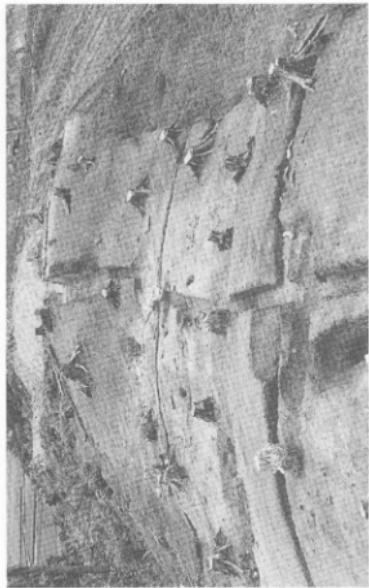
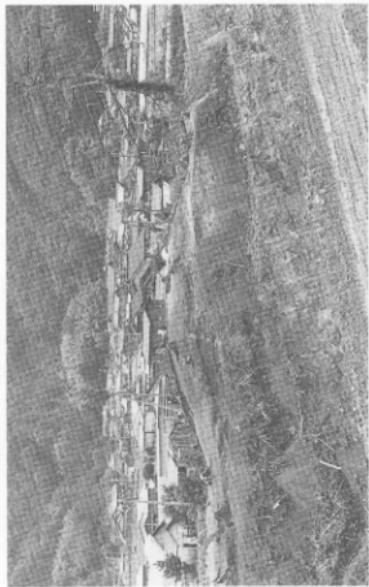
6. 新井三鷗谷 2 号墳、第 2 主体完掘状況（東より）



7. 新井三鷗谷 2 号墳、第 2 主体遺物出土状況（東より）



8. 新井三鷗谷 2 号墳、第 2 主体遺物出土状況（西より）



図版10



1. 新井三鶴谷 3号墳、第1主体遺構面検出状況（南東より）



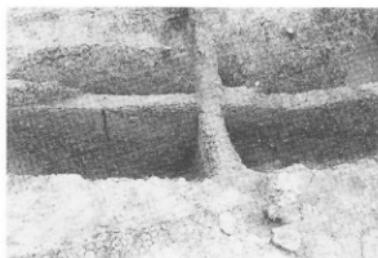
2. 新井三鶴谷 3号墳、第1主体遺構面検出状況（南西より）



3. 新井三鶴谷 3号墳盛土中、櫛型埴出土状況（北西より）



4. 新井三鶴谷 3号墳、第1主体埋土土層断面検出状況（南西より）



5. 新井三鶴谷 3号墳、第1主体埋土土層断面検出状況（南東より）



6. 新井三鶴谷 3号墳、第1主体遺物出土状況（北西より）



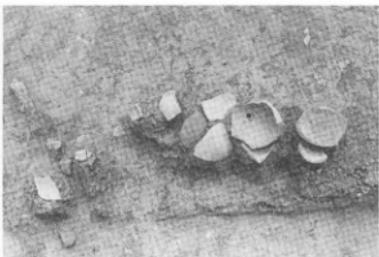
7. 新井三鶴谷 3号墳、第1主体完掘状況（南東より）



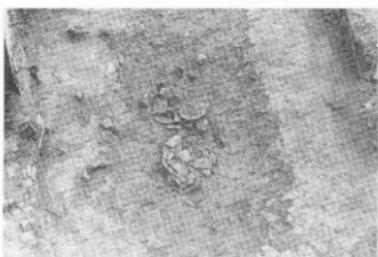
8. 新井三鶴谷 3号墳、第1主体完掘状況（北東より）



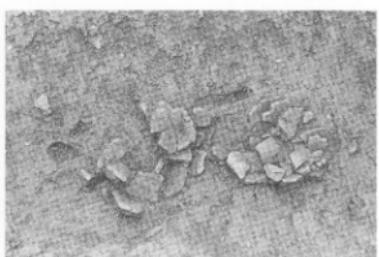
1. 新井三鶴谷 3号墳、第1主体上面遺物出土状況（北東より）



2. 新井三鶴谷 3号墳、第1主体上面遺物出土状況（北西より）



3. 新井三鶴谷 3号墳、第1主体上面遺物出土状況（南西より）



4. 新井三鶴谷 3号墳、第1主体上面遺物出土状況（北西より）



5. 新井三鶴谷 3号墳周溝内、遺物出土状況（北東より）



6. 新井三鶴谷 3号墳周溝内、遺物出土状況（南東より）



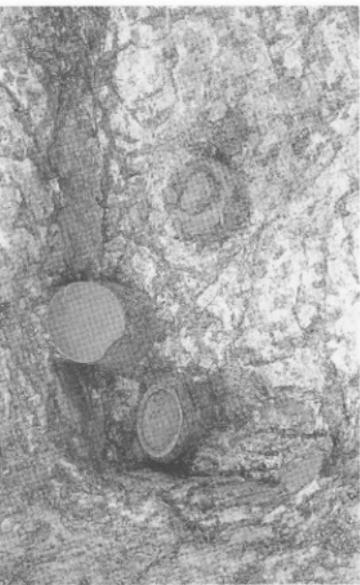
7. 新井三鶴谷 3号墳、第1主体床面遺物出土状況（南東より）



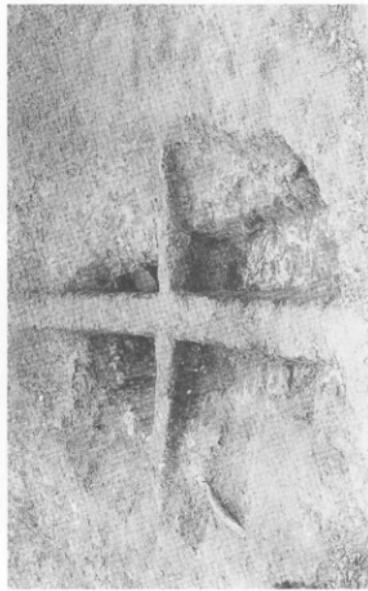
8. 新井三鶴谷 3号墳盛土中、櫛型穂出土状況（北西より）



1. 新井三鶴谷地区、木棺墓振り下げ状況（北西より）



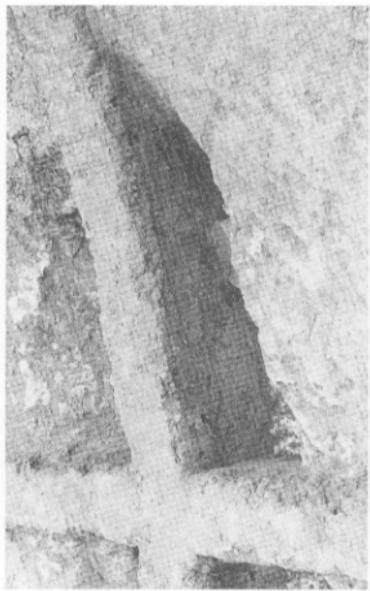
2. 新井三鶴谷地区、木棺墓遺物出土状況（東より）



3. 新井三鶴谷地区、木棺墓完掘状況（東より）



4. 新井三鶴谷地区、木棺墓遺物出土状況（東より）



1. 新井三鷲谷地区、木棺墓土層断面検出状況（南西より）



2. 新井三鷲谷地区、木棺墓土層断面検出状況（南東より）



3. 新井三鷲谷地区、木棺墓小口南側検出状況（北西より）



4. 新井三鷲谷地区、木棺墓小口北側検出状況（南東より）



1. 新井南谷地区全景（表土除去後、北より）



2. 新井南谷地区より北東を望む

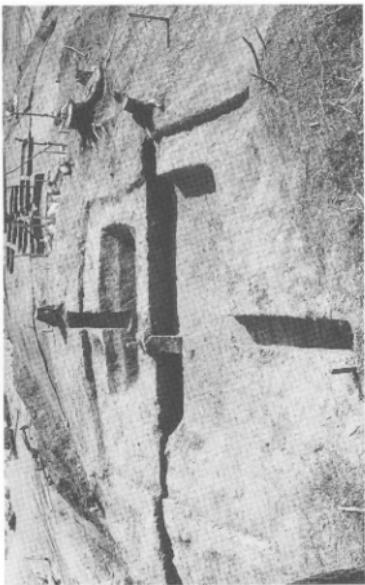


1. 新井南谷地区全景（東より）

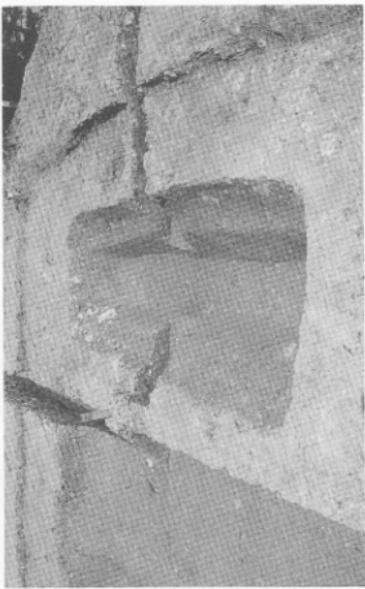


2. 新井南谷地区全景（東より）

図版16



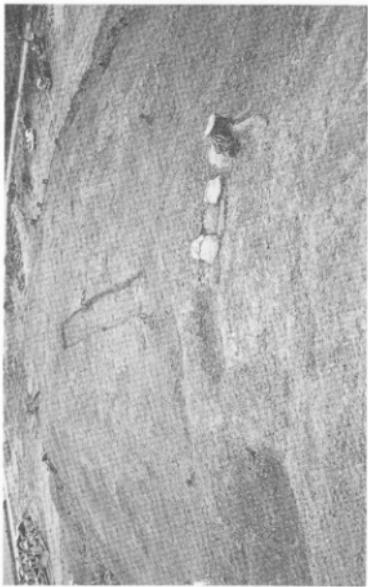
1. 新井南谷地区、表土除去後（南西より）



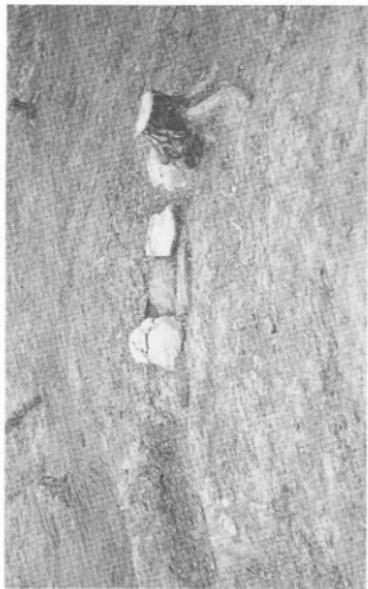
2. 新井南谷 1号墳、完掘状況（南西より）



3. 新井南谷 1号墳、第2主体完掘状況（南東より）



1. 新井南谷 2号墳、第1主体検出状況（南西より）



2. 新井南谷 2号墳、第1主体検出状況（南西より）

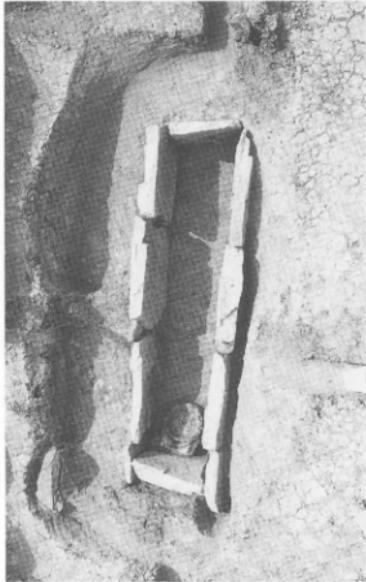


3. 新井南谷 2号墳、第1主体蓋石検出状況（北東より）



4. 新井南谷 2号墳、第1主体蓋石検出状況（北東より）

図版18



1. 新井南谷 2号墳、第1主体石室検出状況（北西より）



2. 新井南谷 2号墳、第1主体石室検出状況（東より）



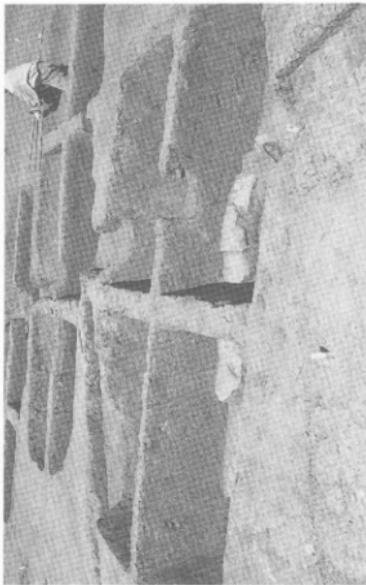
3. 新井南谷 2号墳、第1主体土器枕検出状況（北西より）



4. 新井南谷 2号墳、石材抜き取り後（東より）



1.新井南谷3号墳、試掘トレンチ（南西より）



3.新井南谷3号墳、第1主体土層断面検出状況（南西より）

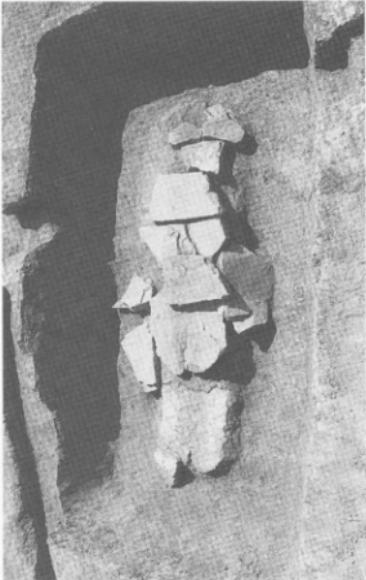


2.新井南谷3号墳、検出状況（南西より）

4.新井南谷3号墳、完掘状況（北東より）



1. 新井南谷 3号墳、第1主体土層断面検出状況（南西より）



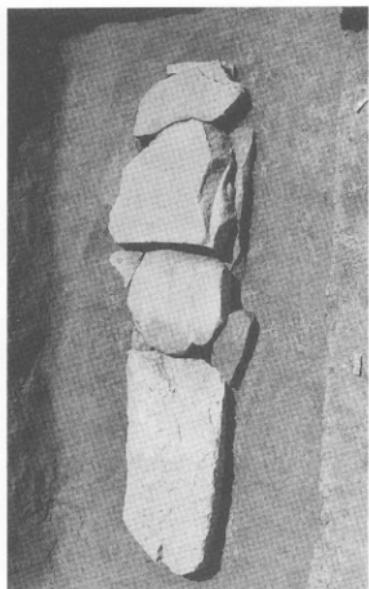
2. 新井南谷 3号墳、第1主体土層断面検出状況（南西より）



3. 新井南谷 3号墳、第1主体土層断面検出状況（南東より）



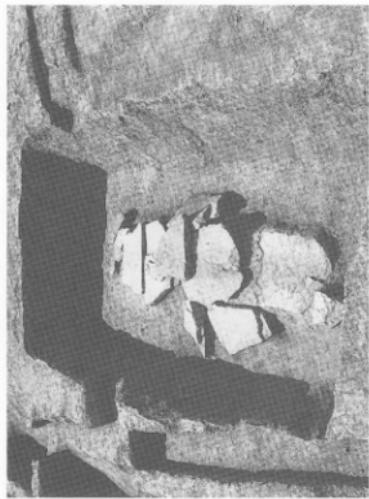
4. 新井南谷 3号墳、第1主体土層断面検出状況（南西より）



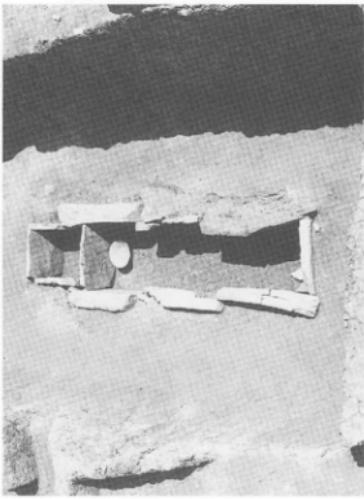
2. 新井南谷3号墳、第1主体蓋石検出状況（西より）



4. 新井南谷3号墳、第1主体蓋石抜き取り後（北西より）



1. 新井南谷3号墳、第1主体蓋石検出状況（北西より）



3. 新井南谷3号墳、第1主体蓋石除去後（北西より）

図版22



1. 新井南谷 3号墳、第1主体石棺蓋石検出状況（東より）



2. 新井南谷 3号墳、第1主体石棺蓋石検出状況（東より）



3. 新井南谷 3号墳、第1主体石棺蓋石検出状況（北東より）



4. 新井南谷 3号墳、第1主体石棺蓋石検出状況（北西より）



5. 新井南谷 3号墳、第1主体石棺蓋石検出状況（北東より）



6. 新井南谷 3号墳、第1主体石棺検出状況（北東より）



7. 新井南谷 3号墳、第1主体石棺検出状況（西より）



8. 新井南谷 3号墳、第1主体石棺検出状況（南東より）



1.新井南谷3号墳、第1主体石枕検出状況（南西より）



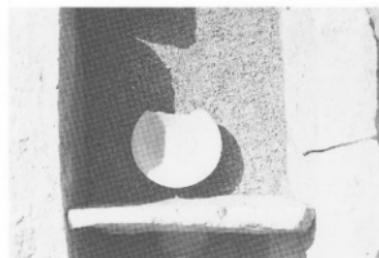
2.新井南谷3号墳、第1主体石枕検出状況（南より）



3.新井南谷3号墳、第1主体石枕検出状況（南東より）



4.新井南谷3号墳、第1主体土器枕検出状況（北西より）



5.新井南谷3号墳、第1主体土器枕検出状況（南東より）



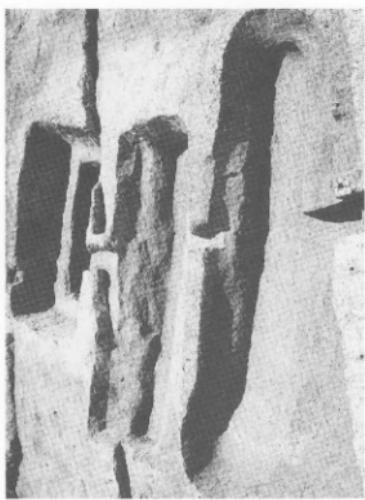
6.新井南谷3号墳、第1主体副室内遺物出土状況（南東より）



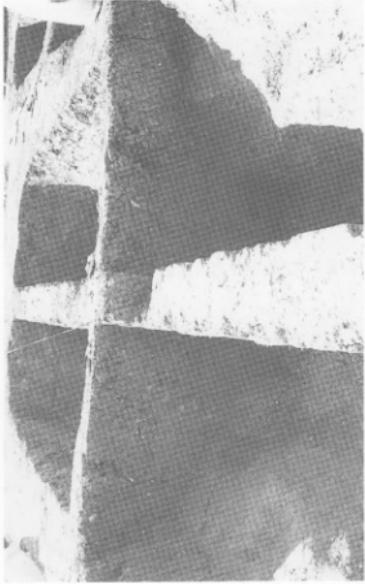
7.新井南谷3号墳、第1主体石材抜き取り痕（南東より）



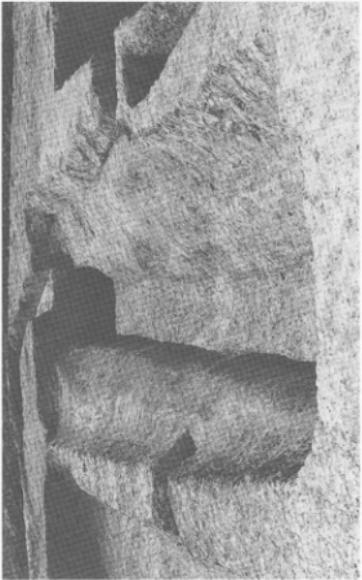
8.新井南谷3号墳、第1主体石材抜き取り後（北西より）



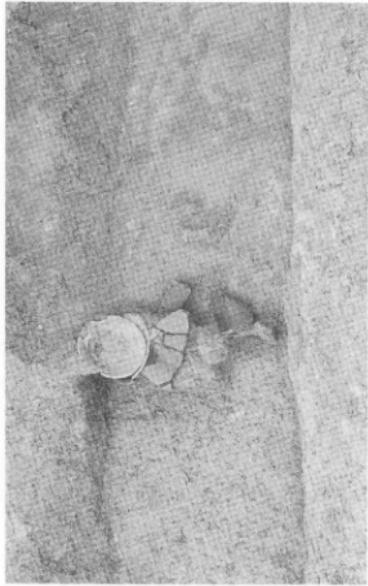
1. 新井南谷 3号墳、完掘状況（北東より）



2. 新井南谷 3号墳、第2主体土層断面検出状況（南東より）



3. 新井南谷 3号墳、第2主体完掘状況（北西より）



2. 新井南谷 3号墳、第2主体遺物出土状況（北東より）



4. 新井南谷 3号墳、第2主体遺物出土状況（北西より）



1. 新井南谷 3号墳、第2主体遺物出土状況（北西より）



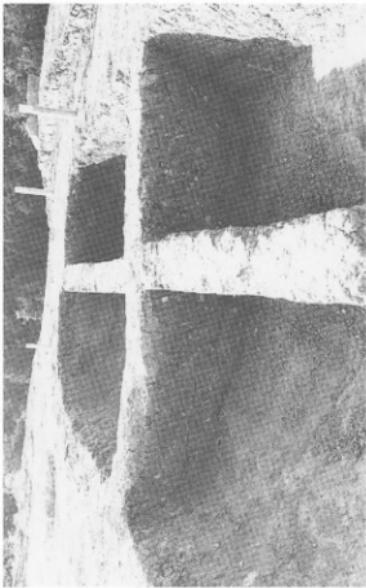
3. 新井南谷 3号墳、第2主体遺物出土状況（北西より）



1. 新井南谷 3号墳、第3主体土層断面検出状況（南東より）



2. 新井南谷 3号墳、第3主体土器枕検出状況（北西より）



3. 新井南谷 3号墳、第4主体石枕検出状況（南東より）



4. 新井南谷 3号墳、第3主体土器枕検出状況（東より）



1. 新井南谷 3号墳、第3主体遺物出土状況（東より）



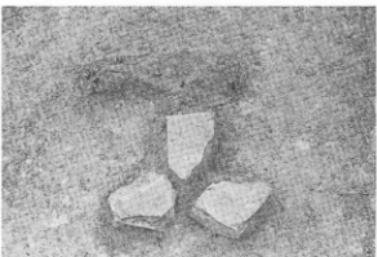
2. 新井南谷 3号墳、第3主体土器枕出土状況（北西より）



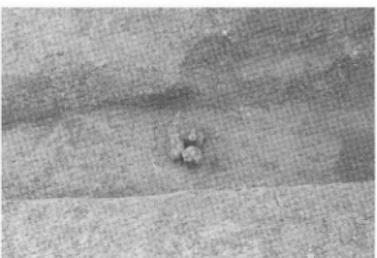
3. 新井南谷 3号墳、第3主体鉤先出土状況（北西より）



4. 新井南谷 3号墳、第4主体鉄劍・石枕出土状況（東より）



5. 新井南谷 3号墳、第4主体鉄劍・石枕出土状況（北西より）



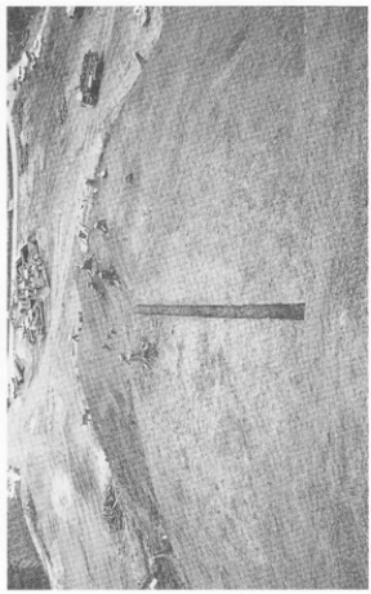
6. 新井南谷 3号墳、第2主体土器枕・石材出土状況（南より）



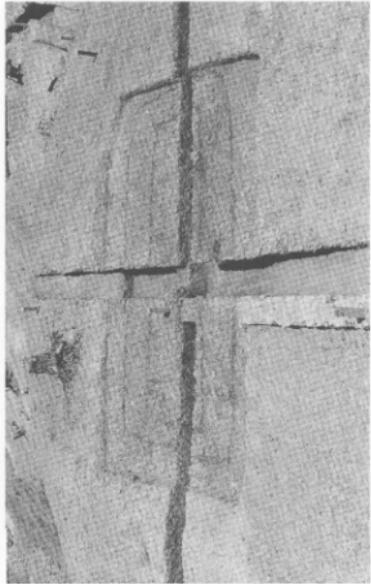
7. 新井南谷 3号墳、第2主体土器枕・石材出土状況（南東より）



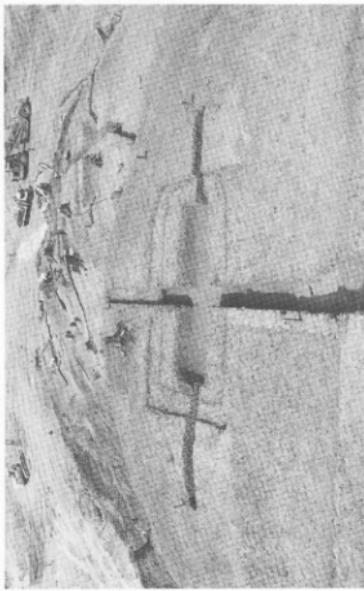
8. 新井南谷 3号墳、第3主体完掘状況（南東より）



1. 新井南谷 4 号墳、検出状況 (南西より)



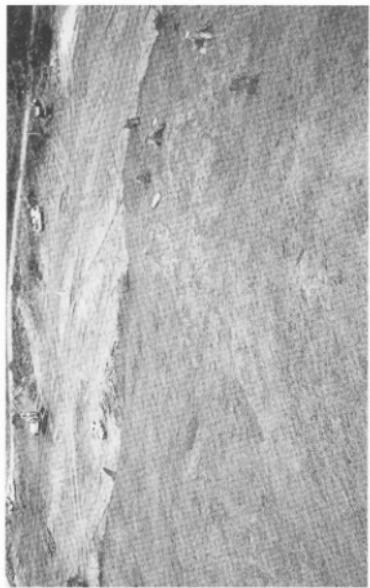
2. 新井南谷 4 号墳、第 1 主体検出状況 (南西より)



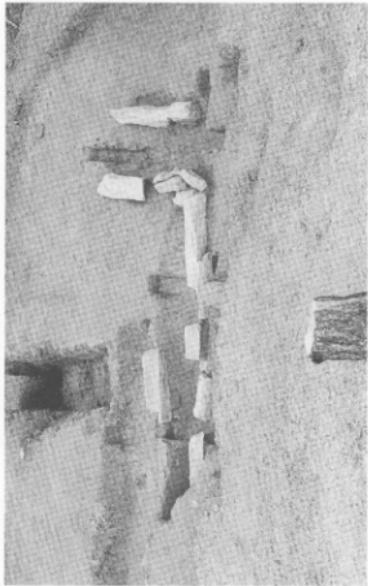
3. 新井南谷 4 号墳、第 1 主体検出状況 (南西より)



1. 新井南谷5号墳、表土除去後（西より）



2. 新井南谷5号墳、表土除去後（西より）



3. 新井南谷5号墳、第1主体～第3主体検出状況（南西より）



4. 新井南谷5号墳、第1主体～第3主体完掘状況（北東より）

図版30



1. 新井南谷 5 号墳、第 1 主体完掘状況（南西より）



2. 新井南谷 5 号墳、第 2 主体完掘状況（北東より）



3. 新井南谷 5 号墳、第 1 主体石材検出状況（北西より）



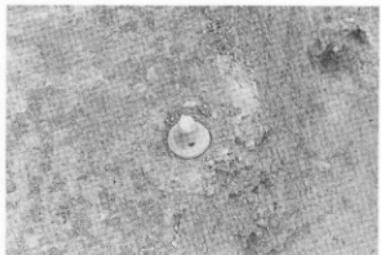
4. 新井南谷 5 号墳、第 3 主体完掘状況（北西より）



5. 新井南谷 5 号墳、第 1 主体・第 3 主体完掘状況（北西より）



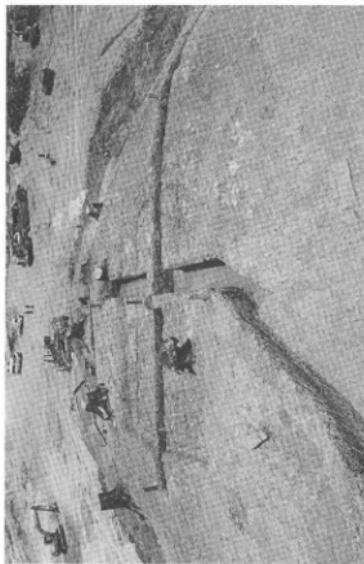
6. 新井南谷 5 号墳、第 3 主体鉄諺出土状況（北東より）



7. 新井南谷 5 号墳、第 3 主体須恵器出土状況（北西より）



1.新井南谷 6号墳、表土除去後（南東より）



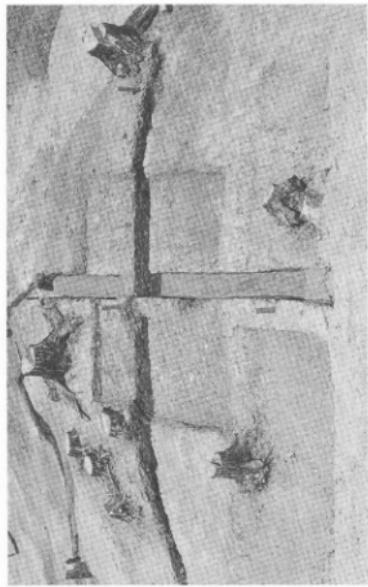
2.新井南谷 6号墳、第1主体検出状況（南東より）



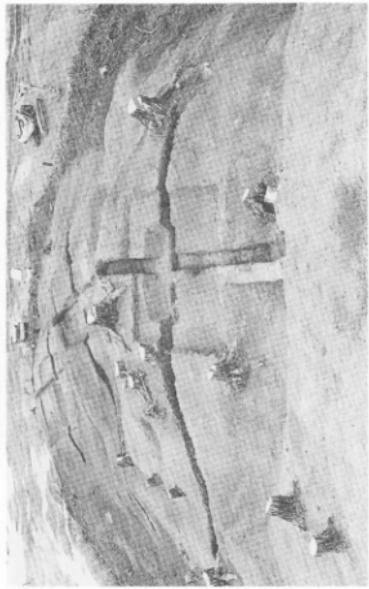
3.新井南谷 6号墳、第1主体完掘状況（西より）



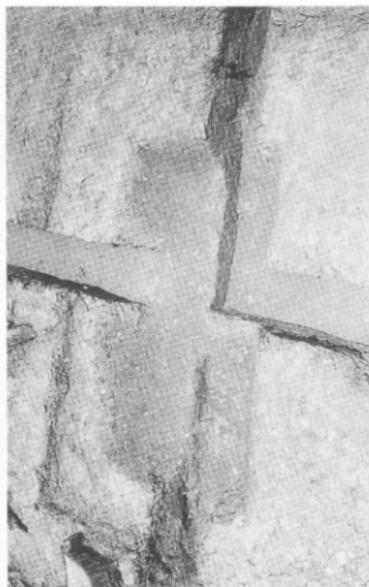
1. 新井南谷 7号墳、表土除去後（南西より）



2. 新井南谷 7号墳、第1主体検出状況（南西より）



3. 新井南谷 7号墳、第1主体完掘状況（南西より）



4. 新井南谷 7号墳、第1主体完掘状況（南西より）



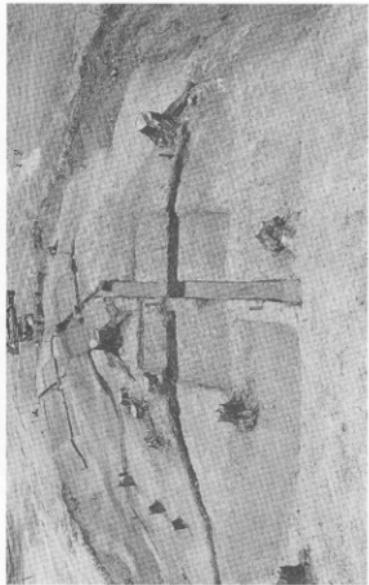
1. 新井南谷6～9号墳、表土除去後（南西より）



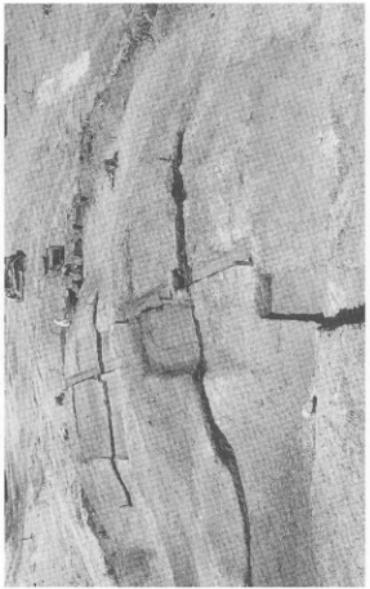
2. 新井南谷8号墳、表土除去後（南西より）



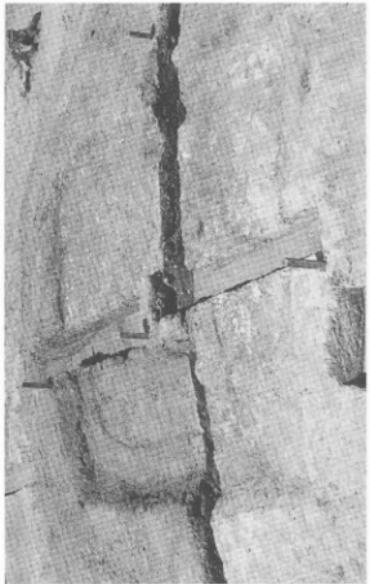
3. 新井南谷7号墳、第1主体検出状況（南西より）



4. 新井南谷10号墳、周溝検出状況（西より）



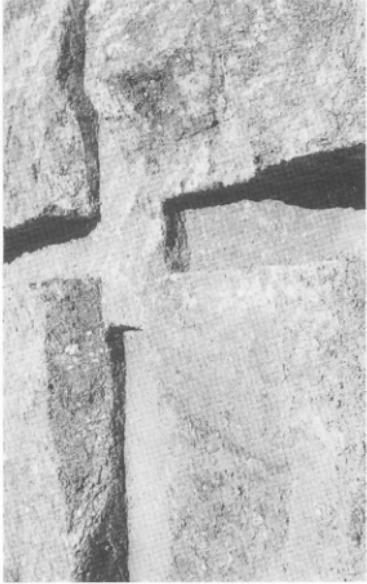
1. 新井南谷 8号墳、第1主体検出状況（南西より）



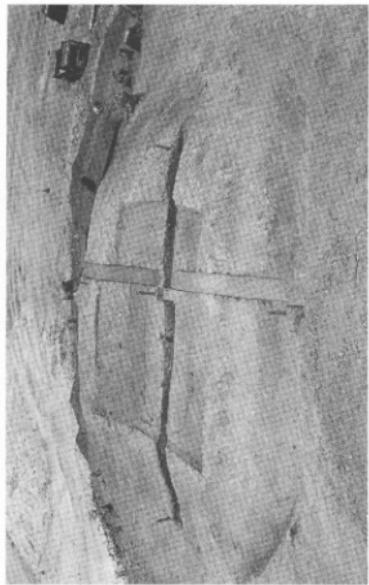
2. 新井南谷 8号墳、第1主体検出状況（南西より）



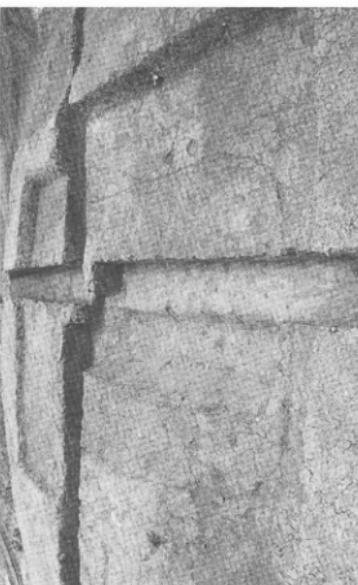
3. 新井南谷 8号墳、第1主体完掘状況（南西より）



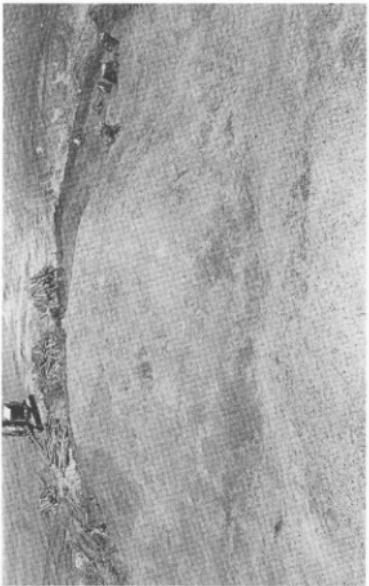
4. 新井南谷 8号墳、第1主体完掘状況（西より）



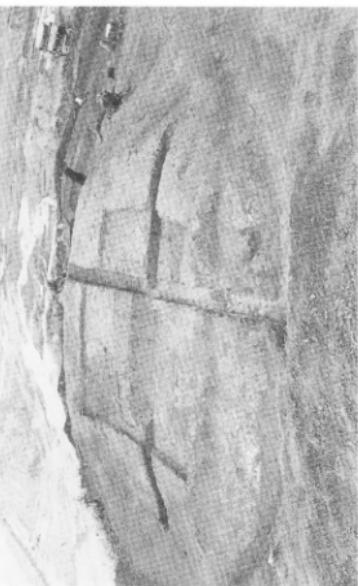
1.新井南谷9号墳、表土除去後（南東より）



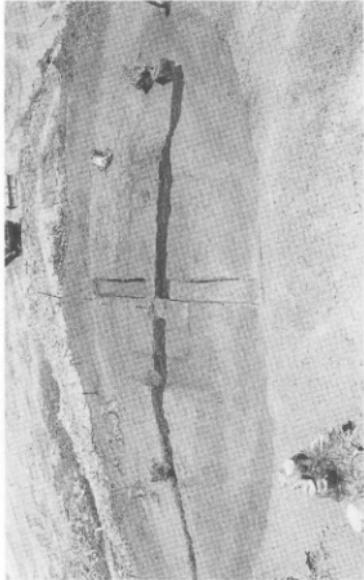
2.新井南谷9号墳、第1主体検出状況（南東より）



3.新井南谷9号墳、第1主体検出状況（南東より）



4.新井南谷9号墳、第1主体検出状況（南西より）



1. 新井南谷10号墳、表土除去後（南より）



2. 新井南谷10号墳、第1主体検出状況（南より）



3. 新井南谷10号墳、第1主体完振状況（南より）



4. 新井南谷10号墳、第1主体完振状況（西より）



1. 新井三鷗谷地区、JSK-01出土遺物



2. 新井三鷗谷 2号墳、第1主体出土遺物

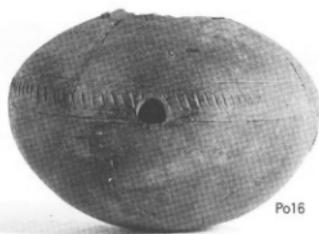
3. 新井三鷗谷 2号墳、第2主体出土遺物

図版38



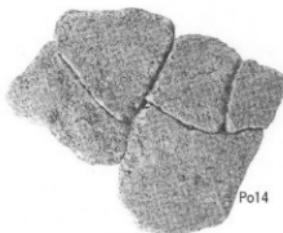
Po13

周溝内より



Po16

墓壇上面



Po14

墓壇上面

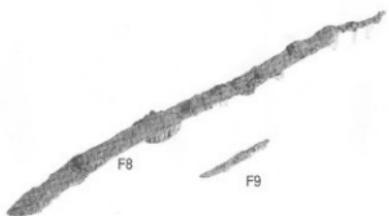


Po17

填丘盛土中より



Po15



木棺内

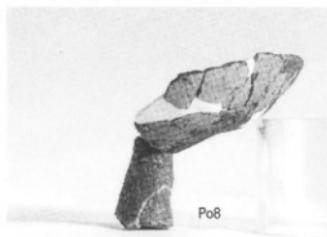
1. 新井三鷗谷 3号墳、出土遺物



Po17



Po7



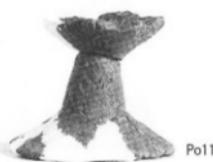
Po8



Po9



Po10



Po11



Po12

1. 新井三鷗谷 3号墳、出土遺物（周溝内）

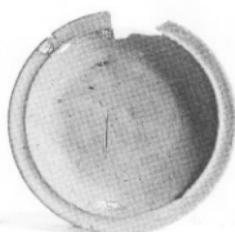
図版40



Po18



Po20



Po18



Po19

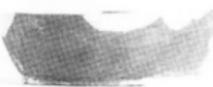
1. 新井三鷗谷地区、木棺墓出土遺物



Po5



Po21



Po22

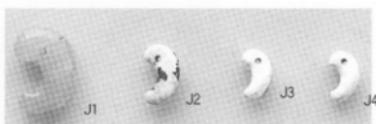
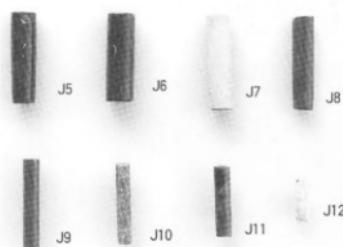
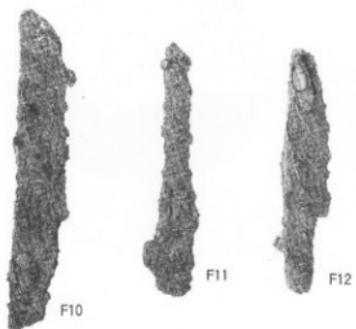
2. 新井三鷗谷地区、遺構外出土遺物



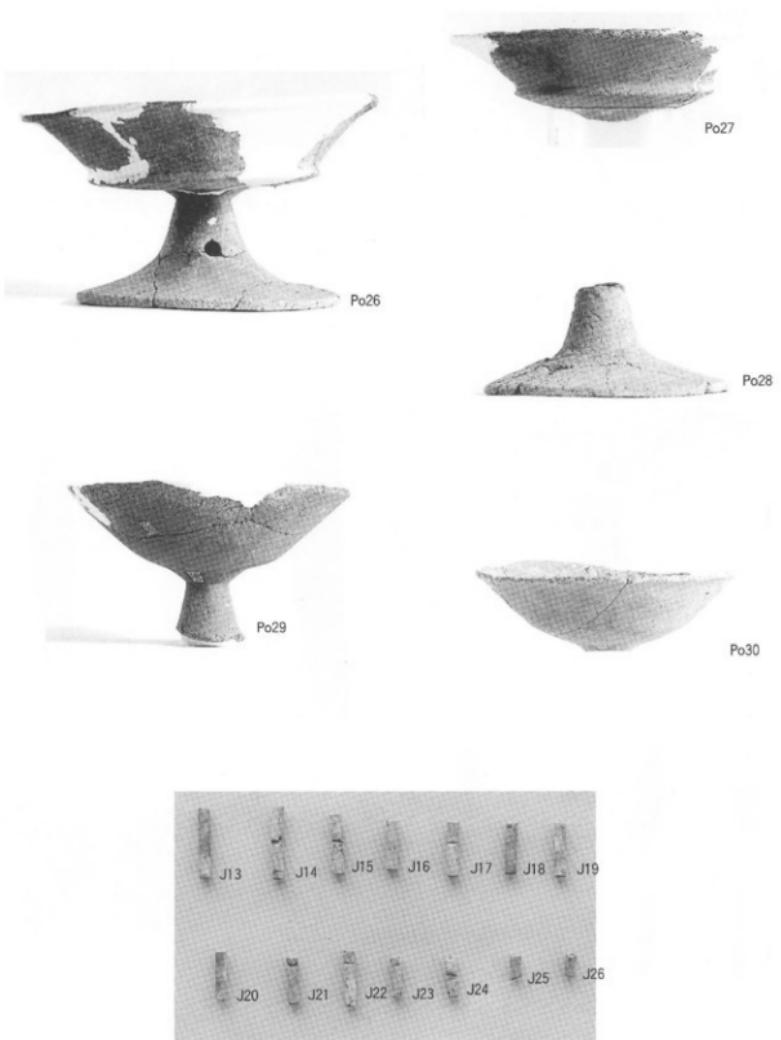
1. 新井南谷 1 号墳、第 1 主体出土遺物



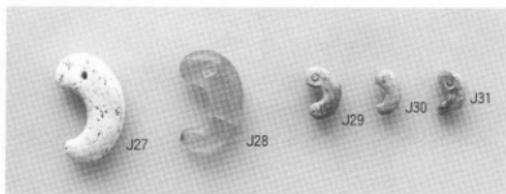
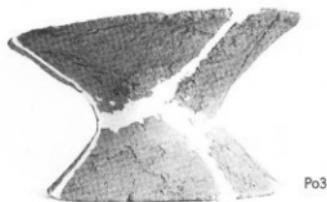
2. 新井南谷 2 号墳、出土遺物



3. 新井南谷 3 号墳、第 1 主体出土遺物

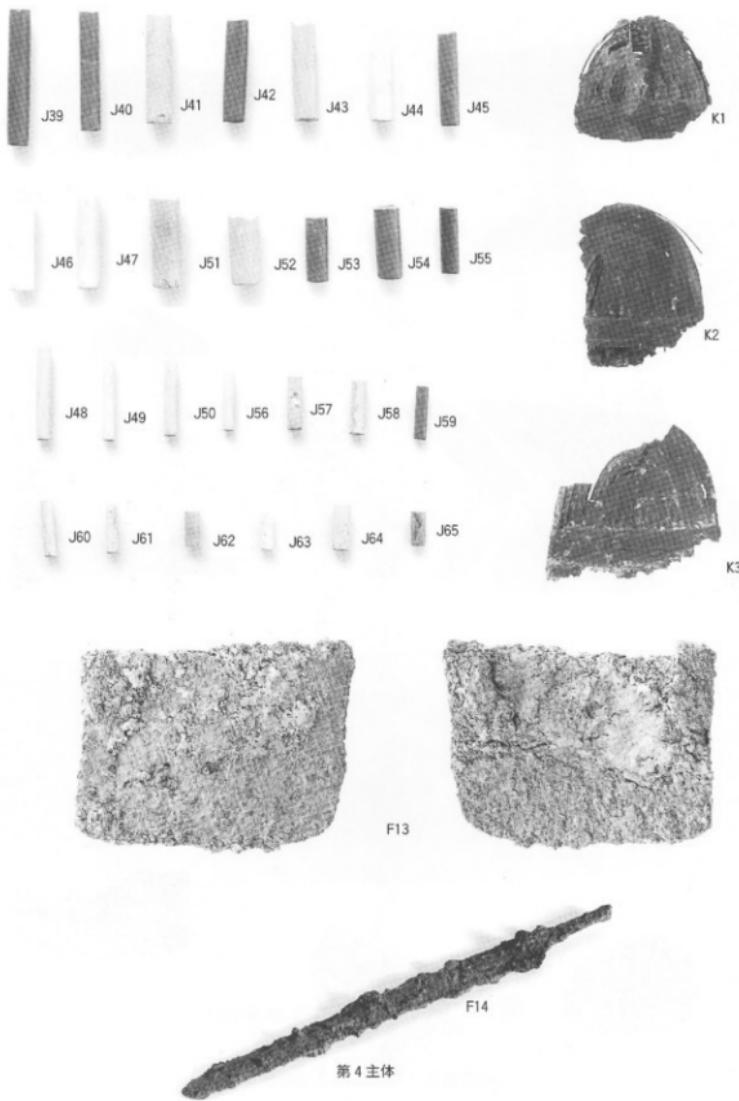


1. 新井南谷 3 号墳、第 2 主体出土遺物



1. 新井南谷 3 号墳、第 3 主体出土遺物

図版44



1. 新井南谷 3号墳、第3主体・第4主体出土遺物



Po36



Po37

1. 新井南谷 4 号墳、墳頂部出土遺物

2. 新井南谷 5 号墳、第 1 主体出土遺物



Po38



F15

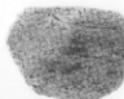


F16



F17

3. 新井南谷 5 号墳、第 3 主体出土遺物



Po39



Po40



Po41



Po42



Po43

4. 新井南谷地区、遺構外出土遺物

岩美町文化財調査報告書 第24集

新井三鷗谷遺跡発掘調査報告書

平成13年8月発行

編集 岩美町教育委員会

発行 〒681-0003 烏取郡岩美町諸富675番地1

Tel.(0857)73-1302

印刷 中央印刷株式会社

〒689-1121 烏取市南栄町34番地

Tel.(0857)53-2221
